

即チ被誹毀者ノ性質意見目的等ニ關スル事項ヲモ包含スルモノトス例
ヘハ彼ノ行爲ハ名ヲ慈善ニ籍リテ私利ヲ營ムモノナリト云フカ如シ
以上名譽ニ關スル大體ノ説明ヲ終リタルヲ以テ左ニ各本條ニ付テ説明ス
ヘシ

第三百五十八條

第三百五十八條ニ曰ク「惡事醜行ヲ摘發シテ人ヲ誹毀シタル者ハ事實ノ有
無ヲ問ハス左ノ例ニ照シテ處斷ス」

(一)公然ノ演說ヲ以テ人ヲ誹毀シタル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮
ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

(二)書類圖書ヲ公布シ又ハ雜劇偶像ヲ作爲シテ人ヲ誹毀シタル者ハ十五
日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

誹毀罪ノ
構成要件

即チ本罪ノ構成要件ヲ舉クレハ左ノ如シ(前段誹毀ニ關スル
一般ノ說明參照)

第一 他人ニ關スル惡事醜行ヲ摘發シタルコト

本條第一項ハ誹毀ノ定義ヲ示スモノニシテ「人ノ惡事醜行」トアル

ハ被誹毀者自身ニ關スル事實ヲ指スモノニシテ「惡事醜行」トハ他人カ第
三者ヨリ受クヘキ尊敬價值ヲ剝奪シ又ハ社會公衆ヨリ受クヘキ尊敬ヲ
減縮セシムヘキ能力アル事項ヲ總稱スルモノナリ但現實ニ此害ヲ生シ
タルト否トハ問フ所ニアラス惡事トハ以上ノ事項中被誹毀者ノ行爲以
外ニ屬スル總テノ事項ヲ包含スルモノト解スヘキナリ「摘發」トハ自己ノ
知覺スル所ヲ他人ニ主張スルカ或ハ事實ニ付テ未タ知ラサル所ノ他人
ニ傳播スルコトヲ意味ス法文ニハ具體的ニ摘發スルコトヲ必要トセザ
ルカ故ニ例ヘハ彼ハ竊盜ヲ爲シタルト主張スルモ又彼ハ何日何所ニ於
テ何人ノ財物ヲ竊盜シタルト主張スルモ共ニ事實ノ摘發ト云フヘキナ
リ又單純ナル判定モ時トシテハ同時ニ事實ノ主張ヲ包含スルコトアリ
例ヘハ彼ハ泥棒ナリト判定スルトキハ同時ニ彼ハ泥棒ヲ爲シタルモノ
ナリトノ事實ノ主張ヲ包含スルカ如シ次ニ現行刑法ハ其主張セラレタ
ル事實ノ有無ヲ問ハス誹毀ヲ以テ論スルコト、セリ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第一章 身 七四九
體ニ對スル罪 第十二節 誹毀及ヒ誹毀ノ罪

第二 法律ニ定メラレタル方法ニ依ラサルヘカラス

既遂ノ時
新聞紙條
例第二十
五條

即チ(一)公然ノ演説トハ限定セラレサル人衆ニ知覺セラレ得ヘキ狀況ニ於テ主張スルコトヲ意味ス(二)書類圖書ヲ公布トハ限定セラレサル人衆ニ交付セラルヘキ方法ニ於テ配布スルコトヲ意味ス(三)法文ニ「雜劇偶像ヲ作為シテ」トアリテ公然タルコトヲ明記セスト雖モ前記ノ場合ト權衡上公然タルコトヲ必要トスト解スヘキナリ終リニ注意スヘキハ以上(一)乃至(三)ハ誹毀罪ノ方法ヲ限定シタルニ過キスシテ本罪既遂ノ時期ハ第三者ニ依テ其事實ヲ知覺セラレタルトキニアリトスルコト是ナリ
尙ホ新聞紙條例第二十五條ニ於テハ誹毀ニ關スル特別規定ヲ設ケタリ即チ左ノ如シ
新聞紙ニ記載シタル事項ニ付キ誹毀ノ訴アル場合ニ於テ其私行ニ涉ルモノヲ除クノ外裁判所ニ於テ其人ヲ害スルノ惡意ニ出テス専ラ公益ノ爲メニスルモノト認ムルトキハ被告人ニ事實ヲ證明スルコトヲ許スコ

處罰條件

トヲ得若シ其證明ノ確立ヲ得タルトキハ誹毀ノ罪ヲ免ス其損害賠償ノ訴ヲ受ケタルトキモ亦同シ
同條ハ私行以外ノ事實ニ付テ新聞ニ依リ公益ノ爲メ人ヲ誹毀シタル者カ其事實ヲ證明シタルトキニ於テ其責任ヲ免除スヘキコトヲ規定シタルモノニシテ同條ハ事實ヲ證明シ得サルコトヲ以テ處罰條件トスルニ過キス而シテ處罰條件ハ誹毀罪ノ構成要件ニアラサルカ故ニ犯人カ假令事實ヲ證明シ得ヘシト誤解シタル場合又ハ誹毀ノ當時ハ之ヲ證明シ得ヘカリシモ誹毀罪審理ノ當時ニ於テ證人ノ死亡等ニ依リ之ヲ證明シ得サルヘキハ刑法第三百五十八條ノ原則ニ依テ其責任ヲ問フヘキナリ
次ニ同條ニ所謂私行ニ涉ルモノヲ除クノ外トハ直接ノ利害關係カ公衆ニ及ホスモノヲ謂フ從テ官吏公吏職務上ノ行為ハ勿論假令私人ノ行為ト雖モ學校教師銀行營業者神官僧侶等ノ職務營業ニ關スル行為ハ之ヲ包含ス

明治三十六年六月十六日宣旨大審院判決ニ依レハ其性質ニ於テ公共ニ關スル事項ヲ
處理スルノ上ニ於テ爲ス所ノ行爲ト解セリ

第三百五十九條

第三百五十九條ニ曰ク「死者ヲ誹毀シタル者ハ誣罔ニ出タルニ非サレハ前
條ノ例ニ照シテ處斷スルコトヲ得ス

死者ノ誹毀

本條ハ死者ノ生存セル親屬全體ノ名譽ヲ保護スルモノニシテ死者ニ對ス
ル親屬ノ宗教上ノ感情ヲ保護スルモノナリトノ說アルモ正當ナラス(死者
ニ關スル生存中ノ惡事醜行ヲ摘發シタルトキハ其事實カ虛偽ニ涉ルトキ
ニ限り誹毀罪ヲ構成スルモノトス)從テ其事實カ虛偽ニアラスト誤認シタ
ルトキハ犯意ナキカ故ニ本罪ヲ構成セス)

第三百六十一條ニ曰ク「此節ニ記載シタル誹毀ノ罪ハ被害者又ハ死者ノ親
屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス」

親告罪

誹毀罪ハ被誹毀者又ハ死者ノ親屬ノ告訴ヲ以テ訴ニ條件トス(刑事訴訟法
第五十四條
照參)

第三款 陰私漏告ノ罪

第三百六十條ニ曰ク「醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人若クハ神官僧
侶其身分職業ニ於テ委託ヲ受ケタル事ニ因リ知得タル陰私ヲ漏告シタル
者ハ誹毀ヲ以テ論シ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓
以下ノ罰金ヲ附加ス但裁判所ノ呼出ヲ受ケテ事實ヲ陳述スル者ハ此限ニ
在ラス」

陰私漏告
罪ノ構成
要件

本罪ノ構成要件ヲ擧クレバ左ノ如シ

第一 犯罪ノ主體ハ醫師藥商穩婆代言人辯護人代書人神官僧侶タルコト
法文ニ所謂醫師神官僧侶ニ付テハ別ニ説明ヲ要セス次ニ「藥商」トハ藥種
商及ヒ藥劑師ヲ意味シ「穩婆」トハ產婆ヲ意味シ「代言人」トハ辯護士ヲ指示
シ「辯護人」トハ彼ノ民事訴訟法刑事訴訟法ノ規定ニ依リ一時辯護人タル
コトヲ許可セラル、モノヲ意味ス代書人トハ佛文草案第四百二條日本
文草案第四百二條ニ所謂「公證人」ニ相當ス

日本刑法論(各論)

本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第一章 身 七五三
體ニ對スル罪 第十二節 誹毀及ヒ誹毀ノ罪

以上列記スル所ノ者ハ何レモ正常ノ手續ニ依リ此業務ヲ認メラレタル
モノタラサルヘカラス而シテ現行刑法ハ官吏公吏ニ付テ此種ノ犯罪ヲ
設ケサルハ缺點ナリトス又以上列記ノ業務ナキ者ト雖モ此等業務アル
者ノ爲メ補助ノ任ニ當ル者ニ付テモ同様ノ規定ヲ設クルノ必要アルヘ
シ本罪ハ身分犯罪ノ構成要件タルカ故ニ此身分ナキ者ハ教唆又ハ從
犯トシテ其責ヲ負フヘキノミ

第二 其身分職業ニ於テ委託ヲ受ケタル事ニ因テ知得タル所ノ陰私タル

コト

法文ニ「身分」トアルハ親屬關係ニ於ケル地位ト云フガ如キ嚴格ノ意義ニ
於テ用ヒラレタルニアラス後文ニ所謂職業(業務)ト同一義ニ解シテ可ナ
リ本條ニ依テ保護スル「陰私」ハ第一要件ニ於テ列記シタル職業アル者カ
各自ノ職業ノ執行ニ關連シテ知覺シタル所ノ陰私ニ限ルモノトス然レ
トモ其陰私ハ必スシモ特ニ他人ヨリ秘密ニスヘキコトヲ委託セラレタ

陰私

ルト否トヲ問ハス法律ハ汎々此種ノ陰私ニ付キ秘密ノ義務ヲ科スルモ
ノナリ次ニ法文ニ所謂「陰私」トハ私ノ關係ニ於ケル事實ニシテ而カモ之
ヲ秘密ニ保ツコトカ此事實ヲ負フ者ノ爲メニ利益ナル總テノ事實ヲ指
スモノナリ

第三 漏告スルコト

法文ニ所謂「漏告」トハ未タ知ラレサル事實ヲ他人ニ告クルコトヲ意味ス
(其公然タルト否サルトハ問フ所ニアラス)從テ既ニ世ニ公ニセラレタル
事實ハ之ヲ告クルモ漏告ト云フヘカラス又假令未タ世ニ公ニセラレサ
ル事實ナリト雖モ既ニ其事實ヲ知得セル人ニ對シ之ヲ告クルモ亦同シ
反之未タ或事實ノ眞實ナルコトカ世ニ公ニセラレタルニアラス單ニ眞
疑不確定ナル風評カ傳播シタルニ止マル場合ニ於テ之ヲ他人ニ告クル
トキハ漏告ト云フコトヲ得ルナリ次ニ本罪ハ陰私ニ關スル私人ノ利益
ヲ保護スルモノナルカ故ニ若シ其人ノ承諾ヲ得タルトキハ違法ニアラ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第一章 身 七五五
體ニ對スル罪 第十二節 誹告及ヒ誹毀ノ罪

消極的構
成要件

又法律上之ヲ漏告スルノ權限ヲ認メラレタルトキ亦同シ(民事訴訟法
第二百九十九
條第二號刑
事訴訟法第
百二十五條
第二號參照)而シテ本條但書ニ於テ裁判所ノ呼出ヲ受ケテ
事實ヲ陳述スル者ハ此限ニ在ラスト特ニ規定シアルヲ以テ但書ノ場合
ハ本罪ノ消極的構成要件ト認ムヘク從テ本罪ノ犯意ハ他人ノ陰私ヲ漏
告スルノ事實ヲ知ルコトノ外此消極的構成要件ヲ具備セサルコトヲ知
覺シタルコトヲ要ス本條法文ニ「誹毀ヲ以テ論ストアルヲ以テ次條誹毀
ノ罪ニ關スル第三百六十一條ノ規定ハ本罪ニモ適用アルモノトス而シ
テ同條ニ所謂本罪ノ被害者トハ陰私ヲ漏告スルコトニ依テ直接ニ其利
益ヲ害セラレタル者ヲ謂フ從テ本罪ノ被害者ハ多人數アリ得ルコトヲ
想像シ得ヘキナリ例ヘハ醫師カ甲ヲ診察スルニ當リ遺傳病アルコトヲ
知リ之ヲ漏告シタルトキハ其被害者ハ現ニ診察ヲ受ケタル甲者ニ限ラ
スシテ甲ノ血族者ハ總テ此被害者ニシテ何レモ告訴權アリト謂ヒ得ヘ
キナリ次ニ死者ニ關スル陰私ヲ漏告シタルトキハ其生存シタル親屬ニ

被害者

祖父母
母ニ對ス

於テ告訴權アリ(總則第十
章親屬例參照)

第十三節 祖父母、母、父母ニ對スル罪

本節ハ(一)犯人カ被害者ノ子孫タル身分アルニ依リテ其刑ヲ加重スル場合
(二)祖父母、父母ニ對シ必要ナル奉養ヲ缺クト云フ特別ノ罪ヲ規定シ(三)祖父
母、父母ニ對スル殺傷ノ罪ニ特別ノ宥恕及ヒ不論罪ノ例ヲ用ヒサルコトヲ
規定ス而シテ刑法ニ所謂祖父母、父母及ヒ子孫ノ範圍ニ付テハ刑法第百十
五條ニ於テ之ヲ規定ス即チ第百十五條ニ「祖父母ト稱スルハ高曾祖父母、外
祖父母同シ、父母ト稱スルハ繼父母、嫡母同シ、子孫ト稱スルハ庶子、曾孫、外
孫同シ、兄弟、姉妹ト稱スルハ異父、異母ノ兄弟、姉妹同シ、養子、其養家ニ於ケル
親屬ノ例ハ實子ニ同シ」以下本節ノ規定ニ付キ順ヲ追フテ説明スヘシ

第一 犯人カ被害者ノ子孫タル身分アルニ依テ其刑ヲ加重スル場合

第三百六十二條ニ曰ク「子孫其祖父母、父母ヲ謀殺故殺シタル者ハ死刑ニ
處ヌ其自殺ニ關スル罪ハ凡人ノ刑ニ照シ二等ヲ加フ」

刑罰加重
ノ場合

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第一章 身 七五七
體ニ對スル罪 第十三節 祖父母、父母ニ對スル罪

第三百六十三條ニ曰ク子孫其祖父母父母ニ對シ毆打創傷ノ罪其他監禁脅迫遺棄誣告誹毀ノ罪ヲ犯シタル者ハ各本條ニ記載シタル凡人ノ刑ニ照シ二等ヲ加フ但其癡疾ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處シ篤疾ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス
以上二條ハ祖父母父母ニ對スル特別ノ一罪ヲ規定シタルニアラスシテ犯人カ子孫タル身分アルニ依リ普通ノ刑ヨリ加重シタルニ過キス而シテ現行刑法カ本編第一章身體ニ對スル罪ノ内以上列記ノ犯罪ニ限り加重ノ情狀ヲ認メ其他祖父母ト父母ニ對スル墮胎罪猥褻姦淫罪ニ付キ此種ノ規定ヲ設ケサリシハ不權衡ノ誹ヲ免カレス

奉養ヲ缺ク罪

第二 祖父母父母ニ對シ必要ナル奉養ヲ缺ク罪
刑法第三百六十四條ニ曰ク子孫其祖父母父母ニ對シ衣食ヲ供給セス其他必要ナル奉養ヲ缺キタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス因テ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ亦前

條ノ例ニ同シ

本條ノ構成要件ヲ擧クレハ左ノ如シ

- 一 犯罪ノ主體ハ子孫タルコト(本法第百十條參照)
- 二 祖父母父母ニ對シテ必要ナル奉養ヲ缺キタルコト
 (イ) 必要ナル奉養トハ若シ之ヲ缺クトキハ生命若クハ健康ヲ傷害スルノ結果ヲ生スヘキ必要の供給ヲ意味シ例ヘハ飢エヲ防ク爲メニ食ヲ與ヘス病メルニ藥ヲ與ス凍エヲ防ク爲メニ衣ヲ與ヘス雨露ヲ避クヘキ居所ヲ與ヘサルカ如キヲ云ヒ注⁶⁷文ニ衣食ヲ供給セストアルハ必要ナル奉養ノ一例ヲ示シタルニ過キス而シテ必要の供給消極的供給タルコトヲ意味スルカ故ニ積極的ニ身體ノ健康ヲ増進スルニ有益ナル供給又ハ奢侈ノ供給ヲ含包セス(ロ) 法文ニ「缺キタル者」トアルハ供給ノ能力アルニ拘ハラス故ラニ之ヲ與ヘサルコト(不作爲)ヲ意味スルモノニシテ供給ノ能力ナキ者ハ供給ヲ與ヘスト云フ不作爲ヲ行フコトヲ得ス然レトモ自己ノ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第一章 身 七五九
體ニ對スル罪 第十三節 祖父母父母ニ對スル罪

責任ニ歸スヘキ原因ニ依リ故意ニ此無能力ヲ招キタルトキハ本罪ノ責任ヲ免カルヘカラス

明治三十二年七六七號同年七月三日宣告大審院判決ニ依レハ缺奉養罪ノ構成ニハ祖父母父母ノ飢餓ニ迫リタル事實ヲ必要トセスト解セルハ正當ナリ同罪ノ構成要件タル必要ノ奉養ヲ缺クトハ例ヘハ飢餓ヲ防クニ必要ナル供給ヲ缺クノ意義ニシテ爲メニ祖父母父母ニ於テ飢餓ニ迫リタルコトヲ條件トセサルヲ以テナリ

第三 祖父母父母ニ對シタル殺傷ノ罪ハ特別ノ宥恕及不論罪ノ例ヲ用ヒ

刑法第三百六十五條ニ曰ク祖父母父母ニ對シタル死傷ノ罪ハ特別ノ宥恕及ヒ不論罪ノ例ヲ用フルコトヲ得ス但其犯ス時知ラサル者ハ此限ニ在ラス

法文ニ特別ノ宥恕及ヒ不論罪トアルハ第三編第一章第三節第三百九條乃至第三百十六條ニ規定スル殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不論罪ヲ指スモノニシテ總則ノ宥恕及ヒ不論罪ノ規定ヲ含マサルモノトス而シテ本條規

第三百六十五條

定ノ結果トシテハ子孫ハ其祖父母父母ニ對シテハ正當防衛權ヲモ有セサルモノトス但立法論トシテハ過大ニ子孫ノ權限ヲ減縮スルモノト言ハサルヘカラス次ニ本條但書ハ總則第七十七條ノ適用ニ過キス

第二章 財産ニ對スル罪

第一節 竊盜ノ罪

竊盜罪ハ所有權ヲ侵害スル罪ノ一種ニシテ竊盜トハ不法ニ他人ノ所有物ヲ自己ノ物トシテ處分スル意思ヲ以テ暴行脅迫又ハ欺罔恐喝ノ手段ニ依ラス他人ノ保有ヨリ自己ノ保有ニ移スコトヲ云フ(本法第三百六十六條參照)他人ノ保有ヨリ移スコトヲ要スルカ故ニ委託物消費罪遺失物隱匿罪ト異ナル又自己ノ物トスル意思ノ實行ヲ俟タス自己ノ保有ニ移シタルトキヲ以テ既遂トナルモノニシテ其手段方法ハ暴行脅迫欺罔恐喝ニ出テサル點ニ於テ強盜及ヒ詐欺取財ト異ナルモノナリ尙ホ竊盜ノ定義ヲ分析スレハ左ノ如シ

第一 竊盜ノ目的物ハ他人ノ物タルコト

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 七六一
竊ニ對スル罪 第一節 竊盜ノ罪

竊盜罪ノ構成要件

有形物

(一)有形物タルコト 即チ場所ヲ占メ場所ヲ支配スル物質タルコトヲ要ス而シテ人ハ物ニ非ス假令實際上奴隸ノ如ク取扱ハル、モノト雖モ亦然リ次ニ人工ニ依テ人ノ肉體ヲ補充スル物質ニシテ之ヲ分離スルニ付テハ身體ヲ毀損スルコトヲ必要トスルモノ例之ハ醫術ニ因テ補充セラレタル附鼻ノ如キハ物ニ非ス之ニ反シテ義脚「カツラ」入齒ノ如キハ物云フコトヲ得又既ニ分離セラレタル内體ノ一部例之ハ頭髮ノ如キハ物ト云フコトヲ得ルナリ屍體及ヒ其一部モ亦物ト云フコトヲ得而シテ權利自體ハ物ト云フコトヲ得ス例之債權ノ如キ是ナリ然レトモ債權ヲ表示スル證書ハ固ヨリ物ナリ(明治二十九年大審院判決ニ依レハ權利義務ヲ證明スルハキ證書ハ乃チ一個ノ財產ナリ從テ之ヲ以テ特盜罪)液體瓦斯ノ如キハノ目的物ナリトナスコトヲ得ト解セルハ正當ナリ(明治三十七年大審院判決ニ依レハ瓦斯ハ一種ノ物體ナリ亦物ト云フコトヲ得ルモ)宣明治三十七年大審院判決ニ依レハ瓦斯ハ一種ノ物體ナリ有ルヲ以テ他人ノ製造ニ係ルモノハ同條ノ制裁ヲ免カレトナリ得ルモノハ正當ナリ之ニ反シテ力ハ物ト謂フコトヲ得ス例之ハ水若クハ水蒸氣

電氣力ハ物ニアラ

他人ノ所有物

力器械ヲ動ス所ノ力又ハ牛馬カ物ヲ引ク力電氣力ノ如キハ物ト謂フコトヲ得ス(明治三十六年(九)第七三號同年五月二十一日宣明大審院判決ニ依レハ電流ハ有體物ニ非サルモ電器ニ收容シテ獨立ノ存在ヲ有セシムルコトヲ得ヘキモノニシテ之ヲ電流ニ收容シテ獨立ノ存在ヲ有ルノ所持内ニ置キタル者ハ刑法第三百六十六條ニ所謂他而シテ物カ交換力ヲ有スルト否トハ問フ所ニ非サルナリ)
 (二)他人ノ所有物タルコト 即チ他人ノ所有權ニ屬スル物タルコトヲ要スルカ故ニ何人ノ所有權ニモ屬セサル物ニ付テハ竊盜ノ問題ハ生セサルナリ隨テ無主物遺棄物等ハ竊盜ノ目的トナラサルナリ而シテ天然自由ノ狀況ニアル野生ノ禽獸ハ無主物タリト雖モ一旦先占ニ因リテ所有權ヲ取得セラレタルモノ例之ハ動物園ニ於ケル野獸又ハ私有ノ河川ニ棲息スル魚類ハ目的物ト爲スコトヲ得ルモノナリ死屍ト共ニ埋葬セラレタル物件ハ所有者カ拋棄ノ意思ヲ表示セサル以上ハ竊盜ノ目的ト爲ルコトヲ得ルモノナリ死屍及ヒ其一部モ學術其他適法ナル目的ニ於テ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 七六三
 產ニ對スル罪 第一節 竊盜ノ罪

授受ノ目的物トナリタルモノハ竊盜罪ノ目的物ト爲リ得ルナリ例之ハ博物館又ハ解剖室ニ在ル人ノ骸骨ノ如キ是ナリ然レトモ其以外ノ死屍及ヒ其一部ハ目的物ト爲スコトヲ得ス(民法第九百八)明治二十九年七月九日宣言大審院判決ニ依レハ死者ノ遺骸ハ墳墓ト共ニ其相續人又承繼人ノ保有ニ屬ス從テ其竊取ノハ所爲ニ對シ遺骨ノ價格ヲ判定シ竊盜罪阻ヲ礙スルハ相當ノ裁判ナリ)而シテ苟クモ民法上所有權ノ目的物タル以上ハ國家若クハ行政區劃ノ如キ公法人ニ屬スル物モ亦竊盜ノ目的物ト爲スコトヲ得ルナリ遺産ハ相續人ノ確定以前ニ於テモ竊盜ノ目的タルコトヲ得ヘシ(民法第一千五百一十一條)所有權ノ目的物ハ必スシモ金錢ニ換價シ得ヘキ價值アルコトヲ必要トセス

竊盜ノ目的物ハ他人ニ屬スルコトヲ要スルカ故ニ他人ヨリ贈與セラレ又ハ他人カ所有權ヲ拋棄シタル物タルニ拘ハラス尙ホ他人ノ所有ニ屬スル物ト誤解シタルトキニハ竊盜ノ既遂ヲ以テ論スルコトヲ得ス次ニ共有物ハ共有者ノ一人ニ對シテ猶ホ竊盜罪ノ目的トナルコトヲ得ルナ

有他人ノ保

リ

(三)現實ニ動シ得ヘキ物タルコト 必スシモ民法上ノ動産タルコトヲ必要トセス例之ハ樹木ノ果實建造物ノ一部ノ如キモ亦竊盜ノ目的物ト爲スコトヲ得ルナリ

第二 他人ノ保有ニ屬スルコト

保有トハ現實ニ物ヲ支配スルコトヲ意味シ物ニ對スル純然タル事實關係ヲ云フ而シテ此事實關係ノ存否ハ吾人カ日常ノ習慣ニ從テ決スヘキ問題ナリ例之ハ吾人カ現實ニ物ヲ握手スル場合ノミナラス縱令之ヲ握手セス且家人ノ不在中ニ於テモ吾人ノ居宅ニ存在スル物ハ總テ保有スト謂ヒ得ルカ如シ之ト同一理由ニ依リテ馭者カ馬車ヲ戶外ニ留メ置ク場合ノ如キ又ハ農夫カ耕作地ニ農具ヲ置キ去ルカ如キ旅客カ手荷物ヲ從者ニ擔ハセテ隨行セシムルカ如キ商人カ店舗ニ於テ客人ニ物ヲ點檢セシムルカ爲メ商品ヲ手渡シスルカ如キ或ハ家畜カ自由ニ戶外ヲ逍遙

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 七六五
 產ニ對スル罪 第一節 竊盜ノ罪

シ若シ歸宅ノ習慣ヲ失ハサル限リハ何レモ前者ノ保有ハ繼續スルモノト謂フヘキナリ(墳墓内ニ埋メタル寶物ハ猶從前ノ保有者ノ保有ニ屬ス)之ヲ要スルニ保有ハ吾人日常ノ慣習ニ適當スル方法ニ於テ其物ノ上ニ支配力ノ存スルコトヲ認メ得ヘキ場合ニ於テ支配力ヲ有スル者カ其物ヲ保有スト謂フヘキナリ尙ホ保有ニ付テハ此事實關係ノ外更ニ之ヲ保有スルノ意思アルコトヲ要ス即チ保有ハ現實ニ物ヲ支配スルノ事實ト意思アルコトヲ必要トス故ニ例之客人カ主人ノ覺ラサル場所ニ脱置キタル外套ハ客人ノ保有ニ屬スルモノニシテ主人ノ保有スル所ニ非ス次ニ物ヲ保有スト云フニハ保有者ニ於テ目的物ノ何レニアルコトヲ覺知スルヲ必要トスト雖モ總括的ニ保有セラレタル物ノ中ニ存在スル各個ノ目的物ニ付テハ更ニ其何物タルコトヲ知覺スルコトヲ必要トセス例之ハ郵便受函ノ内ニ投入セラレタル總テノ郵便物其他打網ノ内ニ入リタル總テノ魚類書庫内ニ貯藏スル物等(書類等)ノ如キ是ナリ

保有ト占有ノ異同

以上説明シタルカ如ク保有ハ現實ニ物ヲ支配スル事實ト意思アルコトヲ必要トスルカ故ニ民法ニ所謂占有トハ必スシモ一致スルコトヲ要セズ即チ兩者ノ異ナル點ヲ擧クレハ左ノ如シ

(一)民法ニハ代理占有ヲ認ムルモ(民法第百八十一條參照)代理占有ニ因ル間接ノ占有者ハ物ヲ保有スト云フコトヲ得ス之ニ反シテ占有ヲ代理スル者ハ眞ノ保有者ナリ

(二)民法上ノ占有ハ自己ノ爲メニスル意思ヲ必要トスルモ(民法第百八十一條參照)保有ハ自己ノ爲メニスルト云フ意思ヲ必要トセス故ニ例之ハ下女下男及ヒ商家ノ使用人等ノ如キ主人ヨリ委託ヲ受ケテ現實ニ物ヲ支配スル所ノ人ハ(民法第百八十二條)主人ト共ニ保有者ノ一人ト云フコトヲ得ヘキモ民法上ノ占有者ニ非ス

(三)占有ハ相續ニ依リ直ニ承繼スルコトヲ得ヘキモ(民法第百八十七條參照)保有ハ承繼ヲ許サス隨テ遺產ハ相續人カ現實ニ之ヲ保有スト云フコトヲ得ル狀

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 七六七
 產ニ對スル罪 第一節 竊盜ノ罪

況ニ達スルマテハ相續人ノ保有ニ屬セサルモノトス故ニ例之ハ道路ニ斃死スル者ノ衣類其他携帶品ハ其相續人又ハ第三者ニヨリ現ニ保有セラル、マテハ縱令之ヲ剝取ルモ保有ヲ奪取シタルモノト云フヲ得サルナリ

共同保有

保有ハ必スシモ一人ノミニ屬スヘキニ非ス數人カ共同シテ保有スルヲ得ヘシ即チ(イ)數人カ同等ノ資格ニ於テ共同保有スル場合例之ハ一個ノ金匣ヲ開クニ必要ナル二個ノ鍵ヲ共同シテ保有スル場合(ロ)共同保有者ノ一人カ他ノ共同保有者ノ指圖ヲ受クル場合即チ前掲(ニ)ノ場合ニ說明シタル占有使用人カ保有者タルハ勿論之ヲ使用スル占有者モ亦日常ノ慣習ニ從テ其物ヲ保有スト謂ヒ得ルカ故ニ占有者ハ占有使用者ト共ニ同一物ヲ保有スト云フヘキナリ例之ハ主人カ下女ニ錠ヲ施セル荷物ヲ委託シタルカ如キ此場合ニ於テハ占有使用人ハ占有者ニ對シテ其保有ヲ奪フコトヲ得ルナリ下女カ皿ヲ盜ミ商家ノ手代カ商品ヲ盜ミ囚人

保有ノ喪失

カ獄衣ヲ盜ムカ如キ場合ニ屬スル共同保有ハ劣等ノ保有者ニ依テノミ之ヲ破ルコトヲ得ルモノニシテ優等ノ保有者ニ依テ共同保有ヲ破ルコトヲ得サルナリ次ニ貸借關係ノ當事者ハ次ノ如キ場合ニ於テハ共同保有者ト云フコトヲ得ヘシ即チ貸主カ貸與シタル場所へ貸主又ハ其雇人カ自由ニ出入シ得ル場合例之ハ學生ニ貸與シタル寄宿室又ハ旅宿室ノ如キ貸主又ハ其小使又ハ下女等カ掃除ノ爲メニ自由ニ其場所へ出入スルコトヲ得ルトキニ於テ借主カ貸與セラレタル居間ノ裝飾品ヲ窃取スルカ如キ圖書館ニ於テ圖書ヲ借受ケタル場合ニ其圖書ヲ窃取スルカ如シ

第三 他人ノ保有ヨリ自己ノ保有ニ移スコト

即チ他人ノ保有ヲ失ハシメ更ニ自己ノ保有ニ移スコトヲ要ス

(一) 保有ノ喪失 トハ日常ノ慣習ニ適當スル所ノ方法ニ依リテ物ヲ支配スル意思ヲ實行スルコトノ不能ナル狀況ニ達シタルコトヲ意味ス其狀

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第三章 財 七六九 第一節 竊盜罪

況ハ保有者ノ意思ニ基クモノト否サルモノトアリ即チ遺失物ハ此狀況ニ在ルモノナリ飼養ノ家畜カ逃走シタル場合亦然リ之ニ反シテ自己ノ居宅内ニ於テ物ノ置場ヲ忘レタル場合ハ未タ其物ノ保有ヲ失ヒタリト云フニトヲ得ス然レトモ公衆カ知覺シ得ヘキ場所ニ物ヲ置キ忘レタル場合ニ於テハ普通ニ保有ヲ失ヒタリト云フコトヲ得ヘシ爰ニ注意スヘキハ他人カ保有スル場所ノ内ニ物ヲ置キ忘レタルカ爲メ其物ノ保有ヲ失ヒタル場合ハ其物ノ保有ハ其場所ノ保有者ニ歸スルコトヲ得ルコト是ナリ若シ此場合ニ此場所カ私ノ場所ニ係ルトキハ勿論公ノ場所ニ於テモ亦然リ例之ハ旅館ノ如キ場所ノ保有者カ其物ヲ支配スル意思ヲ生シタルトキニ於テ其物ヲ保有スト云フコトヲ得ルナリ故ニ旅館内ニ於テ主人カ客ノ置忘レタル荷物タルコトヲ知覺シ且之ヲ現ニ管理シタルトキハ保有ハ其人ニ歸シタリト云フコトヲ得ヘシ故ニ他人之ヲ持去レハ竊盜トナリ主人之ヲ消費スレハ遺失物法違反トナルヘ

シ(可)法第十條第二項第十六條參照

明治三十三年(レ)第一二一號同年三月十三日宣告大審院判決ニ依レハ建造物内ニ於テ物件ヲ拾得シタル後之ヲ所有者ニ交付セスシテ隱匿シ若クハ不正ニ處分シタル所爲ハ遺失物隱匿罪ニシテ拾得スル當時竊取スルノ意思アリシトキハ竊盜罪ヲ構成スト解セルハ誤見ナリ

保有ヲ自己ニ移スコト

(二)自己ノ保有ニ移スコト 他人ノ保有ヨリ自己ノ保有ニ移ス手段方法ニ付テハ法律ニ限定ナク又前ノ保有者カ正當ニ保有スルト否トハ問フ所ニ非ス又其保有者ノ何人タルコトヲ犯人カ知覺シタルコトヲ必要トセス又他人ニ知ラシメスシテ其保有ヲ移スコトヲ必要トセス但暴行脅迫又ハ欺罔恐喝ノ手段ニ依ラサルコトヲ要ス例之ハ小兒及ヒ精神病者ハ自ラ物ヲ保有シ且之ヲ拋棄スルコトヲ得ヘシト雖モ他人ニ保有ヲ引移スコトヲ得サルカ故ニ之レヲ勸誘シテ物ヲ引渡サシメタルトキハ承諾ニ因ラスシテ保有ヲ移シタルモノト云フコトヲ得ヘシ(犬ヲ使用シテ又ハ瓦斯管ノ栓ヲ開クコトニ依テ保有ヲ移スコトヲ得ヘシ)而シテ如何

日本刑法論(各論) 本論 第三編 具體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 七七二
 產ニ對スル罪 第一節 竊盜罪

ナル場合ニ於テ物ヲ自己ノ保有ニ移シ終リタリト云フコトヲ得ヘキヤ
 換言スレハ窃盜既遂ノ時期ニ付テハ單ニ物ヲ握リト云フノミ(Kontaktat
 ionstheorie)ヲ以テ常ニ必スシモ保有ヲ移シ得タリト云フコトヲ得ス之ニ
 反シテ必スシモ物ヲ他ノ場所ニ移ス(Ablationsstheorie)ト云フコトヲ必要ト
 セス又物ノ奪取ヲ全然安固ニスルコト (Illationsstheorie)ヲ必要トセス之ヲ
 要スルニ犯人カ物ノ上ニ支配力ヲ實行シ得ル狀況ニ達シタルトキヲ以
 テ既遂トナルナリ (Apprehensionsstheorie)此程度ニ達シタルヤ否ヤハ各場合
 ニ付テ決スヘキ事實問題ナリ故ニ例之ハ他人ノ犬ヲ連鎖ヨリ切放シ然
 ル後之ヲ竊取スルノ目的ヲ以テ其連鎖ヲ切りタルトキハ竊盜ノ未遂ニ
 シテ更ニ犬ヲ捕ヘタルトキヲ以テ既遂ト爲ル又後刻運ヒ去ルノ目的ヲ
 以テ他人ノ倉庫内ニ於テ其貯藏物ノ一部ヲ同一ノ場所ニ匿シタルトキ
 ハ竊盜ノ未遂ナリ之ニ反シテ下女カ家主ニ於テ洗濯物ヲ自己ノ部屋又
 ハ荷物ノ内ニ藏匿シタルトキハ竊盜ノ既遂トナルヘシ何トナレハ後ノ

場合ニ於テハ犯人ハ普通ニ其物ノ上ニ支配力ヲ行フコトヲ得且ツ直ニ
 其保有ヲ回復セラル可キ著大ノ狀況存在セサルヲ以テナリ要之犯人カ
 一時タリトモ安全ニ物ヲ支配スル狀況ニ達シタルトキヲ既遂ト云フナ
 リ

明治三十七年(レ)第二一五七號同年一月二十二日宣告大審院判決ニ依レハ強竊盜ヲ爲
 スニ當リ其所爲ヲ分擔シ見張ヲ爲シ以テ犯罪實行ヲ妨クヘキ事實ノ存在ヲ排除スル
 ノ所爲ハ即チ實行ノ所爲ト相待テ犯罪成立ニ必要缺クヘカラサルモノナルヲ以テ實
 行ノ行爲ニ外ナラスト解セルモ單ニ見張ヲ爲シタルノミニテハ犯罪實行ヲ妨クヘキ
 障害ヲ排除シタリト云フコトヲ得ス單ニ實行ヲ獎勵シ容易ナラシメタルニ過キサル
 カ故ニ從犯ヲ以テ論スヘキナリ

(三)竊取 トハ前保有者ノ承諾ナクシテ其保有ヲ破リ自己ノ保有ニ移ス
 コトヲ意味スルカ故ニ實際前保有者ノ承諾(此ノ承諾ハ必スシモ法律上
 得ヘキ承諾ニテモ足レリトス)アルトキニ於テハ竊取ト云フコトヲ得ス
 此承諾ハ前保有者ノ保有カ破ラル、當時ニ於テ存在スルコトヲ要スル

日本刑法論(各論) 本論第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 七七三
 竊ニ對スル罪 第一節 竊盜罪

ヲ以テ一旦前保有者ノ承諾ナクシテ其保有ヲ破リタル以上ハ縱令其犯人カ之ヲ自己ノ保有ニ移ス當時ニ於テ前保有者ノ承諾アルモ窃取タルコトヲ妨ケサルナリ

明治三十四年(レ)第九〇五號同年六月二十一日宣告大審院判決ニ依レハ竊盜ノ目的ヲ以テ家屋内ニ忍入り金品ノ入レアル籠箆ノ前ニ至リタル所爲ハ犯罪ノ豫備ニ非スシテ其實行ニ着手シタルモノト解セリ

犯意

第四 犯意及ヒ目的

(一)犯人カ他人ノ所有物ナルコト且他人ノ保有ニ屬スル物ヲ保有者ノ承諾ナクシテ其保有ヲ破リ之ヲ自己ノ保有ニ移スト云フ事實ヲ知リタルコトヲ必要トス故ニ犯人カ自己ノ所有物ト誤信シタル場合無主物ト誤信シタル場合遺失物ト誤信シタル場合ニ於テハ窃取ノ意思ナキモノト云フヘシ而シテ保有者ノ承諾アルモノト誤信シタル場合ニ於テモ亦窃取ノ意思ナシト云フヘシ然レトモ所有者並ニ保有者ノ何人タルコトヲ

自己ノ物トスル目

知リタルコトヲ要セス

(二)窃取ハ行爲者カ自己ノ物トスル目的ヲ以テ爲シタルコトヲ意味スト解スヘキナリ自己ノ物トストハ自己カ其物ノ眞ノ所有者ト爲ルト謂フノ義ニ非ス又一時其物ヲ所持スル爲メト謂フノ義ニモアラス要スルニ物ヲ前保有者ヨリ永久ニ奪ヒ且其所有者カ物ノ上ニ行フヘキ處分行爲全部ヲ行フノ目的ヲ以テト謂フノ意味ナリ斯ノ如ク自己ノ物トストハ正確ナル法律上ノ意義ヲ有セサルカ故ニ經濟的觀念ニ依リ之ヲ説明セサル可カラヌ即チ此遠因ハ消極的及ヒ積極的ノ二個ノ關係ヲ必要トス而シテ消極的的關係ニ於テハ權利者ヨリ其物ノ經濟上ノ價值ヲ奪フノ意思(遠因)アルコト積極的的關係ニ於テハ其物ノ經濟上ノ價值ヲ自己ニ取得シ之ヲ處分スル意思アルコトヲ要ス換言スレハ權利者ヨリ目的物ノ經濟上ノ價值ヲ奪ヒ自己ノ經濟上ノ利益ノ爲メニ之ヲ處分スルノ意思ヲ云フ然レトモ自己ノ物トスル意思即チ物ヲ自己ノ財產ニ持來スト云フ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 七七五
產ニ對スル罪 第一節 竊盜罪

意思ト自己ヲ利得セシムル意思即チ自己ノ財産ヲ増殖スルノ意思トハ區別スルコトヲ要ス而シテ後ノ意思ハ竊取ニ付テノ要件ニ非ス故ニ縱令他人ノ物ヲ竊取スルニ當リ同時ニ其被害價格ニ相當スルモノヲ殘シ置クモ自己ノ物トスルノ意思アリト云フコトヲ得ヘク又債權者カ正式ノ手續ヲ履行セス債權金額ヲ債務者ヨリ竊取シタル場合亦同シ

物ヲ毀損
アル意思
アル場合

以上説明シタル所ニ依リ左ノ結果ヲ生ス
(イ)物ヲ毀損スル意思アル場合ニハ其物カ犯人ノ目的トスル毀損ノ方法ニ依リテ其物ノ所有權ニ伴フ經濟上ノ價值カ認めラル、トキニ限リ此遠因アリト云フコトヲ得ヘレ例ヘハ食料品ヲ食シ又ハ彈丸ヲ發射スル

物ヲ返還
アル意思
アル場合

ノ目的ヲ以テ之ヲ竊取スルカ如シ
(ロ)權利者ニ物ヲ返還スル意思アル場合ニハ犯人カ一旦其物ノ所有權ニ付テ經濟上ノ價值ヲ消耗シタル後ニ返還スル意思アリテ竊取シタル場合ニ此遠因アリト云フヲ得ヘシ故ニ例ヘハ下女カ返還スルノ意思ヲ以

テ一時主人ノ衣類ヲ取出シタルトキハ此遠因アリト云フコトヲ得ス之ニ反シテ貯金通帳ヲ貯金銀行ニ差出し貯金ノ拂戻ヲ受ケタル後ニ返還セントノ意思ヲ以テ之ヲ竊盜スルトキハ此遠因アリト云フコトヲ得ヘシ蓋シ貯金通帳ハ其貯金額ノ拂戻ヲ受クル爲メ行使スルコトニ因テ通帳ノ經濟上ノ價值ハ消耗スルヲ以テナリ反之單ニ他ニ質入又ハ抵當ト爲シ後日之ヲ受戻シ返還スルノ意思ヲ以テ竊取スルトキハ之カ爲メ所有者ハ其物ニ對スル經濟上ノ價值ヲ奪ハレタリト云フコトヲ得サルヲ以テ此場合ニハ此遠因アリト云フコトヲ得サルナリ債權者カ債務者ノ所有物ヲ賣却シテ自己ノ債權ニ充當スル目的ヲ以テ之ヲ盜取スレハ此遠因アリト云フコトヲ得ヘキモ之ニ反シテ單ニ督促ノ方法トシテ債務者ノ所有物ヲ竊取シタルノミニテハ此遠因アリト云フコトヲ得ス竊取者自身ノ利益ト權利者ノ利益トハ互ニ相對抗スルコトヲ要スルカ故ニ竊取者カ權利者ノ利益ノ爲メニ處分スルノ目的ヲ以テシタルトキ

日本刑法論(各論)二水論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 七七七
竊盜罪 第一節 竊盜罪

ハ此遠因アリト云フ可カラス之ニ反シテ苟クモ所有者ノ利益ト相反スル以上ハ縱令竊取者カ收得シタル物ヲ第三者へ有償又ハ無償ニテ移轉スルノ目的ヲ以テ竊取シタルトキト雖モ此遠因アリト云フコトヲ得ヘシ

不法ノ認

(三)竊取ハ不法ニ自己ノ物トスル意思アルコトヲ要スト解スヘキヲ以テ例へハ所有者ノ承諾アリ又ハ法律ニ於テ權利行爲ト認メラル、場合(民法第二百三十條第二項參照)ナリト誤信シタルトキハ不法ノ意思ナキヲ以テ本罪ヲ構成セス

竊盜罪ノ被害者

第五 終リニ竊盜ノ被害者ハ誰ナルカト云フニ付キ左ノ三說アリ

第一說 物ノ所有者ノミカ被害者ナリトノ說(關連刑法第二百四十二條以下ノ解釋ニ付フオンハイル氏ビンゲン氏下ホサ氏メルケル氏ハ此說ヲ採レリ)

第二說 物ノ保有者ノミカ被害者ナリトノ說 此說ニ曰ク竊盜罪ハ他人ノ所有權ヲ侵害スルノ目的ニ於テ其手段トシテ他人ノ保有ヲ侵害ス

ルノ所爲ニ外ナラス竊盜ニ因リ現實ニ侵害セララル、利益ハ保有ニシテ刑法上所謂被害者トハ犯罪ニ因テ直接ニ侵害セララル、利益ノ享有者ヲ指スモノナルカ故ニ竊盜罪ニ付テハ此犯罪ニ依テ侵害セララル、直接ノ被害者ハ保有者ノミナリト謂フコトヲ得ヘシ(關連刑法第二百四十二條以下ノ解釋ニ付テリ)

スト氏ビュンゲル氏ラテナウ氏シユツエ氏ハ此說ヲ採レリ)

第三說 竊盜罪ノ被害者ハ物ノ所有者及ヒ保有者雙方ナリトノ說 此說ニ曰ク竊盜罪ハ一面ニ於テ他人ノ所有物ヲ自己ノ保有ニ移スコトニ依テ所有者カ其物ノ上ニ權利ヲ行フコトヲ妨ケ一面ニ於テハ他人ノ保有ヲ奪フコトニ因テ保有者ノ利益ヲ侵害スルカ故ニ所有者並ニ保有者共ニ本罪ノ被害者ナリト謂フ可キモノナリト(關連帝國裁判所判例アリ)

以上三說中第三說ハ普通ニ行ハル、學說ニシテ余輩モ亦此說ニ贊スルモノナリ

第三百六十六條

明治二十九年法律第十九號

以下各本條ニ付キ項ヲ追フテ説明セント欲ス

第一項 普通ノ竊盜罪

第三百六十六條ニ曰ク「人ノ所有物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ノ罪ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス」ト本條ノ説明ハ前述シタル所ヲ参照スレハ自ラ明カナルヲ以テ爰ニ之カ説明ヲ省畧スヘシ
唯一ノ注意スヘキコトハ本條ニ關シテハ特別ノ規定アルコト是ナリ即チ明治二十三年法律第九十九號第一條ニ「家屋其他ノ建造物外ニ於テ犯シタル竊盜ニシテ未タ遂ケサル者又ハ已ニ遂ケタルモ其贖額五圓ニ充タサル者ハ十一日以上二月以下ノ重禁錮ニ處ス」トアリ同條ハ建造物外ニ於ケル(一)竊盜未遂(二)贖額五圓未滿ノ竊盜既遂ニ付キ特ニ其刑ヲ輕減スルコトヲ規定シタルモノニシテ同條ニ所謂「建造物」トハ苟クモ土地ト定着シ家根及ヒ牆壁ヲ有シ人ノ出入ニ適スル建築物ヲ總稱シ其一時的タルト否トハ問フ所ニ非ス倉庫ハ勿論劇場、勸工場、汽車ノ待合所等ヲモ包含スルモ(明治三十

建造物外ノ竊盜物トシテ區別スル標準

第五三五號同年五月十二日宣告大審院判決ニ依レハ「建造物」トハ「待合所」ニ於テ他人ノ所有物ヲ竊取シタル所爲ハ屋外竊盜ニ非スト解セルハ「正當」馬車、人力車、汽車、船舶、汽船等ヲ包含セス又人ノ出入ニ適スルコトヲ要スルカ故ニ單純ナル犬小屋、鳥小屋ニシテ人間ノ出入ニ不適當ナル建築物ヲ包含セス「家屋」トハ人類ノ住居ニ充ツル目的ヲ有スル建造物ヲ云フ而シテ現ニ人ノ住居スルト否トハ問フ所ニ非ス次ニ建造物外ノ竊盜ナルヤ將タ建造物内ノ竊盜ナリヤヲ區別スルノ標準ハ竊盜ノ目的物カ建造物内ニ在ルヤ否ヤニ依テ決スヘキモノニシテ犯人カ建造物内ニアルヤ否ヤハ問フ所ニ非ス蓋シ苟クモ竊取ノ目的物カ建造物内ニ存在スル以上ハ縱令犯人カ建造物外ニ在ルモ竊盜ノ現象ハ建造物内ニ發生シタリト云フヘキヲ以テナリ

明治三十四年(九)第九四八號同年六月二十八日宣告大審院判決ニ依レハ「家屋其他ノ建造物外ニ於テ犯シタル竊盜」明治二十三年法律第九十九號「トハ看守ノ周到ナラサルニ乘シ犯シタル竊盜ヲ云フ故ニ此屋外竊盜ナリヤ否ヤハ「看守」ハ「程度如何」ニアリテ「家屋」ナル物體ニ依リテノミ區別スルヲ得サルモノトス從テ兩戸ヲ鎖シタル後看守ノ行キ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 七八一

届カサル兩戶外ノ棧側ニアリタル物品ヲ竊取シタル所爲ハ屋外窃盜ヲ以テ論スヘキ
モノト解セリ同判旨ニ依レハ兩戶ヲ鎖ササル以前ニ於テハ屋内窃盜ヲ以テ論スルコ
トナリ明治三十四年(元)第一六一三號同年十二月三日宣告大審院判決ニ依レハ軒下
ニ釣下ケアル干竿ニ掛ケアル物品ヲ家人ノ監守ノ隙ニ乘シ盜取シタル所爲ハ通常竊
盜ニシテ屋外窃盜ニ非スト解セルハ誤見ナリ

第三百七十二條

第三百七十二條ニ曰ク「田野ニ於テ穀類菜葉其他ノ產物ヲ竊取シタル者ハ
一月上一年以下ノ重禁錮ニ處ス」

第三百七十三條

第三百七十三條ニ曰ク「山林ニ於テ竹木礦物其他ノ產物ヲ竊取シ又ハ川澤
池沼湖海ニ於テ人ノ生養シ若クハ營業ニ關スル產物ヲ竊取シタル者ハ亦
前條ニ同シ」

以上二個條ニ所謂產物トハ田野若クハ山林等ヨリ生スル天然ノ果實ヲ總
稱スルモノニシテ既ニ元物ヨリ分離シタルト否トハ問フ所ニ非ス故ニ一
旦收穫シタル穀類ト雖モ苟クモ其元物タル田野又ハ山林等ニ存在スル物
ニ付テハ本條ノ適用アルナリ

明治三十五年(元)第二三二號同年三月六日宣告大審院判決ニ依レハ田野ニ蒔取リアル
稻ヲ竊取シタル所爲ハ刑法第三百七十二條ノ田野ニ於テ穀物菜葉其他ノ產物ヲ竊取
シタル者ニ該當スト解セルハ正當ナリ

第三百七十四條

第三百七十四條ニ曰ク「牧場ニ於テ牧畜ノ獸類ヲ竊取シタル者ハ二月以上
二年以下ノ重禁錮ニ處ス」ト

同號第二條

以上三個條ニ付テハ左ノ如キ特別ノ規定アリ即チ
明治二十三年法律第九十九號第二條ニ曰ク「田野山林川澤沼池湖海ニ於
テ其產物ヲ竊取セントシ又ハ牧場ニ於テ其獸類ヲ竊取セントシテ未ダ
遂ケサル者又ハ已ニ竊取シタル者其贖額五圓未滿ノモノ亦前條ニ同
シ」

終リニ注意スヘキコトハ明治二十三年法律第九十九號屋外竊盜律ハ刑法
ニ規定スル普通竊盜罪ニ對スル例外ノ規定ナルヲ以テ左ノ結果ヲ生スル
コト是ナリ

(一)刑法ノ竊盜罪ニハ監視ノ附加刑アルモ(本法第三百七十六條參照)同號屋外竊盜ニハ監視ヲ附加セス

(二)刑法ニ規定スル加重ノ情狀アル竊盜罪(本法第三百六十條以下參照)ニ付テハ同號屋外竊盜律ハ適用ナシ

明治三十六年(七月三五號)同年五月八日宣告大審院判決ニ依レハ明治二十三年法律第九十九號第一條(屋外竊盜ノ規定)ハ普通竊盜ニ關スル刑法第三百六十六條ノ例外ニシテ水火震災其他ノ變ニ乘シテ犯シタル竊盜(刑法第三百六十七條)及ヒ門戶牆壁ヲ踰越損壞シ若クハ鎖鑰ヲ開キテ犯シタル竊盜(刑法第三百六十八條)ノ場合ニ適用スハキ法律ニ非スト解セルハ正當ナリ

第四百二十九條第十六號參照

第二項 加重ノ竊盜

第三百六十七條乃至第三百七十條ニ於テ四個ノ特別加重ノ情狀ヲ認ム

第一 水火震災云々

第三百六十七條ニ曰ク水火震災其他ノ變ニ乘シテ竊盜ヲ犯シタル者ハ

第三百六十七條

屋外竊盜ノ加重關係

變

第三百六十八條

六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

「**法文ニ所謂其他ノ變トハ總テ被難者カ物ノ保有ヲ確實ニスルコトノ注意ヲ爲ス能ハサル狀況ヲ總稱シ水火震災ハ其例示ニ過キス乗シトハ機會ヲ利用シテト謂フノ意ニシテ犯人ニ於テ此機會ヲ利用スルノ意思アルコトヲ要スルヤ勿論ナリトス**

第二 門戶牆壁云々

第三百六十八條ニ曰ク門戶牆壁ヲ踰越損壞シ若クハ鎖鑰ヲ開キ邸宅倉庫ニ入り竊盜ヲ犯シタル者ハ亦前條ニ同シ即チ本條加重ノ情狀トシテハ

(一)門戶牆壁ヲ踰越損壞シ若クハ鎖鑰ヲ開クコト

法文ニ所謂(1)門戶牆壁トハ邸宅又ハ倉庫へ侵入スルコトヲ防ク爲メニ設ケラレタル外圍ノ保障物ヲ云フ溝堀ノ堤ヲモ包含ス但普通人ノ容易ニ跨ケ又ハ通過シ得ル所ノ物ハ保障物ト云フコトヲ得ス(2)踰越損壞ト

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 七八五
產ニ對スル罪 第一節 竊盜ノ罪

ハ保障物ヲ排除シ若クハ其效力ヲ無効ナラシムルコトヲ意味シ天窓又
ハ下水口ヨリ侵入シ其他普通ニ人ノ出入セサル部分ヨリ侵入スルトキ
ハ踰越ト云フコトヲ得ヘシ(3)鎖鑰トハ廣ク戸締リノ要ニ供セラレタル
物ヲ總稱シ金屬ヲ以テ製セラレタルト否トハ問フ所ニ非ス而シテ此鎖
鑰ハ外圍ノ保障物タル門戸牆壁ニ施サレタルモノニ限り金庫箆等ニ
施サレタルモノヲ包含セス

(二)邸宅倉庫内ニ入り竊盜ヲ爲シタルコト
邸宅トハ家屋並ニ其外圍ノ保障物ニ依リ圍繞セラレタル部分ヲ包含ス
ルモノニシテ現ニ人ノ住居シタルト否トハ問フ所ニアラス倉庫トハ建
造物中特ニ物品ヲ貯藏スル爲メニ設ケラレタルモノニシテ其以外ノ建
造物ニ付テハ別ニ規定ナキカ故ニ家屋倉庫以外ノ建築物ニ侵入スルモ
本條ノ適用ナシ而シテ第一要件ノ行爲ハ第二要件ノ行爲ノ手段トシテ
行ハレタルコトヲ必要トスルカ故ニ門戸牆壁ヲ踰越スル當時ニ於テ竊

第三百六十九條

取ノ意思ナキトキハ縱令侵入シタル後ニ竊盜ノ意思ヲ生スルモ本條ノ
適用ナシ

第三 二人以上共ニ竊盜罪ヲ犯シタル場合

第三百六十九條ニ曰ク二人以上共ニ前三條ノ罪ヲ犯シタル者ノ各一等
ヲ加フ

二人共同

本條ハ二人以上共同シテ竊盜ノ罪ヲ犯シタル場合ヲ規定スルモノニシ
テ竊盜共犯者ノ内教唆者ハ二人以上ト云フ人數ノ内ニ算入スルコトヲ
得ス(本法第百七條參照)共同正犯ノミヲ包含ストノ説ト共同正犯ノ外ニ現場ニア
ル從犯者ヲ包含ストノ説アリ前説ヲ可トス蓋シ本條特ニ刑ヲ加重スル
所以ハ二人以上共同シテ罪ヲ犯ストキハ犯スニ易ク防クニ難キヲ以テ
ナリ

第四 兇器ヲ携帯シ云々

第三百七十條

第三百七十條ニ曰ク兇器ヲ携帯シテ人ノ住居シタル邸宅ニ入り竊盜ヲ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 七八七
產ニ對スル罪 第一節 竊盜ノ罪

兇器

犯シタル者ハ輕懲役ニ處スト先ツ本條加重ノ情狀トシテハ(一)兇器ヲ携
帶シタルヲ(二)人ノ住居シタル邸宅ニ入り竊盜ヲ爲シタルヲ必要トス

(一)兇器ヲ携帶シタルコト
法文ニ所謂兇器トハ狹義ノ兇器即チ總テ攻撃又ハ防禦方法トシテ器械
的作用ニ依リ人ノ肉體生命ヲ毀損スル爲メニ作ラレ且此目的ヲ達スル
ニ可能ナル器具人カヲ以テ動カサレ得ル外界ノ物質ヲ云フ例之ハ銃砲
刀劍槍木刀ノ類ヲ謂ヒ杖石等ヲ包含セス而シテ荷クモ兇器ニ屬スル以
上ハ犯人カ之ヲ携帶スルノ事實ヲ知ルコトヲ以テ足レリトシ犯人ニ於
テ之ヲ肉體生命毀損ノ方法ニ使用スルノ意思アルコトヲ必要トセス蓋
シ本條特ニ刑ヲ加重スル所以ハ犯人カ兇器ヲ携帶スルトキハ其携帶夫
レ自身カ既ニ他人ノ身體生命ヲ毀損スルノ機會ニ利用セラレ得ルノ危
險アルヲ以テナリ又犯人以外ノ者ニ於テ犯人カ兇器ヲ携帶スルコトヲ
知覺スルト否トハ問フ所ニ非ス反對說ニ曰ク兇器トハ危險ナル器具ト

反對說

云フ意味ニシテ其器具カ肉體生命ヲ毀損スルノ危險アルヤ否ヤハ絶對
的ニ之ヲ確定スルコトヲ得ス各場合ニ於テ所持者カ之ヲ使用セントス
ル手段方法ニ因テ決スヘキモノナリ換言スレハ其ノ使用方法ニ從テ著
シク身體ヲ毀損スルノ懸念ヲ惹起スルニ足ルヘキコトニ依テ決スヘキ
モノナリ例之ハ一本ノ針ニテモ人ノ心臟ヲ刺セハ以テ生命ヲ絶ツニ足
ルヘク之ニ反シテ「ピストル」モ之ヲ以テ單ニ人ヲ突キタルノミニテハ身
體毀損ノ虞アルコトナシ隨テ物カ兇器タルヤ否ヤハ普通其物ノ用法ニ
從テ決スヘキモノニ非スト而シテ此說ニ從フトキハ兇器ヲ携帶スル犯
人ハ其器具ヲ身體毀損ノ方法ニ用フルノ意思アルコトヲ必要トスヘキ
ナリ

明治三十六年(レ)第一四號同年三月六日宣告大審院判決ニ依レハ刑法第三百七十條ニ
所謂兇器トハ人ノ身體ニ危險ナル器具ヲ意味シ其性質上人ノ身體ヲ傷害シ得ヘキ器
物ハ總テ包含スルモノトス故ニ或ル器物カ荷クモ人ノ身體ヲ傷害シ得ヘキ特性ヲ有

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 七八九
產ニ對スル罪 第一節 竊盜ノ罪

没收

人ノ住居
シタル邸
宅

スルトキハ其器物ハ刀劍類ノ如ク人ヲ殺傷スルカ爲メニ特ニ作成セラレタルモノナ
ルト若クハ庖丁小刀其他ノ銳利ナル刃物類ノ如ク他ノ用法ノ爲メニ作成セラレタル
モノナルトニ論ナク刑法ニ謂フ所ノ兇器タルヲ妨ケサルモノトスト解セルモ同列旨
ニ所謂荷クモ人ノ身體ヲ傷害シ得ヘキ特ニ性ナ有スル物ノ意義不明ニシテ繩ビール瓶
ノ如キハ兇器中ニ包含スルヤ否ヤ不明ナリ

明治三十四年(レ)第三九六號同年四月二十二日宣告大審院判決ニ依レハ持兇器竊盜ノ
場合ニ於テ犯人カ兇器ヲ携帶セル所爲ハ其所爲自體カ竊盜ノ所爲ト合シテ持兇器竊
盜罪(刑法第三百七十條)ヲ構成スヘキモノナレハ其兇器ハ罪體ニシテ犯罪ヲ遂スル手
段ニ供シタルモノニアラス從テ犯罪供用ノ物件トシテ之ヲ没收スヘキモノニ非スト
解セルハ正當ナリ若シ犯人ニ於テ兇器ヲ更ニ犯罪ノ用ニ供シタルトキハ犯罪供用ノ
物件トシテ没收シ得ヘキヤ勿論ナリ明治三十五年(レ)第二二三五號同三十六年一月二
十七日宣告大審院判決ニ依レハ持兇器竊盜ノ犯人カ携帶スル兇器ハ所謂罪體ニシテ
没收スヘキモノニ非スト雖トモ荷クモ之ヲ以テ犯罪ノ用ニ供シタルトキハ刑法第四
十三條第二號ニ依リ没收スヘキモノト解セルハ正當ナリ

(二)人ノ住居シタル邸宅ニ侵入シ竊盜ヲ犯シタルコト
人ノ住居シタル邸宅トハ單ニ人ノ住居ニ供スルノ目的ヲ以テ建テラレ

第三百六十八條第六
項ノ罪ノ十
著手
共犯者ノ
責任關係

タルモノト謂フノ意ニ非スシテ現ニ人ノ住居ニ供セラル、邸宅ヲ指示
スルモノナリ然レトモ一時現住者カ不在ナルト否トハ問フ所ニ非ス次
ニ邸宅侵入ノ當時ニ於テ兇器ヲ携帶シタルコトヲ要シ竊盜ノ當時ニ於
テ猶ホ携帶スルコトヲ要セス

明治三十五年(レ)第二二三五號同三十六年一月二十七日宣告大審院判決ニ依レハ兇器
ヲ携帶シテ人ノ邸宅ニ侵入シタルトキハ現ニ金品ヲ竊取スルノ際之ヲ携帶セザリシ
トキト雖トモ持兇器竊盜罪ヲ構成スルモノト解セルハ正當ナリ

第三百六十八條第三百七十條ニ規定スル加重ノ情狀ハ此加重竊盜ノ實行
行爲ノ一部ト認ム可キヲ以テ犯人ニ於テ竊盜ノ目的ヲ以テ門戶牆壁ヲ踰
越損壞シ又ハ鎖鑰ヲ開カントシタルトキ又ハ兇器ヲ携帶シテ人ノ住居シ
タル邸宅ニ入ラントシタルトキハ加重竊盜ノ未遂ヲ以テ論スヘキナリ而
シテ同條加重ノ情狀ハ行爲ニ附帶セル加重ノ情狀ナルカ故ニ共犯者ノ一
人カ此加重ノ情狀ヲ行ヒタルトキハ他ノ共犯者ハ此事實ヲ知リタルノミ
ヲ以テ同條ノ適用ヲ受クヘキナリ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 七九一
產ニ對スル罪 第一節 竊盜ノ罪

第三百六十七條規定ノ場合ニ於テ第三百六十八條規定ノ行爲アリタルトキノ處分如何

此ノ場合ハ刑法第三百六十七條ニ所謂水火震災其他ノ變ニ乘シテ竊盜ヲ犯シタル者ト云フコトヲ得ヘク同時ニ同法第三百六十八條ニ所謂門戶牆壁ヲ踰越損壞シ若クハ鎖鑰ヲ開キ邸宅ニ入り竊盜ヲ犯シタル者ハ亦前條ニ同シト規定セルモノニモ該當シ一個ノ竊盜行爲カ以上二個ノ法條ニ該當スルモノナリ而シテ罪ノ個數ヲ定ムルノ標準ヲ行爲ノ數ニ採ルトキハ本問ハ一罪トナリ若シ其標準ヲ違犯セラレタル法條ノ個數ニ採ルトキハ本問ハ二罪ナルヘシ後說ニ依レハ刑法第百條第二項ニ依リ刑法第三百六十七條ノ罪ト同法第三百六十八條ノ罪トヲ比較シ其量定セラレタル刑ノ重キモノヲ以テ論スヘク前說ニ依レハ罪ハ一個ニシテ二個ノ法條ニ違犯シ且ツ二個ノ法條ハ補助的關係ヲ有セサルカ故ニ其法條中最モ嚴刑ヲ科シタル法條ヲ適用スヘキナリ然レトモ前掲二個ノ法條ハ何レモ同一ノ法

定刑ヲ科スルモノニシテ彼此ノ間ニ輕重ナキカ故ニ何レヲ重キ法條ト云フコトヲ得ス此ノ如キ場合ニ於テハ立法者ハ彼此何レノ法條ヲ適用スヘキヤノ判斷ハ之ヲ裁判官ノ任意ニ委ネタルモノト解スヘキナリ而シテ余輩ハ罪ノ個數ヲ定ムル標準ヲ行爲ノ個數ニ採ルカ故ニ前說ノ結論ニ贊スルモノナリ

第三百六十七條乃至第三百六十九條ニ規定スル加重ノ情狀ヲ備ヘテ第三百七十條ノ罪ヲ犯シタルトキノ處分ニ付テモ前掲ノ說明ニ準シ單ニ第三百七十條ヲ適用スヘキナリ(總則一罪數罪ノ區別論參照)

第三項 準竊盜

第三百七十一條ニ曰ク自己ノ所有物ト雖モ典物トシテ他人ニ交付シ又ハ官署ノ命令ニ因リ他人ノ看守シタル時之ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス

竊盜罪ノ構成要件トシテハ(一)其目的物ハ他人ノ所有物タルコト(二)犯人ニ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 七九三
產ニ對スル罪 第一節 竊盜ノ罪

於テ不法ニ自己ノ物トスル意思アルコトヲ必要トスルハ既ニ述ヘタルカ如シ故ニ自己ノ所有物ニ對シテ竊盜罪ノ成立セサルヤ論ヲ待タス然レトモ假令自己ノ所有物ト雖モ他人カ其物ノ上ニ權利ヲ行フトキ又ハ官署ノ爲メ差押ヘラレ而カモ他人ニ依リ保有セラル、場合ニ於テ他人ノ權利ヲ侵害シ又ハ官署ノ命令ヲ無視スル意思ヲ以テ之カ保有ヲ奪フコトハ敢テ處罰ノ必要ナシト謂フコトヲ得ス是レ本條ノ設ケアル所以ニシテ本罪ノ構成要件ヲ擧クレハ左ノ如シ、

第一 犯罪ノ目的物ハ自己ノ物有物タルコト

第二 典物(質物)トシテ他人ニ交付シ又ハ官署ノ命令(荷クモ適法ナル命令ナル以上ハ民事ノ差押ヘニ屬スルト否トハ問フ所ニアラス)ニ依リ他人ノ看守(保有)シタルコト

明治三十六年(レ)第一七三二號同年十月九日宣告大審院判決ニ依レハ有體動産ノ差押ヲ受ケタル後債務者カ債務ヲ完済シタル時ハ其差押ハ債權者カ辨済ヲ受ケタル旨ヲ

記載シタル證書ヲ執達吏ニ提出シタル場合ニ於テ之ヲ停止スヘキモノナルモ債務者カ債務ヲ辨済スルト同時ニ當然其差押ノ效力ヲ失フヘキモノニアラス從テ其差押ノ解除前差押物件ヲ竊取シタル所爲ハ刑法第三百七十一條ノ犯罪ヲ構成スト解セルハ正當ナリ

明治三十六年(レ)第九三二號同年五月二十六日宣告大審院判決ニ依レハ關稅官吏カ證據物件トシテ差押ヘテ爲シタル以上ハ假令差押證書ノ作成ヲ了セサル前ト雖トモ其物件ノ占有ハ該官吏ニ移轉シタルモノトス從テ其物件ハ官吏ノ看守ニ係ルモノト解セルハ正當ナリ

明治三十五年(レ)第一一三三號同年七月十日宣告大審院判決ニ依レハ有體動産ニ對スル強制執行ノ如キ封印其他ノ方法ヲ以テ差押ノ要件トスヘキ規定(民事訴訟法第五百六十六條)アル場合ハ格別其他ノ差押ニ付テハ封印等ナキノ一事ヲ以テ直チニ其差押ヲ無効ナリト云フヲ得スト解セルハ正當ナリ

第三 竊取スルコト(他人ノ保有ヲ排除シテ自己ノ保有ニ移スコト)

第四 犯意ニ付テハ第一乃至第三ノ事實ヲ知ルコトノ外ニ不法ニ他人ノ

質權ヲ害シ又ハ官署ノ命令ヲ無視スル意思アルコトヲ必要トス

現行法ハ單ニ典物トシテ他人ニ交付シ又ハ官署ノ命令ニ因リ他人カ看

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 七九五
產ニ對スル罪 第一節 竊盜ノ罪

守スルモノニ限り準竊盜ノ規定ヲ設クト雖モ猶ホ其以外ノ場合例ヘハ
他人カ其物ノ上ニ使用收益權又ハ留置權ヲ有スル場合ニ於テモ同様ノ
規定ヲ設クル必要アルヘク又第三者カ所有者ノ利益ノ爲メニ此等ノ物
ヲ他人ヨリ竊取スル場合ニ付テモ同様ノ規定ヲ設クルノ必要アルヘキ
ナリ

本罪ノ被害者ハ物ノ保有者ト質權者又ハ官署ナリ
終リニ本條ノ罪ハ竊盜ヲ以テ論ストアルカ故ニ第三百七十七條ノ適用ヲ
受クヘキナリ

第四項 親屬相盜

第三百七十七條ニ曰ク祖父母父母夫妻子孫及其配偶者又ハ同居ノ兄弟姉
妹互ニ其財産ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論スルノ限リニ在ラス若シ他
人共ニ犯シテ財物ヲ分チタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス
本條ハ竊取ノ犯人ト其被害者カ祖父母父母子孫又ハ子孫ノ配偶者若クハ

本罪ノ被
害者

親屬ノ相
盜

人的刑罰
排除ノ原因

第二項ノ
性質

夫妻若クハ同居ノ兄弟姉妹ノ關係ヲ有スルトキニ於テハ假令其罪ハ構成
スルモ其身分アル者此身分アル教唆者從犯者亦同シニ對シテハ其刑ヲ科
セサルコトヲ規定スルモノ(人的刑罰排除ノ原因)ニシテ是レ畢竟親屬間ノ
平和ヲ維持スル爲メニ過キス(明治三十七年(刑)第一五一號同年十一月八
日宣告大審院判決ニ依レハ親族相盜ニ因ル
職物タリト雖トモ其情ヲ知リナカラ買受ケタル從テ此身分ナキ共犯者ハ
以上ハ贓物故買罪ヲ構成スト解セルハ正當ナリ)其刑ヲ免カルコトヲ得サルヤ勿論ナリトス而シテ同條第二項ハ此主義
ヲ説明スル爲メノ注意的規定ニ過キサカ故ニ此身分ナキ共犯者ハ假令
竊取ノ財物ヲ分チタル場合ニ於テモ當然第三百六十六條以下ノ規定ニ從
ヒ處罰セラレヘキモノトス(第三百九十八條參照)次ニ本條ハ人的刑罰排除
ノ原因ヲ規定シタルニ過キスシテ竊盜罪ノ構成ニ關係ナキカ故ニ此條件
ヲ理由トシテ其刑ヲ免セラルヘキハ犯人ノ意思如何ニ拘ハラヌ客觀的事
實ニ基キテ之ヲ決セサルヘカラス而シテ法文ニ所謂「同居」トハ住居ヲ同ウ
スルモノト解スヘク「祖父母父母子孫姉妹」ノ意義ハ刑法第百十五條ニ依リ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 七九七
產ニ對スル罪 第一節 竊盜ノ罪

解スヘク配偶者トハ民法上ノ夫婦ト解スヘキナリ
終リニ竊盜ノ被害者ハ所有及ヒ保有者準竊盜罪ニ付テハ質取主又ハ官署
ト保有者雙方ヲ包含スト解スルカ故ニ犯人ハ此兩者ニ對シ本條規定ノ親
屬關係アルコトヲ必要トスルナリ故ニ子カ父ノ所有物ヲ親屬關係ナキ第
三者ノ保有ヨリ竊取スルトキハ本條ノ適用ナシ(此ノ場合ニ於テ子カ其竊
取ニ付父ノ承諾アルモノト誤認シタルトキハ不法ノ認識ナキノ理由ニ依
リ竊盜罪ヲ構成セス)

明治三十四年(九)第五六八號同年四月三十日宣告大審院判決ニ依レハ夫カ他人ヨリ融
通使用ヲ許サレサル金圓ヲ預リタル場合ニ妻カ其情ヲ知リ之ヲ竊取シタルトキハ夫
ノ金圓ヲ竊取シタルモノニ非スシテ他人ノ金圓ヲ竊取シタルモノト解セルハ正當ナ
リ

明治三十三年第一〇九號同年三月二十三日宣告大審院判決ニ依レハ父ノ所有物ト雖
トモ官署ノ差押ニ係ル場合ニ於テ之ヲ竊取シタルトキハ刑法第三百七十七條ノ適用
ヲ受クヘキモノニアラスト解セルハ正當ナリ
明治三十五年(九)第一三九一號同年十月九日宣告大審院判決ニ依レハ刑法第三百七十

本節共通
ノ規定

本節共通ノ規定ハ左ノ如シ
第三百七十五條ニ曰ク此節ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサ
ル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス
第三百七十六條ニ曰ク此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ
六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第二節 強盜ノ罪

強盜ノ罪ハ竊盜罪ト共ニ他人ノ所有權ヲ侵害スル目的ヲ以テ他人ノ保有
ヲ奪フ罪ノ一種ニシテ竊盜ト異ナル點ハ他人ノ保有物ヲ奪フ手段カ暴行
又ハ脅迫ニ依ルニ存ス然レトモ強盜罪ハ竊盜罪ト節ヲ異ニシテ規定セラ
レ且ツ竊盜罪ノ變體竊盜罪ノ一種ニアラサルカ故ニ竊盜罪ニ關スル規定

強盜罪
本節共通
ノ規定

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 七九九
產ニ對スル罪 第二節 強盜ノ罪

ハ直ニ以テ強盜罪ニ適用スルコトヲ得ス從テ刑法第三百六十六條以下ニ規定スル普通竊盜罪ノ目的物タルコトヲ得サル物件ニ對シテモ強盜罪ヲ行フコトヲ得ヘシ例ヘハ屋外ニ於ケル五圓未滿ノ物件(屋外竊盜)又ハ田野園圃ニ於ケル菜菓花卉(刑法第四百二十九條參照)ニ對シテ強盜罪ヲ構成シ得ヘシ反之刑法第三百七十一條準竊盜ニ關スル規定及ヒ同法第三百七十七條親屬相盜ニ關スル規定ハ強盜罪ニ付キ適用スルコトヲ得サルナリ然レトモ現今一般ノ解釋ハ刑法第三百七十一條規定ノ場合ハ竊盜罪ニ關スル注意的規定ニ過キサルカ故ニ強盜罪ニ付テハ特別ノ規定ナクトモ此場合ニ於テハ當然強盜ヲ以テ論スヘキモノナリト云フニアルモ此說ハ竊盜強盜ノ罪ヲ以テ單ニ他人ノ保有ヲ侵害スル罪ト誤解シタルニ基因スルモノニシテ若シ論者ノ說ニ從ヒテ刑法第三百六十六條ニ所謂他人ノ所有物トハ民法上ノ所有權ノ目的物ニアラスシテ單純ナル保有物ト解スルトキハ同法第三百七十一條自己ノ所有物ト雖モ云々トノ文字ハ遂ニ其意義ヲ失フニ至ル

ヘキヲ以テ此說ハ明文ヲ無視シ且ツ強盜罪ノ性質ヲ誤解シタルモノト云フヘキナリ

明治三十四年(れ)第八七三號同年六月二十五日宣告大審院判決ニ依レハ強盜罪(刑法第三百七十八條)ハ竊盜罪(刑法第三百六十六條)ノ如ク人ノ所有物ニ對スルトキニノミ成立スルモノニ非ス從テ自己ニ所有權アル物件ト雖トモ差押ヲ受ケ他人ノ占有ニ屬スル場合ニ於テ暴行ヲ以テ之ヲ強取シタルトキハ強盜罪ヲ構成スト解セルハ誤見ナリ

以下各本條ニ付テ説明スルニ當リ便宜上數項ニ分チテ之ヲ説明セント欲ス

第一項 普通ノ強盜罪

第三百七十八條ニ曰ク「人ヲ脅迫シ又ハ暴行ヲ加ヘテ財物ヲ強取シタル者ハ強盜ノ罪ト爲シ輕懲役ニ處ス」
本罪ノ構成要件ヲ擧クレハ左ノ如シ

第一 犯罪ノ目的物ハ他人ノ財物所有物タルコト

日本刑法論(各論) 水論、第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八〇一
產ニ對スル罪 第二節 強盜ノ罪

普通強盜
罪ノ構成
要件

明治三十六年(第一七七四號)同年十一月三十日宣告大審院判決ニ依レハ刑法上ノ財物ノ意義ニ廣狹ノ二アリテ其廣義ニ於テハ證書類ヲ包含シ其狹義ニ於テハ之ヲ包含セズ而シテ刑法第三百九十條ノ財物ハ後者ニ屬シ同第三百七十八條ノ財物ハ前者ニ屬スルモノト解セルハ正當ナリ

第二 不法ニ自己ノ物トスル意思ヲ以テ他人ノ保有ヲ奪フコト

第三 人ヲ脅迫シ又ハ暴行ヲ加フルコトニ依テ他人ノ保有ヲ奪フコト
強盜罪カ竊盜罪ト異ナルハ唯第三要件ヲ必要トスルニ在リテ法文ニ竊取ト云ヒ或ハ強取ト云フハ此要件ヲ具備スルト否トニ依テ用字ヲ異ニシタルノミ從テ第一第二要件ニ付テハ總テ竊盜罪ニ付テノ説明ヲ引用シ爰ニハ第三要件ニ付テ説明スヘシ

暴行トハ何ソヤ汎ク暴行ト云ヘハ不法ノ體力ヲ意味スルモ法文ニハ人ヲ脅迫シ又ハ暴行ヲ加ヘテ云々ト規定シ本條所謂暴行ハ人ニ對スル暴行ヲ指スカ如ク又物ニ暴行ヲ加ヘテ他人ノ保有ヲ奪フ場合ニ付テハ刑法第三百六十八條ニ門戶牆壁ヲ損壞シ若クハ鎖鑰ヲ開キト規定シタル

暴行

脅迫

ヲ以テ見レハ本條所謂暴行ハ人ニ對スル暴行ト解スルヲ至當トス從テ例ヘハ帶ニ挾マレタル懷中時計ヲ奪フ爲メニ時計ノ鎖ヲ切り取ルカ如キ或ハ馬ヲ奪フニ方リ馬ニ對シ暴行ヲ加フルモ強盜ト云フコトヲ得ス而シテ本條ノ暴行ハ他人ノ保有ヲ奪フニ付テノ障害ヲ排除スル爲メニ用ヒラル、モノヲラサルヘカラス然レトモ人ニ對スル暴行ハ必スシモ直接ニ人ニ對スルコトヲ要セス即チ直接ニ身體ヲ拘束シテ其抵抗力ヲ失ハシムル場合ニ限ラヌ間接ニ抵抗力ヲ排除スル場合ヲモ包含ス例ヘハ戸ヲ閉シテ人ヲ一室ニ監禁スルカ如キ或ハ梯子ヲ外ツシテ人ヲ二階ニ監禁スルカ如キモ亦人ニ對スル暴行ト云フコトヲ得ヘキナリ
脅迫トハ何ソヤ汎ク脅迫ト云ヘハ人ニ對シ危害ヲ加フヘキコトヲ示シ相手方ヲシテ之ヲ信用セシムルコトヲ謂ヒ其危害ハ行爲者ニ於テ眞ニ危害ヲ加フルノ意思アルコトヲ必要トセス又其手段ハ危害ヲ加フルニ足ル能力アルコトヲ必要トセス(彈丸ヲ込メサルピストル)ヲ以テ人ニ擬

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八〇三
強盜ノ罪 第二節 強盜ノ罪

脅迫罪ノ
關係

スルカ如シ又其危害ハ直接ニ被脅迫者自身ニ對スルコトヲ要セス第三
 者又ハ物ニ對シテ危害ヲ加フヘキコトヲ示シ之ヲ信用セシメタル場合
 ヲモ包含シ又危害ヲ受クヘキコトヲ信用セシムルノ方法ハ明示ニ依ル
 ト否サルト其手段ノ如何ヲ問ハスト雖モ其危害ハ脅迫者カ直接又ハ間
 接ニ他ノカヲ利用シテ加フヘキコトヲ相手方ニ信用セシムルコトヲ必
 要トス而シテ刑法第三百二十六條以下ニ規定スル脅迫罪ノ脅迫ハ法律
 ニ列記シタル法益ニ對シテ危害ヲ加フヘキコトヲ以テ脅迫シタル場合ニ
 限ルコトハ前ニ説明シタルカ如シ然レトモ本條ニ所謂脅迫トハ前ノ暴
 行ト共ニ他人ノ保有ヲ奪フノ手段タルカ故ニ保有ヲ奪フニ付テ他人ノ
 抵抗ヲ精神的ニ排除スルコト即チ保有ヲ奪フコトニ對シテ他人カ抵抗
 セントスル自由意思ノ決行ヲ妨クルモノタルコトヲ要シ暴行カ有形的
 抵抗ヲ全然排除スルカ如ク強盜罪ノ手段タル脅迫ハ他人ノ精神的抵抗
 (抵抗ノ意思)ヲ全然妨止スルコトヲ意味スト解セサルヘカラス而シテ此

財物奪取
ノ手段
タルコト

種ノ脅迫ハ他人ノ生命肉體ニ對シテ現ニ(切迫シテ)危害ヲ加フヘキコト
 ヲ以テ脅迫シ假令抵抗ノ意思ヲ實行スルモ結局無用ニ終ルヘキコトヲ
 信用セシムル場合ニ限ルモノトス從テ他人ノ財物ニ對シ現ニ危害ヲ加
 フヘキコトヲ以テ脅迫シ又ハ將來他人ノ肉體生命ニ危害ヲ加フヘキコ
 トヲ以テ脅迫シテ保有ヲ奪フモ強盜ニアラス

明治三十七年(レ)第一七三九號同年十月十日宣告大審院判決ニ依レハ(一)強盜盜ト恐喝
 取財トノ區別ニ付テ犯人カ被害者ニ加ヘント威嚇シタル害惡ノ切迫セルト否トハ之
 カ標準タルコトアルヘシト雖トモ犯人カ威嚇スルカ爲メニ用ヒタル手段如何モ亦此
 兩者ヲ區別スルノ標準トナルヘキモノトス(二)被害者方ニ大勢ニテ乘込ミ喰ヒ倒サシ
 ト威嚇スルカ如キハ被害者ノ意思自由ヲ全然剝奪スヘキ性質ノモノニアラサルヲ以
 テ之ヲ手段トシテ財物ヲ騙取シタル所爲ハ恐喝取財罪ヲ構成スト解セリ

暴行又ハ脅迫ハ財物奪取ノ手段タルコトヲ要シ且ツ此ノ手段ハ強盜犯人
 ニ依テ即チ財物奪取ノ目的ヲ以テ行ハレタルコトヲ要ス故ニ(イ)初メ創傷
 ノ故意ヲ以テ人ヲ毆打昏倒セシメタル後新タニ奪取ノ故意ヲ生シ之ヲ奪

日本刑法論(各論) 本論第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八〇五
 強盜ノ罪 第二節 強盜ノ罪

實行行為
の一部
ルコト

取スルモ強盜罪ヲ構成セス(口)既ニ財物ヲ窃取シタル後ニ於テ暴行又ハ脅
迫ヲ用ヒルモ強盜罪ヲ構成セス但シ此ノ場合ニ於テハ刑法第三百八十二
條ニ規定スル準強盜罪ヲ構成スルコトアリ得ヘキナリ然レトモ暴行脅迫
ト財物奪取トハ各時ヲ異ニシタル別個ノ行爲トシテ現出スルコトヲ要セ
ス又被害者ニ於テ現ニ奪取ノ被害事實ヲ認識スルコトヲ必要トセス例ヘ
ハ財布ヲ握レル他人ノ手ヲ毆打シテ其財布ヲ落サシムルト同時ニ之ヲ掠
メ取ルカ如キハ強盜ナリ又其暴行脅迫ハ必スシモ現ニ實行セラル、所ノ
抵抗又ハ企圖セラレタル抵抗ニ對スルコトヲ要セス例ヘハ財物奪取ノ目
的ヲ以テ他人ヲ打チ倒ホシ被害者ニ於テ奪取セラル、ノ事實ヲ知ラス從
テ何等ノ抵抗ヲモ試ミルノ猶豫ナキニ乘シテ被害者所持ノ懷中時計ヲ奪
取シタルトキハ強盜ヲ以テ論スルハ何人ト雖モ異論ナカルヘシ此暴行又
ハ脅迫ハ物ノ保有ヲ奪フ實行、行爲ノ手段、タルコトヲ要シ此目的ノ豫備行
爲トシテ人ニ對シ暴行脅迫ヲ加フルモ強盜ニアラス例ヘハ他人ノ所有物

暴行脅迫
ヲ受クヘ
キ人

ヲ奪フ目的ヲ以テ其豫備行爲トシテ人ヲ脅迫シ金庫ノ合鍵ヲ造ラシメタ
ル後チ別ニ人ニ對シテ暴行脅迫ヲ用ヒルコトナク其合鍵ヲ利用シテ金庫
内ノ財物ヲ奪ヒ去ルトキハ竊盜ト普通脅迫罪ノ二罪俱發ニシテ強盜罪ヲ
以テ論スルコトヲ得ヌ

暴行、脅迫ニ付テハ法律ハ必スシモ物ノ保有者自身ニ對スルコトヲ必要ト
セス(口)ト氏ノ説ニ依レハ物ノ保有者自身ニ對スル(ト雖トモ此手段ハ物
ノ保有者ハ勿論荷モ從前ノ保有維持ヲ補助スル爲メニ保有ヲ奪フコトニ
付テ障害ヲ試ミル者ニ對シテ行ハル、コトヲ要シ且ツ犯人ニ於テ此等障
害ヲ加フル人タルコトヲ知テ自己ニ保有ヲ得ル目的ヲ以テ其人ニ對シ暴
行脅迫ヲ加フルコトヲ必要トス從テ數人共犯竊盜ノ場合ニ他ノ共犯者ニ
對シテ助力ヲ強制スル爲メ之ヲ創傷シ又ハ脅迫スルモ強盜ニアラス被害
迫者自身ニ直接害ヲ加フヘキコトヲ以テ脅迫スルコトヲ必要トスルカ故
ニ物ノ保有ニ對シテ若シ抵抗スルトキハ汝ノ子供ヲ殺害スヘシト脅迫ス

日本刑論(各論)

本論第三編

身體財產ニ對スル重罪輕罪

第二章 財

八〇七

ルカ如キハ強盜ニアラスシテ竊盜ト脅迫罪トノ二罪俱發ナリ又物ノ竊取
中家人ノ目覺メンコトヲ恐レテ赤兒ヲ殺害スルカ如キハ竊盜ト殺人罪ノ
俱發ニシテ強盜ニアラス

強盜ハ竊盜ト等シク他人ノ保有ヲ奪ヒタルキヲ以テ既遂トナリ竊盜強盜
ハ何レモ物ニ對スル他人ノ保有ヲ破リテ自己ノ保有ニ移スコトヲ要ス故
ニ假令暴行脅迫ヲ用ユルモ他人ヲ強制シテ物ヲ交付セシメタルトキハ純
粹ナル強盜ヲ以テ論スルコトヲ得サルカ故ニ立法論トシテハ此場合ニ付
テモ準強盜ヲ以テ論スヘキコトヲ規定スルノ必要アリ其手段タル暴行脅迫
ハ實行行爲ノ一部ニシテ之ニ着手スルトキハ強盜ノ着手ト云フヘキナリ

第二項 加重強盜罪

第三百七十九條

曰ク強盜左ニ記載シタル情狀アル者ハ一個毎ニ一等ヲ

加フ

(一) 二人以上共ニ犯シタル時

(二) 兇器ヲ携帯シテ犯シタル時

本條第一號ニ所謂二人以上共ニ犯シタル時トハ第三百六十九條ノ説明ト
同一ニ解スヘク本條第二號ニ所謂兇器トハ第三百七十條ノ説明ト同一ニ
解スヘク而シテ本條第一項ニハ第一號ニ記載シタル加重ノ情狀一個毎ニ
一等ヲ加フトアルカ故ニ若シ二個ノ加重情狀ノ存スルトキハ第三百七十
八條強盜ノ刑ニ二等ヲ加フヘキナリ

本條ハ第三百八十條第三百八十一條ニ對シテ法規ノ競合スル場合ヲ生シ
得ヘシ此ノ場合ニ於テハ重キ法條ヲ適用スヘキナリ

第三百八十條ニ曰ク強盜人ヲ傷シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル
者ハ死刑ニ處ス

本條ニ所謂強盜人ヲ傷シタル者トハ傷人ノ行爲カ強盜ノ手段トナリタル
場合ハ勿論假令其手段ニ非スト雖モ強盜ノ現場ニ於テ傷人行爲ヲ併セ行
ヒタルトキヲモ包含スルモノトス從テ被害者ハ必スシモ強盜ノ被害者タ

強盜人ヲ
傷シタル
者

第三百八
十條

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八〇九
強盜ノ罪 第二節 強盜ノ罪

ルコトヲ要セサルナリ(第三百八十條)強盜ノ現場トハ強盜ノ着手後實行ヲ終
 ル迄ハ勿論現ニ行ヒ終リタル際及ヒ強盜犯人カ其現場ヨリ追跡セラレテ
 逮捕又ハ贓物ノ取戻ヲ免カル爲メニ人ヲ傷シタル場合ヲモ包含スルモノ
 トス(明治三十年第四九七號同年六月十一日宣告大審院判決ニ依レハ強盜
 人ヲ傷ケタルトキハ其毆傷ハ強盜ヲ遂クル爲メナルト逮捕ヲ免カ
 ハ爲メナルト構成スハ強盜傷人罪(刑法第百八十條)ヲ構成スルハ正當ナリ)次ニ傷人ニ付テハ元ヨリ創傷ノ
 意思アリタルコトヲ要シ過失傷人ヲ包含セスト雖モ本條末段ニ「死ニ致シ
 タル者」トアルハ殺人ノ意思アルコトヲ必要トセス苟モ此結果カ有意ノ傷
 人行爲ヨリ生シタルヲ以テ足レリトス

死ニ致シ
タル者

共犯者ノ
責任關係

強盜傷人罪ハ強盜ト傷人罪トノ二罪俱發ニアラスシテ一個ノ犯罪ナルカ
 故ニ數人共犯ノ場合ニ於テモ現實ニ此傷人行爲ニ與リタル者ハ勿論假令
 此行爲ニ與ラスト雖モ傷人行爲ノ事實ヲ知テ本罪構成要件ノ一部タル強
 盜ニ加効シタル者ハ總テ強盜傷人罪ノ責任ヲ負フヘキナリ

明治三十五年(九)第九一五號同年六月十二日宣告大審院判決ニ依レハ二人共謀シテ強

盜ヲ行ヒ其強奪ノ際傷人ノ行爲アリタルトキハ縱令其傷人ハ他ノ一人ノ行爲ナリト
 スルモ共犯者ハ共ニ強盜傷人罪ヲ以テ處斷スヘキモノト解セルハ蓋シ本文卑見ト同
 趣旨ナルヘシ

明治三十七年(九)第二六〇四號同年四月十五日宣告大審院第一第二刑事聯合部判決ニ
 依レハ強盜ヲ教唆シタルニ被教唆者カ強盜殺人罪ヲ犯シタルトキハ教唆者カ強盜教
 唆ノ際被害者ヲ殺害スルコトヲ豫見シタリト認ムヘキ事實アラザルトキハ教唆者ハ
 強盜殺人罪ニ付キ其責ニ任セサルモノト解セルモ誤見ナリ何トナレハ本文ニ說明シ
 タルカ如ク強盜殺人罪ノ成立ニハ正犯ニ於テ殺人ノ犯意アルコトヲ必要トセス從テ
 同罪ノ教唆ニ付テモ殺人ノ結果ニ付キ豫見アルコトヲ必要トセザルハ事理明瞭ニシ
 テ疑ナキハヘキ餘地ナシ故ニ強盜ヲ教唆サレタル者ニ於テ強盜ノ手段トシテ人ヲ傷
 シ因テ死ニ致シタルトキハ教唆者ニ於テ前ニ暴行ノ方法ヲ限定セザル限りハ自己ノ
 教唆シタル強盜ニ付テ重キ結果ニ付テモ其責ヲ負フヘク從テ強盜殺人罪ノ教唆者ト
 シテ責ヲ負ハサルヘカラス

本罪ノ未
遂

強盜ノ着手後人ヲ殺傷シタルモ未タ財物ノ強取ヲ遂ケス又ハ財物強取ハ
 既ニ遂ケタルモ殺傷行爲ニ付テハ單ニ着手シタルノミニテ未タ殺傷ノ結
 果ヲ生セザルトキハ本條ノ罪ノ未遂ヲ以テ論スヘキナリ但シ現今一般ノ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八一

解釋ハ強盜ノ未遂既遂ヲ問ハス苟クモ強盜ノ着手以上ノ程度ニ於テ殺傷
行為アルトキハ本罪ヲ以テ論スヘク若シ殺傷行為ナキトキハ普通強盜罪
ニシテ強盜傷人罪ニハ未遂ナシトノ說普通ナルカ如シト雖モ余輩ハ之ヲ
採ラス

準強盜
傷人罪

明治三十六年(七)第七九六號同年五月十二日宣告大審院判決ニ依レハ強盜未遂ノ場合
ト雖トモ人ヲ傷シタルトキハ刑法第三百八十條ノ強盜傷人罪ヲ完成スト解セルハ誤
見ナリ何トナレハ此ノ場合ニ於テハ本罪ノ構成條件タル事實ハ完備セサレハナリ
明治三十四年(七)第六四八號同年五月二十一日宣告大審院判決ニ依レハ人ノ所有物ヲ
窃取スルニ當リ其取置シテ拒ク爲メ臨時暴行ヲ爲シタル者ハ強盜ヲ以テ論スヘキモ
ノトス刑法第三百八十二條從テ其暴行ノ結果人ヲ傷シタルトキハ強盜傷人罪(刑法第
三百八十條前段)ヲ構成スト解セルハ正當ナリ

第三百八
十一條

第三百八十一條ニ曰ク強盜婦女ヲ強姦シタル者ハ無期徒刑ニ處ス
本條所謂強盜婦女ヲ強姦シタル者トアルハ第三百八十條ニ於テ説明シタ
ルト等シク強盜ノ現場ニ於テ又ハ現場ヨリ追跡シテ婦女ヲ強姦シタル場

親告罪
ノ關係

合ヲ意味スルモノニシテ本罪モ亦強盜強姦ト云フ一個ノ犯罪ニシテ強盜
ト強姦トノ二罪俱發ニアラサルナリ其他數人共犯ノ場合及ヒ本罪ノ未遂
ニ付テハ前條ノ説明ト差異ナキヲ以テ此ニ説明ヲ省略ス唯一ノ注意スヘ
キハ(一)強盜強姦ノ結果婦女カ死亡シタルトキハ犯人ニ於テ若シ傷人ノ意
思アルトキハ第三百八十條ニ依リ處罰スヘク若シ傷人ノ意思ナキトキハ
本條ニ依リ處罰セサルヘカラス(二)強姦罪ハ親告罪ナルモ強盜強姦罪ハ獨
立ノ一罪ナルヲ以テ法文ニ特別ノ規定ナキ以上ハ強姦ニ付キ告訴ナク
モ本條ヲ適用シテ處罰スヘキモノトス

準強盜

第三項 準強盜

第三百八
十二條

第三百八十二條ニ曰ク竊盜財ヲ得テ其取還ヲ拒ク爲メ臨時暴行脅迫ヲ爲
シタル者ハ強盜ヲ以テ論ス

本條ハ(一)竊盜カ既ニ目的物ノ保有ヲ得タル後(二)竊盜ノ現場又ハ現場ヨリ
追跡セラレ(三)其取戻ヲ拒ム爲メ(四)臨時暴行脅迫ヲ加ヘタル場合ニ於テ強

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八一三
產ニ對スル罪 第二節 強盜ノ罪

盜ニ準シ之ヲ處罰スヘキコトヲ規定シタルモノニシテ本條所謂暴行脅迫ノ意義ハ第三百七十八條普通強盜罪ノ構成要件タル暴行脅迫ト同一ニ解スヘキナリ唯普通強盜ト異ナル所ハ彼ハ暴行脅迫ヲ以テ他人ノ保有ヲ奪フノ手段トシ是ハ既ニ得タル目的物ノ取還ヲ拒クノ手段タルニ存ス然レトモ犯人カ此保有者ノ取還ヲ拒クノ目的ヲ遂ケタルヤ否ヤハ問フ所ニアラサルナリ

終リニ注意スヘキハ(一)本條所謂竊盜中ニハ刑法第三百七十一條ニ規定スル準竊盜ヲモ包含スルモノト解スヘク(二)本罪ハ強盜ヲ以テ論ストアルカ故ニ第三百八十條及ヒ第三百八十一條ハ本罪ニ付テモ適用アルモノトス第三百八十三條ニ曰ク「藥酒等ヲ用ヒ人ヲ醉迷セシメ其財物ヲ盜取シタル者ハ強盜ヲ以テ論シ輕懲役ニ處ス」

本條規定スル所ノ所爲ト第三百七十八條ノ普通強盜ト異ナル點ハ彼ハ他人ノ保有ヲ奪フ手段カ暴行脅迫ニ出テ此ハ暴行脅迫ニ依ラスシテ人ヲ醉

第三百八十三條

迷セシメ其有形的又ハ無形的抵抗カヲ失ハシムルニアリ而シテ法文ニ「藥酒等ヲ用ヒ」トアルハ人ヲ醉迷セシムル手段ヲ例示シタルニ過キサリナリ(刑法第三百四十八條)此ノ如ク暴行脅迫ヲ加ヘサルコトヲ要スルカ故ニ若シ人ヲ醉迷セシムル手段ヲ取ルニ當リ暴行脅迫ヲ用ヒタルトキハ普通強盜罪ヲ構成スヘク本條適用ノ限リニアラサルナリ次ニ人ヲ醉迷セシムルハ他人ノ保有ヲ奪フ手段トシテ行フコトヲ要スルカ故ニ犯人ニ於テ此事實ヲ知リタルコトヲ要ス從テ人ヲ醉迷セシムル當時ニ於テ盜取ノ意思ナキトキハ假令後ニ此ノ意思ヲ生スルモ本條ヲ適用スルコトヲ得ス而シテ本條ニ所謂盜取中ニハ第三百七十一條ノ準竊盜ヲ含ミ又第三百八十條、第三百八十一條ノ規定ハ本罪ニモ適用アルコトハ總テ前條ノ説明ト異ナル所ナシ

本節ニ共通ノ規定ハ左ノ如シ

第三百八十四條ニ曰ク「此節ニ記載シタル罪ヲ犯シ減刑ニ因テ輕罪ノ刑ニ

第三百八十四條

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八一五 產ニ對スル罪 第二節 強盜ノ罪

處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス

第三節 遺失物埋藏物ニ關スル罪

遺失物埋藏物ニ關スル罪ニ付テハ刑法第三百八十五條乃至第三百八十七條ニ於テ左ノ如ク規定セリ

第三百八十五條ニ曰ク「遺失及ヒ漂流ノ物品ヲ拾得テ隱匿シ所有主ニ還付セズ又ハ官署ニ申告セサル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス」

第三百八十六條ニ曰ク「他人ノ所有地内ニ於テ埋藏ノ物品ヲ掘得テ隱匿シタル者ハ亦前條ニ同シ」

第三百八十七條ニ曰ク「此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條ニ掲ケタル親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス」

以上ノ各條ハ明治三十二年三月法律第八十七號遺失物法第十六條ニ依リ暗黙ニ廢止セラレタルカ故ニ遺失物埋藏物其他之ニ類似ノ物件ニ關スル

遺失物法 違反

罪ニ付テハ同法第十六條ニ依リ處罰セサルヘカラス

遺失物法第一條ニ曰ク「他人ノ遺失シタル物件ヲ拾得シタル者ハ速ニ遺失者又ハ所有者其他物件回復ノ請求權ヲ有スル者ニ其物件ヲ返還シ又ハ警察官署ニ之ヲ差出スヘシ但シ法令ノ規定ニ依リ私ニ所有持スルコトヲ禁シタル物件ハ返還スルノ限リニアラス」

物件ヲ警察官署ニ差出シタルトキハ警察官署ハ物件ノ返還ヲ受クヘキ者ニ之ヲ返還スヘシ若シ返還ヲ受クヘキ者ノ氏名又ハ居所ヲ知ルコト能ハサルトキハ命令ノ定ムル所ニ從ヒ公告ヲ爲スヘシ

同法第十條ニ曰ク「管守者アル船車建築物其他公衆ノ通行ヲ禁シタル構内ニ於テ他人ノ物件ヲ拾得シタル者ハ其物件ヲ管守者ニ交付スヘシ

前項ノ場合ニ於テ船車建築物等ノ占有者ヲ以テ拾得者トス自己ノ管守スル場所ニ於テ他人ノ物件ヲ拾得シタル者亦同シ

本條ノ場合ニ於テ報勞金ハ前項ノ占有者ト現ニ物件ヲ拾得シタル者ト折

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八一七
產ニ對スル罪 第三節 遺失物埋藏物ニ關スル罪

半スヘシ

同法第十一條ニ曰ク「犯罪者ノ置去リタルモノト認ムル物件ヲ拾得シタル者ハ速ニ其物件ヲ警察官署ニ差出スヘシ

前項ノ物件ニ關シテハ法律ノ規定ニ依リ沒收スルモノヲ除ク外本法及ヒ民法第二百四十條ノ規定ヲ準用ス但シ公訴權消滅ノ日ヨリ一箇年間還付ヲ受クル者ナキトキニ限り拾得者ニ於テ所有權ヲ取得ス

犯罪捜査ノ爲メ必要ナルトキハ警察官ニ於テ公訴消滅ノ日マテ公告ヲ爲サ、ルコトヲ得」

同法第十二條ニ曰ク「誤テ占有シタル物件他人ノ置去リタル物件又ハ逸走ノ家畜ニ關シテハ本法及ヒ民法第二百四十條ノ規定ヲ準用ス但シ誤テ占有シタル物件ニ關シテハ第三條ノ費用及ヒ第四條ノ報勞金ヲ請求スルコトヲ得ス」

同法第十三條ニ曰ク「埋藏物ニ關シテハ第七條ヲ除クノ外本法ノ規定ヲ準

用ス學術技藝若クハ考古ノ資料ニ供スヘキ埋藏物ニシテ其所有者知レサルトキハ其所有權ハ國庫ニ歸屬ス此場合ニ於テハ國庫ハ埋藏物ノ發見者及ヒ埋藏物ヲ發見シタル土地ノ所有者ニ通知シ其價格ニ相當スル金額ヲ給スヘシ

埋藏物ノ發見者ト埋藏物ヲ發見シタル土地ノ所有者ト異ナルトキハ前項ノ金額ハ折半シテ之ヲ給スヘシ

本條ノ金額ニ不服アル者ハ第二項ノ通知ノ日ヨリ六箇月内ニ民事訴訟ヲ提起スルコトヲ得」

同法第十六條ニ曰ク「遺失物其他本法ノ規定ヲ準用スル物件ヲ隱匿シ若クハ不正ニ處分シタル者ハ三月以下ノ重禁錮又ハ二十圓以下ノ罰金ニ處ス前項ノ罪ハ刑法第三百七十七條ニ掲ケタル親屬ニ係ルトキハ之ヲ論セス本罪ノ構成要件ヲ舉クレハ左ノ如シ

第一 本罪ノ目的物ハ拾得物、埋藏物、誤テ占有シタル物件、他人ノ置去リタ

本罪ノ構成要件

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八一八
第三節 遺失物埋藏物ニ關スル罪

拾得物

埋藏物

ル物件又ハ逸走ノ家畜タルコト
 拾得物理藏物共ニ他人ノ所有ニ屬スルモ
 拾得物トハ拾得シタル遺失物ヲ云フ而シテ遺失物トハ保有者カ保有ヲ
 拋棄スルノ意思ナクシテ偶然其保有ヲ失ヒタル可動の物件ヲ謂フ而シ
 テ自己ノ保有範圍内ニ於テ一時其所在ヲ遺忘シタル物ハ其保有ヲ失ヒ
 タルモノト謂フコトヲ得サルヲ以テ遺失物ニアラス又保有者カ任意ニ
 保有ヲ失ヒタルモノ又ハ他人ヨリ奪取セラレタルモノハ遺失物ニアラ
 ス通常遺失物ト謂ヘハ土地ノ上ニ遺失セラレタル物ニ限ルカ如キモ河
 海ニ漂流若クハ沈没セル物(即チ漂流物水中ノ遺失物)モ亦遺失物ノ一種
 ト謂フコトヲ得ヘシ拾得トハ遺失物ヲ自己ノ保有ニ移スコトヲ謂フ
 埋藏物トハ或動産又ハ不動産中ニ埋没セラレタル物件ニシテ所有者ノ
 判明セサルモノヲ謂フ例之ハ土中ニ埋没セル古金銀寶玉若クハ壁襖内
 ニ埋伏セル紙幣等ノ如シ而シテ埋没シタルコトヲ要スルカ故ニ假令或

誤テ占有シタル者

物件ノ所有者不明ナリト雖モ其物件カ容易ニ目撃シ得ヘキ場所ニ存在
 スルカ又ハ鑛物ノ如ク假令地中ニ存在シテ容易ニ目撃シ得ヘカラサル
 モ土地ノ自然的產出物ニシテ地中ニ埋没セラレタルモノニアラサルモ
 ノハ埋藏物ト謂フコトヲ得ス然レトモ苟クモ埋没ノ事實アル以上ハ其
 原因カ人爲ニアルト天災其他ノ出來事ニ依ルトハ問フ所ニアラサルナ
 リ水道鐵管ノ如キ假令地下ニ存スルモ其所有者ノ明瞭ナルモノハ埋藏
 物ニアラサルヤ勿論ナリトス遺失物理藏物共ニ他人ノ所有ニ屬スルモ
 ノタルコトヲ要スルカ故ニ無主物ヲ包含セス但シ法律カ所有所持ヲ禁
 シタル物ヲ包含ス(同法第一條)
 誤テ占有シタル物トハ現占有者ノ占有(保有)ノ原因ニ於テ錯誤アル物ニ
 シテ其錯誤ハ現占有者ニ存スルト又ハ他人カ錯誤ニ依テ現占有者ニ占
 有ヲ移シタルトハ問フ所ニアラス例ヘハ浴場ニ於テ下駄ヲ履キ違ヘ又
 ハ荷物配達人カ甲ノ家ニ配達スヘキ荷物ヲ乙ノ家ニ配達シタルカ如シ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八二一
 第三節 遺失物理藏物ニ關スル罪

但シ後ノ場合ニ於テ先方ノ錯誤ヲ利用シ其受取權ヲキコトヲ告ケスシ
テ受取タルトキハ詐欺取財ヲ構成スルコト有リ得ヘキナリ

明治三十八年(九)第二一五號同年三月九日大審院第一刑部宣告判決理由ニ依レハ因
テ原判決ヲ關スルニ所論ノ如ク一種ノ荷物ハ當事者双方ノ違算ニ依リ偶然誤テ被告
ハ占有ニ歸シタル事實ニシテ刑法第三百九十五條ニ所謂受寄ノ財物又ハ委託ヲ受ケ
タル物件ニアラスシテ遺失物法第十二條ニ所謂誤テ占有シタル物件ナレハ被告カ不
正ニ之ヲ處分シタルハ即チ同法第十六條ニ照シテ處斷スヘキ犯罪ナルニ原院カ刑法
第三百九十五條ヲ適用シタルハ擬律錯誤ノ判決ナリト解シタルハ正當ナリ

他人ノ置去リタル物件トハ他人カ自己ノ保有スル範圍内ニ遺留シタル
者即チ他人ノ保有ヲ離ル、ト同時ニ事實上自己ノ保有内ニ移ル物ヲ謂
フ(遺留品)

他人ノ置去リタル物件
逃走ノ家畜

逃走ノ家畜ニ付テハ別ニ説明ヲ要セス

第二 隱匿シ若クハ不正ニ處分シタルコト

法文ニ隱匿シ又ハ不正ニ處分シタルモノト云フハ共ニ自己ノ物トスル

隱匿
處分

意思ノ實行ヲ總稱スルモノニシテ隱匿ハ其所在ヲ不明ナラシムルコト
ヲ謂ヒ處分ハ費消ヲ意味ス(委託物費消)而シテ自己ノ物トスルノ意思ハ
遺失物ヲ拾得スル當時ニ於テ存在スルト否トニ關セズ苟クモ第一要件
中ニ列記シタル物件ニ對シテ此意思ノ實行アルトキハ本罪ヲ構成スル
ナリ(若シ遺失物ナリト誤信シテ他人ノ所有物ヲ竊取シ之ヲ處分シタル
トキハ刑法第七十七條第三項ニ基キ遺失物法違犯トシテ處罰スヘキモ
ノナリ)而シテ本罪ハ自己ノ物トスル意思實行ヲ必要トスルカ故ニ單ニ
拾得物ノ届出ヲ爲サ、ルノミニテハ本罪ヲ構成セス
終リニ本罪ノ被害者ハ本罪ノ目的物ニ對シ返還ノ請求權アル者はナリ
(遺失物法第十六條)但シ所有所持ヲ禁シタル物件ニ付テハ本罪ノ被害者ハ
官署ナリト云ハサルヘカラス

人的刑罰
原因

家資分散ニ關スル罪ハ破産ニ關スル罪ト共ニ債務者カ自己ノ財産ヲ故意

第四節 家資分散ニ關スル罪

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八二三
家資分散ニ關スル罪

又ハ過失ニ因リテ減少シ若クハ財産ノ狀況ヲ偽ルコトニ因リテ債權者ノ債權ヲ毀損シ又ハ危險ナラシムル所爲ニシテ現行法ノ規定ニ依レハ家資分散ニ關スル罪ハ刑法第三百八十八條第三百八十九條ニ於テ之ヲ規定セリ

刑法第三百八十八條ニ曰ク「家資分散ノ際其財産ヲ藏匿脱漏シ又ハ虛偽ノ負債ヲ増加シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス」

情ヲ知テ虛偽ノ契約ヲ承諾シ若クハ其媒介ヲ爲シタル者ハ一等ヲ減ス

刑法第三百八十九條ニ曰ク「家資分散ノ際帳簿ノ類ヲ藏匿毀棄シ若クハ分散決定ノ後債主中ノ一人又ハ數人ニ其負債ヲ私償シテ他ノ債主ヲ害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス」

此規定ハ以前民事上ノ無資力ト商事上ノ支拂停止トヲ區別セス共ニ身代限り又ハ家資分散ノ處分(明治二十三年法律第六十九號參照)ニ付シタル當時ニ在テハ民事上ノモノニモ商事上ノモノニモ適用セラレタリシモ明治二十六年七月一

家資分散
罪ト商人

日舊商法ノ一部施行以來商事上ノ支拂停止ハ舊商法中破産法ノ規定ニ依リ破産ノ處分ニ付シ有罪破産ニ關シテハ明治二十三年法律第一號有罪破産處斷法ニ依リ處斷セラル、コト、ナリ其後明治三十二年法律第四十九條商法施行法第三百三十八條ニ依リ舊商法第九百七十八條ヲ改正シ商人ノ支拂停止ヲ以テ破産處分ニ付スルコト、爲シタルヲ以テ現今ハ商人ノ支拂停止ニ付テハ常ニ商法中破産法ノ規定ニ依リ有罪破産トシテ之ヲ處罰シ非商人ノ家資分散ニ付テノミ刑法第三百八十八條第三百八十九條ノ規定ヲ適用スルコト、ナリタリ

第一 家資分散ニ關スル罪ヲ分析スレハ左ノ如シ

(一) 家資分散ノ際タルコト

家資分散ノ際トハ明治二十三年法律第六十九條家資分散法ニ依リ家資分散ノ宣告ヲ受クヘキ狀況ニ在ルコトヲ意味スルモノニシテ苟クモ此狀況ニアル以上ハ之カ宣告ヲ受ケタルト否トハ問フ所ニアラス蓋シ刑

家資分散
ノ際

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八二五
 產ニ對スル罪 第四節 家資分散ニ關スル罪

事裁判權ハ民事裁判權ト互ニ獨立ス從テ特別ノ明文ナキ以上ハ刑事裁判ハ民事裁判ノ拘束ヲ受クヘキモノニアラス犯罪ノ構成條件若クハ處罰條件ノ有無ハ刑事裁判所ニ於テ獨立シテ之ヲ審理スヘキモノナルカ故ニ民事裁判所ニ於テ家資分散ノ宣告ヲ與ヘタルト否トニ拘ハラス刑事裁判所ニ於テ獨立シテ犯人カ此宣告ヲ受クヘキ狀況ニアルヤ否ヤヲ審理セサルヘカラス大審院ハ嘗テ本罪ノ處罰條件トシテ民事裁判所ニ於テ家資分散ノ宣告ヲ與ヘタルコトヲ要ストノ説ヲ採リタルモ(明治二九年大審院判決二二號同三十四年(一)一三〇四號參照)此説ノ論旨ハ家資分散ニ關スル裁判カ刑事裁判所ト民事裁判所トノ間ニ牴觸ヲ來スノ恐アルヲ以テ此牴觸ヲ防ク爲メニ刑事裁判所ハ本罪ノ裁判ヲ爲スニ當リ民事裁判所ノ宣告ヲ必要トシ之ヲ無視スルコトヲ得スト謂フニアリ現今ハ此ノ宣告ヲ必要トセストノ説ヲ採ルニ至リタリ(明治二九年大審院判決二二號同三十四年(一)一三〇四號參照)家資分散法第一條ニ曰ク民事訴訟法ノ強制執行處分ニ因リ義務ヲ辨濟

スル資力ナキ債務者ニ對シテハ管轄裁判所ハ職權ニ因リ又ハ申立ニ因リ決定ヲ以テ家資分散者タルノ宣告ヲ爲スヘシ右ノ決定ハ口頭辯論ヲ要セスシテ之ヲ爲スコトヲ得此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

(二)負債者カ自己ノ財産ヲ藏匿脱漏シ又ハ虛偽ノ負債ヲ増加シ又ハ帳簿ノ類ヲ藏匿毀棄シ又ハ家資分散決定ノ後債主中ノ一人又ハ數人ニ負債ヲ私償シテ他ノ債主ヲ害シタルコト

財産トハ動産不動産ノ外ニ債權ヲ包含スルモノトス

藏匿トハ汎ク財産ノ狀況ヲ隱匿スルコトヲ謂フ例ハ虛偽ニ自己ノ財産ヲ賣却シ又ハ貸金證書ヲ隱匿スルカ如シ

脱漏トハ汎ク財産ヲ減少スルコトヲ謂フ例ハ財物ヲ眞ニ賣却シ又ハ債權ヲ拋棄スルカ如シ而シテ此等ノ處分行爲カ民法第四百二十四條廢罷訴權ニ依リ取消サル、ト否トハ本罪ノ構成ニ關係ナキモノトス

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八二七
 産ニ對スル罪 第四節 家資分散ニ關スル罪

毀棄トハ毀損又ハ拋棄ト解スヘク帳簿ヲ偽造變造スルハ財産ノ藏匿中ニ包含セララルヘシ

處罰條件

債主中ノ一人又ハ數人ニ其負債ヲ私償シテ他ノ債主ヲ害スルノ所爲ニ付テハ法律ハ家資分散決定ノ後ニ行ハレタルコトヲ要件トセルカ故ニ

共犯ノ責任關係

（第三百八十九條）此所爲以前ニ於テ既ニ民事裁判所ニ於テ家資分散ノ確定宣告ヲ與ヘタルコトヲ以テ本罪ノ處罰條件トス

有罪破産

本罪ノ正犯ハ家資分散ノ狀況ニ在ル負債者又ハ其宣告ヲ受ケタル者ノ身分アルコトヲ必要トスルモ本罪ニ付テ總則共犯例ノ適用ヲ妨ケス故ニ第三百八十八條第二項ニ於テ特別ニ規定セル場合以外ニ於テハ此身分ナキ者ハ總則ニ所謂教唆及ヒ從犯トシテ處罰スルコトヲ得ヘシ

一、詐欺破産

第二 破産ニ關スル罪ハ舊商法第三編第九章ニ於テ規定セリ却チ左ノ如シ
第一千五百條ニ曰ク破産宣告ヲ受ケタル債務者カ支拂停止又ハ破産宣告

二、過怠破産

ノ前後ヲ問ハス履行スル意ナキ義務又ハ履行スル能ハサルコトヲ知リタル義務ヲ負擔シタルトキ又ハ債權者ニ損害ヲ被ムラシムル意思ヲ以テ貸方財産ノ全部若クハ一部ヲ轉匿シ藏匿シ若クハ脱漏シ借方現額ヲ過度ニ掲ケ又ハ商業帳簿ヲ毀滅シ若シクハ偽造變造シタルトキハ詐欺破産ノ刑ニ處ス

第一千五十一條ニ曰ク破産宣告ヲ受ケタル債務者カ支拂停止又ハ破産宣告ノ前後ヲ問ハス左ニ掲クル行爲ヲ爲シタルトキハ過怠破産ノ刑ニ處ス

（一）二身又ハ一家ノ過分ナル費用博奕空取引又ハ不相應ノ射利ニ因リテ貸方財産ヲ甚シク減少シ若クハ過分ノ債務ヲ負ヒタルトキ
（二）支拂停止ヲ延ハサンカ爲メ損失ヲ生スル取引ヲ爲シテ支拂資料ヲ調ヘタルトキ
（三）支拂停止ヲ爲シタル後支拂又ハ擔保ヲ爲シテ或ル債務者ニ利ヲ與ヘ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財産ニ對スル重罪 第二章 財 八二九
第三編 第四節 家資分散ニ關スル罪

財團ニ損害ヲ加ヘタルトキ

(四)商業帳簿ヲ秩序ナク記載シ藏匿シ毀滅シ又ハ全ク記載セザルトキ

(五)破産者カ第三十二條第九百七十九條又ハ第千三條第二項ニ規定シタル義務ヲ履行セザルトキ

第千五十二條ニ曰ク前二條ノ罰則ハ會社ノ義務擔當ノ任アル社員若クハ取締役及ヒ清算人ニモ之ヲ適用シ又第千五十條ノ罰則ハ破産管財人及ヒ有罪行為ヲ行フ際犯者ヲ助ケ又ハ有罪行為ヲ破産者ノ利益ノ爲メニ行ヒタル者ニモ之ヲ適用ス

第千五十三條ニ曰ク債權者集會ニ於ケル議決ニ關シ債權者ニ賄賂ヲ爲シタルトキハ其雙方ヲ二年以下ノ重禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

以上ノ規定中第千五十條ハ詐欺破産ヲ規定シ第千五十一條ハ過怠破産ヲ規定シ何レモ(一)法文ニ破産宣告ヲ受ケタル債務者カトアルヲ以テ債務者カ舊商法第九百七十八條(商法施行法第百三十八條參照)ニ依リ民事裁判所ニ於テ破産ノ

共犯者ノ責任關係

宣告ヲ受ケタルコトヲ要ス從テ假令法律ニ列記ノ所爲アルモ此宣告ヲ受ケタル以上ハ有罪破産トシテ處罰スルコトヲ得ス(二)法律ハ有罪破産ノ行爲ヲ列記セルカ故ニ假令此列記以外ニ於テ債權者ノ債權ヲ侵害スルモ本罪ヲ構成セザルヘシ反之苟クモ以上列記ノ所爲アル以上ハ法律ハ當然債權侵害ノ行爲アリタルモノト看做セルナリ亦苟クモ此列記ノ行爲アル以上ハ其行爲カ商法第九百九十一條第九百九十一條ノ規定ニ依リ無効又ハ取消サル、ニ至ルモ本罪ノ構成ニハ關係ナキモノトス第千五十二條ハ商會社ノ業務擔當ノ任アル社員若クハ取締役及ヒ清算人モ詐欺破産及ヒ過怠破産ノ主體タリ得ヘキコト破産管財人モ詐欺破産ノ主體トナリ得ヘキコト及ヒ破産ノ宣告ヲ受ケタル者カ詐欺破産ノ共犯者タル場合ニ關スル規定ナリ但シ破産宣告ヲ受ケタル者ト雖モ本條以外ニ於テ猶ホ總則共犯例ニ依リ教唆又ハ從犯トシテ處罰スルコトヲ得ルナリ第千五十三條ハ同法第千三十五條以下ニ規定スル債權者集會ニ於ケル議決ニ關シ債權者ニ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八三一
第四節 家資分散ニ關スル罪

處罰條件

賄賂ヲ授受スルコトヲ處罰スル規定ニシテ贈賄者カ破産者タルト第三者タルトハ問フ處ニアラス法文ニハ賄賂ヲ爲シタルトキハトアルヲ以テ賄賂ノ合意ノミニテハ之ヲ處罰スルコトヲ得サルモノトス

以上家資分散ノ際タルコト及ヒ破産宣告ヲ受ケタルコトハ家資分散ニ關スル罪及ヒ有罪破産ノ處罰條件タルニ止マリ罪ノ構成要件ニハアラサルナリ從テ債務者ニ於テ故意又ハ過失ニ依リ此條件ヲ招キタルコトヲ必要トセス又此處罰條件ノ具備セルコトヲ知リタルコトヲ要セス(若シ反對說ニ從ヒ之ヲ以テ構成要件トスレハ債務者ニ於テ自己ノ責任ニ因リ此構成要件ヲ招キタルコトヲ必要トスヘキナリ)同一分散財團ニ對スル總債權者及ヒ同一支拂停止ヲ受ケタル總債權者即チ同一破産財團ニ對スル總債權者ハ本罪ノ被害者ニシテ又此同一處罰條件ヲ備ヘタル共同債務者ニ依テ行ハル、種々ノ有罪行為ハ一罪トシテ論スヘキモノトス

以上説明スル所ニ依テ猶ホ左ノ如キ結果ヲ生スヘシ

處罰條件
タル結果

(一)債務者カ同一家資分散ノ際又ハ同一支拂停止又ハ破産宣告ノ前後ニ於テ法文ニ列記シタル種々ノ有罪行為ヲ爲シタルトキハ假令自然上ノ所爲ハ數個アルモ處罰條件カ同一ナルヲ以テ此場合ニハ一罪ヲ以テ論スヘキモノトス

(二)前ト同一理由ニ依リ同一支拂停止又ハ破産宣告前後ナルトキハ二個ノ有罪破産ヲ以テ論スルコトヲ得ス從テ重キ有罪破産ト輕キ有罪破産ト生シタルトキハ重キ詐欺破産ヲ以テ論スヘキモノトス

(三)債務者ノ有罪行為(以上第一千五百條第一千五百一條ニ列記シタル行為)ト此處罰條件トノ間ニハ因果ノ關係アルコトヲ必要トセス

(四)此處罰條件ハ債務者ノ故意又ハ過失ニ依テ之ヲ招キタルコトヲ必要トセス又債務者ニ於テ此條件ノ具備セルコトヲ知リタルコトヲ要セス

(五)本罪既遂ノ時期及ヒ公訴時効開始ノ時期ハ以上法文ニ列記シタル有罪行為ヲ遂ケタルトキニシテ此處罰條件ノ發生時期トハ關係ナキモノ

日本刑法論(各論)

本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八三三

產ニ對スル罪

第四節

家資分散ニ關スル罪

財 八三三

有罪破産
處罰方

トス而シテ有罪行為カ未遂ナルトキハ假令此處罰條件ハ既ニ發生スル
モ未遂タルヲ失ハサルナリ

(六)本罪ノ場所モ亦有罪行為ノ行ハレタル場所ニ依テ定マリ此處罰條件
ノ發生シタル場所トハ關係ナキモノトス

有罪破産處罰方ニ付テハ明治二十三年十月法律第百一號ニ於テ左ノ如ク
規定セリ

商法ニ從ヒ破産ノ宣告ヲ受ケタル者有罪破産ニ係ルトキハ左ノ區別ニ
從テ處斷ス

(一)詐欺破産ヲ爲シタル者ハ輕懲役ニ處ス

(二)過怠破産ヲ爲シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

明治三十六年(第一號)明治三十六年三月十三日宣告大審院判決ニ依レハ商人ト雖ト
モ強制執行處分ヲ受ケ債務ヲ辨濟スルコト能ハサル状態ニ陥リタルトキハ其状態ハ
即チ家資分散ナリトス從テ其状態ニ在ル商人ニシテ財産脱漏等ノ所爲アルトキハ刑
法ノ家資分散ノ法條ヲ適用シテ處分スヘキモノナリト說明セリト雖トモ卑見ニ依レ

「家資分
散ノ際」
ニ關スル
件

ハ(一)有罪破産ニ關スル規定ハ家資分散罪ニ對スル特別規定ニシテ破産ノ宣告ヲ受ケ
ヘキ商人ニ對シテハ刑法第三百八十八條ハ其適用ナキモノト信ス然ラサレハ同一行
爲ニシテ先ニ家資分散罪トシテ處罰シ更ニ有罪破産トシテ之ヲ處罰スルコト、ナリ
二重ニ刑ヲ科スルカ如キ結論ヲ生スヘキナリ(三)家資分散ノ狀況ニ在リトハ必スシモ
民事ノ強制執行處分ヲ受ケルコトヲ要セス畢竟強制執行處分ニ依ルモ債務辨濟ノ資
力ナキ状態ヲ指スモノト解スヘキナリ

明治三十七年(第一二八四號)同年七月四日宣告大審院判決要旨ニ曰ク

家資分散法第一條ニ民事訴訟法ノ強制執行處分ニ因リ債務ヲ辨濟スル資力ナキ債務
者云々トアリテ刑法第三百八十八條ノ犯罪構成ノ要件タル家資分散ノ狀況ニアル者
トスルニハ被告カ強制執行處分ヲ受ケタルノ事實アルヲ要シ單ニ貸借ノ對照上無資
力ナルヲ以テ是レリトセサルコトハ所論ノ如シ然レトモ差押ハ強制執行處分ナルヲ
以テ既ニ差押ニ着手シタルモ差押フヘキ財産ナク從テ差押ヲ遂行スル能ハサルトキ
ハ前記法條ノ所謂強制執行處分ニ因リ債務ヲ辨濟スルノ資力ナキモノトス而シテ原
判決ニハ市左衛門ハ強制執行ノ爲メ執達吏ヲシテ智太郎ノ動産物ヲ差押ヘシメント
シタリ又市左衛門ハ差押ノ目的ヲ達スルヲ得サリシモノナリトアリテ債權者市左衛
門ハ執達吏ヲシテ差押ニ着手セシメタルモ被告カ甚左衛門ト虛偽ノ賣買ヲ爲シタル
爲メ差押ヲ遂行スル能ハサリシ事實明白ニシテ無資力ノ狀況ニ在ルコトハ勿論強制

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八三五
産ニ對スル罪 第四節 家資分散ニ關スル罪

執行ナシト云フヲ得ス然ラハ本件ニ付テハ強制執行處分及無資力ノ二要件ヲ具備スルヲ以テ被告ハ家資分散ノ狀況ニ在ルモノニシテ原告カ刑法第三百八十八條ニ依リ處斷シタルハ相當ナリトス

右判決要旨ハ左ノ結論ヲ包含ス

第一 刑法第三百八十八條ノ犯罪構成ノ要件タル家資分散ノ狀況ニアルモノトハ被告カ強制執行處分ヲ受ケタルノ事實アルコトヲ要シ單ニ貸借ノ對照上無資力ナルヲ以テ足レリトセス
第二 既ニ差押ニニ着手シタルモ被告カ他人ト虚偽ノ賣買ヲ爲シタル爲メ差押ヲ遂行スル能ハサリシ場合ニ於テハ家資分散ニ關スル罪ヲ構成ス

以上ノ結論ハ誤リナキカ疑ナキヲ得ス卑見ニ依レハ刑法第三百八十八條ニ所謂家資分散ノ際トハ債務者カ民事訴訟法ノ強制執行處分ニ依リテモ義務ヲ辨濟スル資力ナキ狀態ニアルコトヲ意味シ苟クモ此ノ狀態ノ立證

セラル、以上ハ債務者カ現ニ強制執行處分ヲ受ケタルト否トハ問フ所ニアラサルナリ故ニ此狀態ニアル債務者ニシテ虚偽ノ賣買ヲ爲シタルカ其他同法條規定ノ行爲債權者ヲ害スヘキ行爲アルトキハ同條ノ罪ヲ構成スヘク其侵害行爲カ強制執行ヲ受ケタル後タルト否トハ問フ所ニアラサルナリ而シテ前掲判決要旨ニ依レハ家資分散ノ際トハ債務者カ強制執行ヲ受ケタルコトヲ要スト解シナカラ債權者ヲ害スヘキ行爲ハ強制執行ヲ受ケタル以前ニ在リタル場合ニ於テモ本罪ヲ構成スト解セリ換言スレハ同判者ニ依レハ家資分散ノ際ニ行ハレタルニアラサル行爲カ家資分散ノ際ニ行ハレタルコトヲ必要トスル罪ヲ構成スヘキコトヲ結論セルモノニシテ明カニ論理ニ矛盾アリト云ハサルヘカラス論者或ハ同判旨ヲ辯護シテ曰ク「本罪ノ構成要件タル行爲ハ債務者ノ無資力ナル狀態ニ於テ行ハレタルコトヲ以テ足レリトスルモ之ヲ罪トシテ判決スルニハ債務者カ強制執行ニ依リ其無資力ナリシコトヲ證明セラレタルコトヲ要スト然レトモ罪トナ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財産ニ對スル重罪 第二章 財 八三七
産ニ對スル罪 第四節 家資分散ニ關スル罪

ルヘキ事實ヲ認ムルコトニ關シ法律ハ立證ノ方法ヲ制限セサルノミナラ
ス罪トナルヘキ行爲カ行ハレタル當時ニ於テ債務者カ果シテ無資力ノ狀
態ニアリシヤ否ヤハ其當時ノ狀態ニ依リ判定スヘキモノニシテ行爲後ニ
行ハレタル強制執行處分ニ依リテ立證スヘキモノニアラサルカ故ニ結局
反對論旨ハ理由ナキモノト云ハサルヘカラス

第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物

ニ關スル罪

第一款 詐欺取財ノ罪

詐欺取財
本罪ノ構成要件

詐欺取財トハ不法ニ自己又ハ第三者ヲシテ財産上ノ利益ヲ收得セシムル
爲メ(遠因)他人ヲ欺罔又ハ恐喝シテ他人ノ財物又ハ證書類ヲ自己又ハ第三
者ノ保有ニ移スコトニ依テ他人ノ財産ニ損害ヲ與フルコトヲ意味ス(刑法
一百九十九條)而シテ本罪ノ構成要件ニ付テ説明スレハ左ノ如シ
第一 他人ヲ欺罔又ハ恐喝シタルコト

欺罔

一 欺罔トハ他人ヲ錯誤ニ陥ラシメ又ハ既ニ陥リタル他人ノ錯誤ヲ更ニ
強固ニスルコトヲ謂ヒ錯誤トハ眞實ト相違スル觀念ヲ意味ス而シテ此
誤リノ觀念ハ單純ナル事實ノ不知ト區別スルヲ要ス例之ハ贈與ヲ賣
買ト誤解スルカ如キ無償ノ貸借ヲ賃貸借ト誤解スルカ如キハ錯誤ナリ
反之鐵道馬車ノ車掌ノ目ヲ掠メ無錢ニテ乘込ミタル者アルヲ車掌カ
知ラサルトキハ單純ナル事實ノ不知ニシテ錯誤ニアラス自働機ノ内ヘ
偽造貨幣ヲ投スル場合亦同シ然レトモ苟クモ他人ノ錯誤ヲ誘起シ又ハ
之ヲ利用スル以上ハ其手段方法ノ如何ハ問フ所ニアラサルナリ例之ハ
獨逸刑法第二百六十三條ニ於テ詐リノ事實ヲ示シ又ハ眞實ノ事實ヲ變
態シ又ハ掩蔽スルコトヲ以テ手段トシタル場合ニ限り詐僞ヲ以テ論ス
ルコト、シ從テ其事實トハ過去又ハ現在ノ狀況若クハ現象ヲノミ包含
シ將來ノコトヲ意味セストハ一般獨逸刑法學者ノ説明スル所ナリト雖
モ我現行刑法ニハ此等ノ制限ナキヲ以テ(イ)將來ノコトヲ以テ手段トス

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八三九
關スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ

ル場合ニ於テモ猶ホ欺罔ト云フコトヲ得ヘシ故ニ例ヘハ將來必ラス返
 金スヘシト主張シ又ハ近キ將來ニ於テ必ス此土地ノ上ニ鐵道ノ布設ア
 ルヘシト主張シ仍テ他人ニ此ノ不實ノ主張ヲ信用セシメタルトキハ同
 シク欺罔ト云フコトヲ得ヘシ(明治二十九年第六三二號同年六月二十六
 日宣告大審院判決ニ依レハ未來ニ屬スル
 事項ト雖トモ虛構ニ掛リ人ヲ欺クニ足ルモ正當ナリ)
(口)人格ヲ詐リ(乙)
 詐欺取財ノ要素タル欺罔ナリト解セルハ正當ナリ
 カ甲ノ名ヲ詐ルカ如シ)又ハ財産上ノ資力ヲ詐リ(貧困ナルニ富饒ナルカ
 如ク詐リ)又ハ希望營利ノ目的ナルニ拘ハラズ慈善ノ目的ナリト詐リ義
 捐金ヲ集ムルカ如シ)希望意見ヲ詐リ主張スル場合即チ單純ナル判定ト
 同時ニ認識シ得ヘキ事柄ノ主張ヲ包含スル場合ハ勿論單純ナル判定即
 チ物ノ評價又ハ物ノ品質ニ關スル意見ノ表示例ヘハ物ノ價值又ハ品質
 ヲ過大ニ稱賛シ他人ヲシテ此不實ノ主張ヲ信用セシメタル場合ヲモ包
 含ス(ハ)他人ニ不實ノ事柄ヲ誤信セシムル手段トシテ別ニ信用ヲ買フヘ
 キ材料ヲ使用スルコトヲ必要トセス強テ不實ノ事柄ヲ主張スルカ其他

不作爲ニ
 依ル欺罔

苟クモ他人ヲシテ錯誤ニ陥ラシメ又ハ既ニ陥リタル他人ノ錯誤ヲ更ニ
 強固ニスルコトヲ以テ足レリトス、既ニ辨濟ヲ終リタル債務者カ辨濟ノ
 事實ヲ忘却シタルニ當リ其債務者ニ對シテ貸金ノ請求ヲ爲スカ如キハ
 後ノ場合ニ屬ス(其ノ他ノ通説者ニイエルハ獨逸刑法第百六十二條ノ解釋
 ニ於テ本文ト同一ノ說ヲ採リ單ニ事實ヲ主張スルノミヲ以テ足レリト
 シ反テフラシク氏コトニハ單純ナル事實ノ主張ノ外ニ更ニ此ノ主
 張ヲ信用セシムル爲メニ何等カ)次ニ欺罔ノ手段ハ必スシモ作爲ニ依ル
 コトヲ要セス不作爲沈黙ニ依テモ亦之ヲ行フコトヲ得ヘシ其不作爲即
 チ沈黙ハ其眞實ヲ告クル法律上ノ義務アル場合ニ限ル而シテ此法律上
 ノ義務ハ法律ノ明文ニ依テ又ハ契約(例ヘハ商家ノ主人カ金庫ヲ自己ノ
 金庫ニ付不足ヲ生シタルトキハ番頭ニ托スルニ當リ金庫内ノ現在
 約スルト同時ニ若シ主人カ其金庫内ヨリ現金ヲ取出ストキハ必ス其旨
 ナ番頭ニ告グヘキコトヲ約シタルニ拘ハラズ無斷ニ現金ヲ取出シタル
 後チ之ヲ告グスシテ其不足額ニ對スル辨償ヲ番頭ヨリ受クルカ如シ)
 ニ依テ發生スルハ勿論其他普通ノ取引ノ慣習ニ於テ各自ノ固持スヘキ
 信用ニ基キ又ハ既ニ行ヒタル自己ノ行爲ニ因テ眞實ヲ告クルコトノ必

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財産ニ對スル重罪 第二章 財 八四一
 產ニ對スル罪 第五節 詐取欺財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ
 關スル罪

要ナル場合ニ於テ此カ發生ヲ認ムヘキナリ例之ハ他人ニ金庫ヲ托シタル後チ窃カニ其金庫内ノ金員ノ一部ヲ取出シ置キナカラ受托者ニ對シテ先ニ寄托シタル全部ノ金員ヲ請求スルカ如キ又ハ五圓ノ兩替ヲ依頼シタルニ先方ヨリ拾圓ヲ交付セントスル場合ニ於テ五圓ノ兩替ヲ依頼シタルノ眞實ヲ告ケスシテ之ヲ受取ルカ如キ又ハ全體ノ關係ヨリ視テ他人ニ對シテ負債ノ辨濟ニ必要ナル手段ヲ有スルカ如ク信用セシムヘキ舉動アリタル後チニ於テ其辨濟無能力ナルコトヲ告ケスシテ金員ヲ借用スルカ如シ(信用詐欺 Kreditbetrug)例ヘハ人ヲシテ相當支拂ノ能力アルコトヲ豫期セシムヘキ服装ヲ爲シタルニ拘ハラズ囊中無一物タルコトヲ告ケスシテ登樓飲食スルカ如シ(無錢飲食 nachprellerei)ニ付テフランク氏ハ獨逸刑法學者ノ通説並ニ判例ニ反シテ詐欺ニアラストノ説ヲ採ルモ誤レリ(明治三十六年(レ)第三三二號同年三月二十六日宣告大審院判決)依レハ刑法第三百九十九條ノ欺罔トハ偽言其他總テノ方法ヲ以テ人ヲ錯誤ニ陷ラシムルノ事實ヲ告知セサルハ欺罔ノ一手段ナアルコトナシ故ニ抵當トナリ居ル事實ヲ告知セサルハ欺罔ノ一手段ナ

ハ正當ナリ(レ)反之既ニ支拂ヲ受ケタル貸金ニ付キ更ニ二重ノ支拂ヲ受ケルニ當リ其ノ二重ノ支拂ナルコトヲ告ケス又ハ商人カ單ニ貨物ノ瑕疵ニ付キ買手ニ之ヲ告ケス又ハ債務者タルヘキ者カ他ニ負債アルコトヲ債權者タルヘキ者ニ告ケサルノミニテハ欺罔ト云フコトヲ得ス(三)他人ヲシテ誤信セシメタル不實ノ事項ハ其性質ニ於テ可能的ノモノタルコトヲ要セス例ヘハ余ハ魔法ヲ使フコトヲ得ト主張スルカ如シ(水假令被欺罔者ニ於テ過失アルモ欺罔ノ成立ヲ妨ケス)

共同正犯
恐喝

明治三十五年(レ)第二〇一六號同年十二月二日宣告大審院判決ニ依レハ人ヲ欺罔シテ財物ヲ騙取センコトヲ共謀シ分身一體其目的ヲ遂行シタル以上ハ共犯者ハ表面直ニ接加功セサル行爲ニ付テモ責任ヲ負フヘキモノトスト解セリ

(二)恐喝トハ總テ人ヲシテ直接又ハ間接ニ(被恐喝者ニ關係アル第三者ニ於テ危害ヲ被ムルヘキコトヲ信用セシムル場合)危害ヲ被ムルヘキコトヲ信用セシムルコトニ依テ意思實行ノ自由ヲ制限スルコト(意思ノ實行ヲ強制スルコト)ヲ意味シ刑法第三百二十六條以下ニ規定スル脅迫罪ノ

日本刑法論(各論) 本論第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八四三
產ニ對スル罪 第五節 詐取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ
關スル罪

構成要件タル脅迫ト異ナル點ハ(イ)彼ハ他人ノ意思自由ヲ制限スルコトヲ必要トセス唯危害ヲ受クヘキコトヲ信用セシムルヲ以テ足レリトシ且ツ其危害ハ被脅迫者又ハ其親族ニ對スルモノニ限ルト雖モ恐喝取財ノ恐喝ハ不法ニ自己又ハ第三者ヲシテ財産上ノ利益ヲ收得セシムル目的ヲ以テ他人ノ自由意思ヲ制限シ財産上ノ處分行爲ヲ強制スルコトヲ要シ且ツ其危害ヲ受クヘキ者ハ被恐喝者又ハ其親屬以外ノ第三者ヲモ包含スルモノトス(ロ)脅迫ノ材料タル危害ノ種類ニ付テハ法律ニ於テ限定スト雖モ恐喝ノ手段タル危害ノ種類ハ法律ニ於テ限定セス(ハ)彼ハ脅迫者ニ於テ直接又ハ間接ニ(他人又ハ他ノ力ヲ利用シテ)危害ヲ加フヘキコトヲ以テ手段トスルコトヲ必要トスル(ニ)恐喝ハ恐喝者ニ於テ直接又ハ間接ニ危害ヲ加フヘキコトヲ以テ手段トスルノ外ニ人間ノ行爲ニ關セサル天災又ハ神ノ祟ヲ説クコトヲ以テ手段トスル場合ヲモ包含スルモノトス(カ)強盜罪ノ脅迫ト恐喝トノ差異ハ強盜罪ノ手段タル脅迫ハ

暴行カ有形的ニ他人ノ身體ヲ強制シ其抵抗力ヲ排除スルト等シク其脅迫ノ材料タル危害ハ無形的(精神的)ニ意思ノ自由即チ抵抗ノ意思ヲ全然排除スヘキ性質ノモノナラサルヘカラス換言スレハ強盜ノ手段タル脅迫ハ精神上ノ反抗ヲ全然防止スルニ反シ恐喝ノ材料タル危害ハ精神上ノ反抗ヲ制限スルニ過キス即チ被恐喝者ニ於テ反抗ヲ試ミ得ルノ餘地アルコトヲ必要トス從テ之ヲ形式ニ依テ區別スレハ前者ハ被脅迫者自體ニ對シテ其身體又ハ生命ニ對シ直チニ(切迫シテ)危害ヲ加フヘキコトヲ以テ手段トシタル場合ニ限ルヘキモノトス而シテ其以外ノ手段ニ依ル場合ニ於テハ恐喝ナリトス(強盜罪ノ説明參照)

次ニ欺罔ニ依ル騙取ト恐喝ニ依ル騙取ト異ナル點ハ前ノ場合ニ於テハ被騙取者ニ於テ自己ノ行爲ノ原因ニ關シテ錯誤アルコトヲ要シ反之後ノ場合ニ於テハ被騙取者ニ於テ自己ノ行爲ノ原因ニ關シテ誤錯アルコトナク自己ノ行爲カ他人ノ強制ニ基クコトヲ認識スルコトヲ要ス

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八四五
第五節 強盜罪 第五節 強盜罪ノ關係ニ關スル點

目的

第二 要件 不法ニ自己又ハ第三者ヲシテ財産上ノ利益ヲ取得セシムル
目的(遠因)ニ出タルコトヲ要ス
他人ヲ欺罔又ハ恐喝スルコトニ依テ他人ノ財物又ハ證書類ノ保有ヲ自
己又ハ第三者ニ移サシムルノ事實ヲ知ルコトノ外ニ更ニ此遠因ノ存在
スルコトヲ要ス

財産上ノ
利益

(一)財産上ノ利益ヲ所得ストハ財産ノ價值ヲ増殖スルコトヲ意味ス例ヘ
ハ新タニ債權ヲ得又ハ既ニ有スル債權ヲ確實ナラシムル爲メノ擔保ヲ
得ルカ如キ又ハ單純ナル占有ノ取得又ハ財産ニ對シテ切迫シタル危害
ヲ避クルコト又ハ債務ノ免除ヲ得ルカ如キヲ云フ

不法ノ利
益
民法上ノ
詐欺

(二)不法ノ利益トハ總テ此利益ニ對シテ法律上請求權ナキ場合ヲ總稱ス
而シテ民法第九十六條第一項ニ規定スル詐欺ニ基ク意思表示ハ取消權
者ヨリ其追認アル迄ハ詐欺者ニ於テ民法上請求權ヲ發生セス(民法第百
條參照)又法律行爲ノ要素ニ錯誤アル爲メ其行爲カ全然無効ナル場合

法律上ノ
請求權ト
詐欺
手段

(五)民法第九十(善良ノ風俗又ハ公ノ秩序ニ違背スル事項ヲ目的トスル法律
行爲ハ無効ニシテ此法律行爲ヨリ民法上ノ請求權ヲ發生セス(民法第九
從テ此種ノ契約ニ基キ相手方ニ對シテ爲シタル請求ハ不法ノ利益ヲ請
求スルモノト謂ハサルヘカラス然レトモ苟クモ既ニ法律上ノ請求權カ
存在スル以上ハ之レカ行使方法ニ於テ欺罔恐喝ノ手段アルモ詐欺取財
ヲ構成セス(獨逸刑法第二百六十三條ノ解釋ニ於テ獨逸帝國裁判所判例
氏ハ其手段ニ私法上ノ違法アルコトヲ以テ足レルケル)年(治)第三十五
六號同年六月十二日宣告大審院判決ニ依レハ恐喝手段ヲ用ヒ財物ヲ對
シ債權ヲ有セシヤ否ハ犯罪ノ成ニ注意スヘキハ假令法律上ノ請求
權ヲ有スルモ其請求名義ニ依ラス別途ノ請求名義ニ依ルトキハ不法ノ
利益ト云フコトヲ得ヘシ例ヘハ貸金辨濟ノ請求權アル者カ其負債者ヨ
リ賣買代金ノ前拂ニ托シテ金員ヲ請求スルカ如シ犯人ニ於テ此權利ア
リト誤解シタルトキハ不法ノ利益ヲ目的トスルノ意思ナキカ故ニ詐欺

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪第二章 財 八四七
產ニ對スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ
關スル罪

不法ノ利益ノ返還請求權

取財ヲ構成セザルナリ犯人ニ於テ假令不法ノ利益ヲ目的トスル意思アルモ其目的物カ現實自己ノ請求權ニ屬スルトキハ不能犯ナリ又一部ノ論者ハ不法ノ利益トハ其利益ニ對シ法律上返還ノ請求ヲ受クヘキ性質ノモノト解シ(被害者ニ於テ法律上之カ返還ヲ請求シ得ルモノ)從テ民法第七百八條ニ依リ供給者ニ於テ供給物返還ノ請求權ナキ場合ニ於テ其供給ヲ受クルコトハ不法ノ利益ト云フコトヲ得スト論シ例ヘハ汝ノ爲メニ仇敵ヲ殺スヘシ又ハ汝ノ爲メ淫ヲ密賣スヘシト欺罔シ其報酬トシテ金錢ヲ受クルモ詐欺取財ニ非スト論セリ蓋シ詐欺取財ハ他人ノ財産ト云フ法益ヲ侵害スル罪ナルカ故ニ相手方ニ於テ法律上保護ヲ受ケサル損失ヲ生スルモ法律上ノ損害ト云フコトヲ得ス法律上財産ニ損害ヲ與ヘラレタリト云フコトヲ得サルヲ以テ此ノ場合ハ詐欺取財ハ成立セスト論スルヲ以テ至當ナリト信ス(同上 獨逸刑法解釋ニ於テハクリン氏リーピング氏殊ニフランザ氏ハ木文ト同一ノ説ヲ採レリ)詐欺ノ方法ニ依リ賭博ニ勝チタルモノ

禁制品ノ詐欺取財

婚姻ノ詐欺取財

カ敗者ヨリ得タル財物ハ民法第七百八條ノ規定ニ依リ供給者ニ於テ返還請求權ナカルヘキカ故ニ此ノ場合ニ於テハ詐欺取財ヲ構成セス前段不法ノ利益ニ關スル説明ト同一理由ニ依リ法律カ財産トシテ保護セサルモノ即チ禁制品ヲ所持スル權利ナキモノヨリ騙取スルモ詐欺取財ト爲ラス(反對論旨ニ曰ク禁制品ハ絶對的ノモノニアラス常ニ關係的ノモノニシテ偽造貨幣トシテハ法律ハ之ヲ保護セサルモ地金ニ對シテハ之ヲ保護スルヲ以テ地金ノ詐欺取財ヲ以テ論スヘキモノナリト然レトモ苟クモ法律ニ違犯シテ禁制品ヲ所持スルトキハ其禁制品ニ付テハ絶對的ニ法律上ノ保護ヲ受ケサルモノト云ハサルヘカラス)婚姻ハ詐欺取財ノ手段タルコトヲ得ルヤノ問題ニ付テハ婚姻自身ハ不法ニアラスト雖トモ各個ノ場合ニ於テ若シ其婚姻關係ヲ利用シテ不法ナル利益ヲ收得シタルトキハ詐欺取財ヲ構成スルコトアリ得ヘシ例ヘハ婚姻繼續ノ意思ナキニ拘ラス恰モ此ノ意思アルカ如ク裝ヒ配偶者ヲ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八四九
 產ニ對スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ 關スル罪

欺罔シテ財物ヲ贈與セシメタル後配偶者ヲ虐待シテ同居ニ堪ヘサラシムルカ如シ

第三 要件 他人ノ財物又ハ證書類ヲ騙取スルコトニ依テ他人ニ財産上

ノ損害ヲ與フルコトヲ要ス

(一)他人ノ財物トハ汎ク他人ノ所有ニ屬スル有形物ヲ指シ動産及不動産ヲ包含ス或ハ竊盜強盜ノ目的物ハ動産(現實ニ動カシ得ヘキモノ)ニ限リ不動産ヲ包含セスト解スルモ(余輩ハ強盜ノ目的物ニ付テモ兩者ヲ包含スト解スルヲ至當ト信ス)詐欺取財ノ目的物ニ付テハ一般ニ動産不動産ヲ包含スト解セリ蓋シ佛文草案第四百三十四條及ヒ日本文草案第四百三十四條ニ於テ動産又ハ不動産ヲ云々ト規定シ又詐欺取財ト同一ニ處罰スル現行刑法冒認罪(刑法第三百九十二條)ニ於テモ他人ノ動産不動産ヲ云々ト規定シアルニ依テ見レハ刑法第三百九十條第一項ニ所謂財産ハ動産不動産ヲ包含スト解スルヲ至當トス(明治三十一年四月十日大審院判決ニ依レハ

他人ノ財物

所有權以外ノ物權ヲ包含ス

金錢ニ換價シ得ルモノヲ要ス

詐欺取財罪(刑法第三百九十條)ニ於ケル財物(而シテ(一)民法上他人ノ所有ニ屬スルコトヲ要スルカ故ニ自己ノ所有物ニシテ他人カ其物ノ上ニ權利ヲ有スルモノヲ包含セス例ヘハ質權、抵當權、先取持權、留置權ノ類是ナリ(三)刑法第三百九十條(明治二十九年五月八號)同年六月五日大審院判決(三)刑罰法第二項(照)決ニ依レハ質權ヲ有スル物件ハ法律ノ所謂財物ナリト爲ス從テ之ヲ以テ詐欺取財ノ目的物(明治三十四年八月七日大審院判決)ニ依テハ刑法第三百九十條他人ノ所有ニ屬スル若クハ證書類ヲ騙取シタル者ハ云々トアリテ必ス九十條他人ノ所有ニ屬スルコトヲ要スルモノト限定セス從テ自己ノ所有物ヲ欺取財ニ構成ストシテ交付シタルモノ(三)有形物タルコトヲ要スルカ故ニ意匠、特許、著作權、商標權、債權ノ類ヲ包含セス竊盜ノ目的物ニ關スル說明参照)而シテ其目的物ハ金錢ニ換價シ得ヘキ物タルコトヲ要ス(財法文ニ所有物ト云ハスナリ)

(三)本條ニ所謂證書類トハ汎ク財産上ノ利益ノ得喪、移轉、變更、消滅ヲ證明スル所ノ文書ヲ總稱シ其材料ノ紙片、木片タルト將タ金屬其他ノ物件タルト否トハ問フ所ニアラス而シテ(一)財産上ノ利益即チ金錢ニ換價シ得

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八五
關スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ

證書ノ内

財産上ノ損害

ヘキ利益ニ關スル證書タルコトヲ要スルガ故ニ其餘ノ文書ヲ包含セス
 (二) 文書タルコトヲ要スルカ故ニ入場券及ヒ乗車券ニシテ單ニ色紙ヲ以テ區別スルカ如キ文書ノ記載キモノハ之ヲ包含セス(三) 此利益ハ固ヨリ一般ニ法律上保護セラル、性質ノ利益タルコトヲ要ス(法律上一般ニ請求權アル所ノ利益タルコトヲ要ス)故ニ例之ハ不法ノ事項ヲ目的トスル法律行為ニ基キ當事者カ希望スル利益ハ之ヲ包含セス(民法第九十條參照)
 (三) 財産上ノ損害ト財産上ノ價值カ減少スルコトヲ云フ故ニ假令一面ニ於テ財物ヲ失フモ被欺罔者ニ於テ同時ニ此ニ相當スル對價ヲ得ルトキハ財産上ノ損害アリト云フコトヲ得ス例ヘハ欺罔ニ依リ甲會社ノ株券ナリト誤認シテ乙會社ノ株券ヲ買取リタルモ若シ甲乙何レノ會社ノ株券モ其市價同等ナリシトキ又國庫債券ナリト誤認シテ勸業銀行債券ヲ買取タルモ其市價同等ナリシカ如キ又清酒ナリト誤認シテ酒精ヲ買ヒ取リタルトキ其ノ市價同等ナリシカ如キハ何レモ詐欺取財ハ成立セス

相當ナル對價ヲ得タルコトヲ要スルニ付テハ標準

但シ被欺罔者カ相當ナル對價ヲ得タルヤ否ヤヲ決スルニハ被欺罔者ノ財産狀況ニ依テ決スヘキコトヲ注意セサルヘカラス換言スレハ被欺罔者カ得タル對價ヲ處分スルコトニ依テ一ノ損害ナク直チニ原狀ニ恢復スルコトヲ得ヘキ場合ニ限リ財産上ノ損害ナシト云フヘキナリ故ニ例ヘハ油小賣商ニ對シテ酒類ヲ油ナリト詐稱シテ賣付ケ代價ヲ支拂ハシタルトキハ油小賣商ハ爲メニ財産上ノ損害ヲ受ケタリト云フヘキナリ(經濟的價值ヲ標準トシテ斷定スヘキナリ但シ單純ナル感情的價值ニシテ不確定ナル價值ハ之ヲ標準トスルコトヲ得ス)而シテ其損害ハ永續的ナルト一時的ナルトハ問フ所ニアラス(明治三十五年(九)第三七六號同年四月十七日宣告大審院判決ニ依リハ偽造文書ヲ以テ人ヲ欺キ金圓ヲ騙取シタル事實アル以上ハ詐欺取財ハ成立シ被告ニ罪及ヒ其責任力ノ有無ハ此罪ノ成立ニ關係ナハト解ナリ)其損害ハ被害者ト犯トノ間ニ於テ此ノ損害ト相殺スヘキ別途ノ債權關係ノ存在スルコトニ依テ其成立ヲ妨ケラル、コトナシ次ニ注意スヘキハ財物ノ供給ニ對スル對價トシテ此ニ相當スル履行ノ確

日本刑論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財物ニ對スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ 八五三

實ナル法律上ノ請求權ヲ得タルトキハ財産上ノ損害ナシト云ハサルハ
カラス

明治三十六年(レ)第五三二號同年四月二十一日宣告大審院判決ニ依レハ他人ニ根抵當
トシテ差入タル地所ニ付キ其抵當權設定ノ登記ヲ了セサルチ寄貨トシ假裝債權ヲ作
爲シ其抵當トシテ同一地所ニ對シ抵當權設定ノ登記ヲ爲シ優先ノ順位ヲ占得シタル
モノ、如ク假裝シタル所爲ハ其債權ノ假裝タル事實確定スルニ於テハ該抵當登記ハ
無効ナルヲ以テ根抵當權者ノ權利ヲ侵害スルコトナキカ如キモ假裝ノ債權ニシテ一
且善意ノ第三者ニ讓渡セラレタリトセンカ第三者ハ當然其抵當ニ付優先ノ順位ヲ占
得シ根抵當權者ノ權利ハ害セラル、ニ至ルヘシ從テ完全ナル根抵當ヲ提供スルカ如
ク裝ヒ其實斯ル危險ナル抵當ヲ差入レ財産ヲ騙取シタル所爲ハ詐欺取財罪ヲ構成ス
ト解セルハ正當ナリ

第四 要件 自己又ハ第三者ヲシテ物ノ保有ヲ得セシメタルコト

法文ニ所謂騙取トハ他人ノ保有ヨリ自己又ハ第三者ノ保有ニ移スコト
ヲ意味シ(明治三十七年(レ)第一三五一號同年七月八日宣告大審院判決ニ
依レハ刑法第三百九十九條第一項所謂財物若クハ證書類ノ騙取
トハ人ヲ欺罔シテ錯誤ニ陥ラシメタル結果其財物若クハ證書類ノ占有
ヲ奪ヒ之ヲ移付セシムルコトヲ意味スルモノニシテ犯人自身カ其移付

騙取

不動産ノ
騙取

モチ受クルコトヲ要セサル(竊取ト強取トノ區別ハ他人カ物ヲ引渡スト否
トニアラスシテ他人(被欺罔者又ハ被恐喝者)カ保有ヲ移スコトヲ承諾シ
タルト否トニ存ス而シテ本罪ハ保有ヲ移シ終リタルトキヲ以テ既遂ト
ナリ犯人カ現實ニ其目的タル不法ノ利益ヲ收得スルト否トハ問フ所ニ
アラサルナリ

不動産ノ騙取ニ付テハ別ニ問題ヲ生セスト雖トモ不動産又ハ證書類ノ騙
取ニ付テ説明スレハ

(一)不動産ノ騙取トハ事實上不動産ノ保有ヲ得タルトキハ勿論動産ノ引
渡ト法律上同一ノ效力アル(民法第七十七條參照)不動産ニ關スル所有權得
喪ノ登記ヲ終リタルトキハ亦騙取ヲ遂ケタリト謂フヘキナリ

明治三十一年第七三九號同年十月二十一日宣告大審院判決ニ依レハ地所賣買證書ヲ
偽造シテ登記ヲ受クルモ所有權移轉ノ效力ヲ生スルモノニアラス從テ地所騙取罪ヲ
構成セスト解シ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財物ニ
關スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ 八五五

贈書類ノ
騙取

明治三十二年第四二六號同年六月一日宣告大審院判決ニ依レハ騙取ハ竊盜ト異ニシテ犯人ノ目的物ヲ擄取遷移スルヲ特質トセス從テ不動産ノ騙取ニ付テハ所有權移轉ノ方法ヲ完了スルヲ以テ犯罪ヲ構成スト解シ

明治三十五年(九)一一六號同年四月二十一日宣告大審院判決ニ依レハ賣買ノ名義ヲ以テ不動産ヲ騙取スル場合ニ於テハ其賣買契約ニ登記ヲ以テ所有權ヲ移轉スルノ特約アルトキハ騙取罪ハ其登記ヲ以テ成立スト解シ

明治三十五年(九)一二三號同年九月二十六日宣告大審院判決ニ依レハ賣買ハ承諾ノ意思表示ニ依テ直チニ成立シ同時ニ所有權移轉ノ效果ヲ生ス從テ荷クモ詐欺ノ手段ヲ以テ不動産賣買ノ承諾ヲ爲サシメタル以上ハ其登記又ハ引渡ヲ完了スルト否トニ拘ハラズ詐欺取財ノ既遂罪ヲ構成スト解シ

明治三十五年(九)一二六一號同年九月二十九日宣告大審院判決ニ依レハ人ナ欺罔シテ偽造ノ地所賣渡證書ニ署名捺印セシメタルトキハ其署名捺印ト同時ニ所有權ノ移轉ヲ承諾セシメタルモノナルヲ以テ地所騙取罪ヲ構成スト解シ本文卑見ト異ナル

(三)贈書類ノ騙取トハ既ニ作製セラレタル證書ハ勿論新クニ他人ヲシテ證書ヲ作製セシメテ自己ニ交付セシムル場合ヲモ包含スルモノトス后ノ場合ニ於テハ被欺罔者ニ於テ證書ノ性質ヲ知テ之ヲ作製スルト又ハ

請願書ナリト誤信シテ借用證書ニ署名捺印スル場合トヲ包含ス(他人ヲ欺罔シテ公正證書ノ作製ヲ囑托セシメ此カ正本ノ交付ヲ受ケタル場合ヲモ包含ス)

第五要件 恐喝又ハ欺罔ハ財物又ハ證書類騙取ノ手段タルコトヲ必要トス

換言スレハ兩者ノ間ニ因果ノ關係ナカルハカラス(不作爲ニ依ル因果類似ノ關係アル場合ヲモ包含ス)而シテ苟クモ此關係ノ存在スル以上ハ被欺罔者自身カ財産上ノ被害者タルト兩者其人ヲ異ニスルトハ問フ所ニアラス要之被欺罔者ト財産上ノ被害者トハ必スシモ一致スルコトヲ要セス但シ此場合ニ於テハ被欺罔者ハ被害者ノ財産ヲ處分シ得ヘキ事實上又ハ法律上ノ關係ニ於テ在ルヲ必要トスヘキノミ(騙取ノ判例學說文ト同一ノ説ヲ採リビンゲン氏ハ被欺罔者カ事實上并ニ法律上被欺害者ノ財産ヲ處分スルノ能力アルコトヲ必要トストノ説ヲ採レリ)從テ訴訟ノ手續ニ依リ裁判官ヲ欺罔シテ詐欺取財ヲ行フコトヲ得ヘキナ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八五七
 產ニ對スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ 關スル罪

訴訟ノ手
續ニ依ル
詐欺取財

被欺罔者
ノ財産上
ノ被害者
ナルコト
ヲ要セス

リ(コハ反ル氏メレケル)但シ此場合ニ於テモ實際裁判官ヲ欺罔スルコト
ヲ要ス而シテ普通ニ裁判官ハ單純ナル事實ノ主張ニ依テ裁判スルモノ
ニアラス訴訟當事者ノ提出スル證據方法ニ依リ心證ニ基キ事實ノ認定
ヲ爲スヘキモノナルカ故ニ單ニ不實ノ事實ヲ主張スルニ止マリ其證據
方法ニ於テ詐欺ノ事實ナキトキハ單ニ處罰スヘカラサル準備ヲ爲シタ
ルニ止マリ未タ詐欺取得ノ着手ヲ以テ論スルコトヲ得ス立證方法ヲ申
立タルニ止マル場合亦然リ(ビエンザンガ氏マイエルロントセリ)例之
ハ偽造證書又ハ騙取シタル證書又ハ已ニ効力ヲ失ヒタル證書又ハ別途
ノ關係ニ屬スル證書ヲ提出スルカ或ハ偽證等ニ依テ裁判官ヲ欺罔スル
コトニ着手スルニアラサレハ本罪ノ着手ヲ以テ論スルコトヲ得サルナ
リ但シ當事者ノ立證ナキ詐欺ノ主張ニ基キ實際裁判官カ錯誤ニ陥リタ
ルトキハ裁判官ノ錯誤ハ法律上ノ義務ニ違反シテ招キタル錯誤タルト
否トヲ問ハス當事者ノ詐欺ノ手段ト財産上ノ侵害トノ間ニ於ケル因果

ノ關係ヲ中斷セス(關逸判例リスト氏オハ立證ナキ不實ノ陳述ニ依テ裁
判官カ欺罔セラレタル結果ニシテ不實ノ陳述カ原因ヲ爲シタルニアラサ
シト云フ義務違反ノ結果ニシテ不實ノ陳述カ原因ヲ爲シタルニアラサ
ト論シテ提出セラレタル立證ニ依テ心證ヲ爲シタルニ依テ不實ノ陳述
論セルモ申見ニ依レハ裁判官ノ義務違反ノ程度カ普通ニ想像シ得ラ
ルトキハ中斷ノ効アリトキハ中斷ノ効トク普通ニ想像シ得ラズト
詐欺ノ手段ニ依リ被欺罔者ヲシテ財産上ノ處分ヲ爲サシムルコトヲ要
スルカ故ニ罪人ノ爲メニ代リテ自由刑ヲ受ケ之カ報酬ヲ得ルモ詐欺取
財ヲ構成セス又他人ヲ欺罔シテ外出セシメタル後其留守宅ニ於テ財物
ヲ竊取スレハ竊盜ニシテ詐欺取財ニアラス
次ニ裁判官カ心證ニ依テ裁判スル義務アル場合ト心證ニ關係ナク單ニ
當事者ノ陳述ノミニ基キ裁判スル義務アル場合例ハ民事訴訟法第二
百四十六條以下ニ規定スル欠席判決ノ如ク出頭シタル當事者一方ノ申
立ノミニ基キ裁判スル場合トノ區別ニ付テハ現行民事訴訟法ノ規定ニ

日本刑論(各論) 本論 第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八五九
關スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ

支拂命令
ノ申請

訴訟當事
者ヲ欺罔
スル場合

依テ制定セサルヘカラス而シテ心證ニ關係ナク裁判スル義務アル場合ニ於テハ錯誤ト云フコトナク從テ詐欺取財ハ成立セス此ト同一理由ニ依リ民事訴訟法第三百八十四條ニ依ル支拂命令ノ申請ハ裁判官ニ於テ此カ申請ノ原因タル事實ニ付キ心證ノ有無ニ關セス此ヲ發スヘキモノナルカ故ニ此ノ場合ニ於テハ詐財取財ヲ構成セス

訴訟ノ當事者ヲ欺罔スルコトニ依テモ詐欺取財ヲ行フコトヲ得ヘシ即チ當事者ヲ欺罔シテ自己ノ損害ヲ生スヘキ財産上ノ處分ヲ爲サシメタル場合ヲ云フ例ヘハ自白又ハ認諾セシムルカ如シ（フランク氏ハ本文ト同一ノ説ヲ採リリス）

ト氏ハ當事者ヲシテ立証方法ヲ誤ラシムル場合ニ於テモ詐欺罪ヲ認ムルモ此場合ニ於テハ當事者タル被欺罔者ハ財産上ノ處分ヲ爲シタルニアラス寧ロ間接ニ裁判官ヲ欺

執達吏ヲ欺罔シテ同一判決ノ強制執行ヲ再ヒ行ハシメタル時ハ詐欺取財ヲ構成スヘシ

次ニ欺罔ト騙取トノ間ニ因果ノ關係アルコトヲ要スルカ故ニ例ヘハ欺

欺罔未遂
タル場合

罔ノ結果財物ノ贈與ヲ受ケタルトキハ詐欺取財ヲ以テ論スヘキモ反之假令欺罔ノ手段ヲ用ユルモ贈與者ニ於テ單ニ請求拒絶ノ煩累ヲ避クル爲メ或ハ乞食ニ對スル單純ナル慈善心ヨリ爲シタル贈與ヲ受クルモ詐欺取財ノ既遂ニアラス（以上ノ場合ニ於テハ詐欺取財ノ未遂ヲ以テ論スヘキナリ）

明治三十五年（レ）第一四四〇號同年十月十六日宣告大審院判決ニ依レハ金圓ヲ騙取セシト圖リ取殘シノ證書ニ基キ訴訟ヲ提起シタルニ被害者ハ其二重ノ請求ナルヲ知リナカラ訴訟ヲ爲スノ不利ナルヲ知り裁判所ニ出入スルヲ厭ヒ示談ノ結果任意ニ金圓ヲ拂渡シタル事實ハ欺罔若クハ恐喝ニ因リ錯誤ニ陥リ又ハ強制セラレタル結果ニ非ス從テ詐欺取財罪ヲ構成セス而シテ其訴訟ノ提起ハ詐欺取財ノ實行ニ着手シタルモノナルモ之ヲ遂クサリシハ被告ノ意外ノ障礙若クハ升銷ニ因ルニ非サルヲ以テ其未遂罪ヲモ構成スルコトナシト解セルモ同判旨ニ於テ單ニ訴訟ノ提起ノミヲ以テ詐欺取財ノ實行ニ着手シタルモノト認メタルハ誤見ナリ假リニ同罪ノ實行ニ着手シタル行爲アリタリトスルトキハ犯人ハ示談ノ調フ迄ハ訴訟ヲ取下クルノ意思ナキモノト認ムヘキカ故ニ任意ニ實行ヲ中止シタリト云フコトヲ得ス從テ未遂ヲ以テ罰スヘキ

日本刑法論（各論）
水論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章
第五節 詐取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ付
關スル罪

被害者

又商人ノ慣用手段トシテ貨物ヲ過稱スル場合ニ於テ購買者カ例ノ慣用手段タルコトヲ知リナカラ自己ノ判定ニ基キ之ヲ買取リタルトキハ假令商人ニ於テ過分ノ代金ヲ受取タルモ詐欺取財ニアラス借主カ特定ノ目的ノ爲メニ費消スヘキコトヲ詐テ金員ヲ借用スルモ貸主ニ於テ其特定ノ目的ニ重キヲ置クコトハ稀有ノ場合ニ屬スルヲ以テ此場合ハ普通ニ欺罔アリト云フコトヲ得サルナリ

終リニ本罪ノ被害者ハ財産上ノ被害者ニシテ被欺罔者ヲ包含セス(本法第九十八條)

以上欺罔ニ關スル説明ハ總テ恐喝ニ依ル詐欺取財ニ準用スヘキナリ
本罪ノ犯意ニ付テハ條件付犯意ヲ認ム

第一項 普通ノ詐欺取財ノ罪

第三百九十條ニ曰ク人ヲ欺罔シ又ハ恐喝シテ財物若クハ證書類ヲ騙取シ

第三百九十條

文書偽造
行使詐欺
取財罪

タル者ハ詐欺取財ノ罪ト爲シ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ官私ノ文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル者ハ偽造ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

本條第一項ハ普通ノ詐欺取財ヲ規定シタルモノニシテ第一款ノ説明ヲ參照スレハ意義明了ナルヲ以テ更ニ贅セス

第二項ハ第一項ノ罪ヲ犯スノ手段トシテ官文書又ハ私文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シタル場合ヲ規定スルモノニシテ法文ニ「因テ」トアルハ欺罔又ハ恐喝ノ實行ヲ爲ノ手段トシタル場合ヲ意味スト解スヘキヲ以テ既ニ第一項ノ罪ヲ犯シタル後ニ於テ官私ノ文書ヲ偽造變換シタルカ又ハ單ニ豫備ノ手段タルニ止マルトキハ本項適用ノ限リニアラス(明治三十四年(九)第一一五號同年十一月九日)
九十二日宣告大審院判決ニ依レハ因テ官私ノ文書云々ノ法則(刑法第三百九十二條第二項)ハ詐欺取財罪ヲ犯スニ因テ官私ノ文書ヲ偽造行使シタル場合ニ適用スル場合ニ適用スヘキモ詐欺取財罪ヲ犯シタル後偽造ノ文書(而シテ本

日本刑法論(各論)

本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財
關スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ

本罪ノ未遂
手本罪ノ未遂
本罪ノ既遂

準詐欺取財
第三百九十一條

項ハ第二編第四章第三節官ノ文書ヲ偽造スル罪ト本條第一項ノ罪トノ數罪俱發ノ場合ヲ結合シテ一個ノ獨立犯罪(結合犯)トシテ規定シタルモノニシテ既ニ詐欺ノ手段タル文書ノ偽造變造ニ着手スレハ本罪ニ着手シタリト云フヘク其一方カ未遂ナルトキハ本罪ノ未遂トシテ論スヘク訴訟時効ノ期間ハ本罪ノ既遂ノトキ即チ詐欺取財終了ノ時ヨリ起算スヘク(文書偽造罪ニ關スル大審院判決ニ對スル疑義第十五參照本罪ノ法定刑(本刑)ハ偽造變造ノ各本條ト本條第一項ノ刑ト對照シ重キ刑ニ依テ定マル)

第二項 準詐欺取財

第三百九十一條ニ曰ク幼者ノ智慮淺薄又ハ人ノ精神錯亂シタルニ乘シテ其財物若クハ證書類ヲ授與セシメタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス。詐欺取財ノ手段トシテ人ヲ欺罔又ハ恐喝スルコトヲ要スト雖トモ本罪ハ此手段ニ依ラス幼者ノ智慮淺薄又ハ人ノ精神錯亂シタルヲ利用シテ其財物若クハ證書類ヲ授與セシムル場合ヲ以テ詐欺取財ニ準シ之ト同一ニ處

幼者

精神錯亂者

智慮淺薄

罰スヘキコトヲ規定スルモノニシテ(一)法文ニ所謂幼者トハ民法上ノ未成年者即チ二十歳未満ノ幼者ヲ指スモノト解スヘキナリ何トナレハ既ニ民法ニ於テ滿二十歳以上ノ者ニ對シテ完全ナル行為能力ヲ認メ滿二十歳以上ノ者ノ爲シタル意思表示ノ取消權ヲ認メサルカ故ニ(民法第三條參照)刑法ニ於テモ滿二十歳以上ノ者ハ行為能力ニ必要ナル普通ノ智慮アル者ト認ムルヲ至當トスヘキナリ次ニ二十歳未満ノ幼者ニシテ民法上ノ行為能力ヲ認メラレタル場合ト雖トモ(民法第五條參照)猶本條ニ所謂幼者ト云フコトヲ得ヘク(獨逸刑法第三百一條ノ解釋ニ付テフランク氏ハ本文ト同一ノ二十歳未満ノ幼者ニシテ智慮淺薄ノ者(行為ニ伴フ結果ニ付テ頓着スルコトナク又ハ職業ニ關シテ無識ナルコトヲ意味ス)ナリヤ否ヤハ事實ニ依リテ決スヘキナリ)(二)精神錯亂者ニ付テハ年齢ノ如何ハ問フ所ニアラス若シ同時ニ幼者又ハ精神錯亂者ノ法定代理人ノ同意ヲ得タルトキハ本罪ヲ構成セサルヤ勿論ナリトス(民法第四條參照)然レトモ法定代理人ノ追認ハ本罪ノ成立

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八六五
關スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ

其財物

ニ影響ナシ(三)法文ニ所謂「乘シ」トハ利用シテト云フノ義ニシテ犯人ニ於テ此狀況ヲ利用スルノ意思アルコトヲ要ス(財物又ハ證書類ノ授與ハ授與者ノ發意ニ基クト將タ受領者ノ發意ニ基クトハ問フ所ニアラスト雖トモ幼者ノ智慮淺薄又ハ人ノ精神錯亂シタル狀況ヲ利用シテ財物又ハ證書類ヲ授與セシムルニハ何等カノ行為アルコトヲ要ス例ヘハ巧言令色ヲ用ヒ又ハ響應ノ手段ニ依ルカ如シ故ニ幼者カ物ヲ授與スルニ常リ單ニ之ヲ受領スルノミニテハ本罪ヲ構成セス(四)其財物又ハ證書類トハ幼者又ハ精神錯亂者ニ於テ事實上處分シ得ヘキ關係ヲ有スルモノト云フノ義ニシテ必スシモ財物又ハ證書類カ幼者又ハ精神錯亂者ノ所有ニ屬スルコトヲ必要トセス(五)犯人又ハ第三者ニ授與セシメタルコトヲ要ス爰ニ注意スヘキハ小兒又ハ精神喪失者ニシテ全然授與ノ意思能力ナキモノヨリ財物又ハ證書類ヲ受領スルモ本罪ヲ構成セス此ノ場合ニ於テハ竊盜罪ヲ構成スヘシ(六)

ト氏ノ既ニ依レハ精神病者小兒ハ物ノ保有ヲ得又ハ拋棄スルコトヲ得ハキモ物ノ保有ヲ他人ニ讓渡スルコトヲ得サルカ故ニ此等ノ者ヨリ物ヲ受

被害者

領スレハ竊盜ヲ以テ論スヘキナリト説キビンゲン氏オールハツ(七)以上ノ條件ノ外ニ財産上ノ利益ヲ得ルコトヲ目的トスルコト及ヒ財物又ハ證書類ノ授與ニ依テ他人ニ財産上ノ損害ヲ與フルコトヲ要スルコトハ總テ純粹ナル詐欺取財ニ付テ説明シタルト異ナルコトナシ故ニ爰ニ省略ス

本罪ノ被害者ハ財産上ノ損害ヲ受ケタル者ナリ(必スシモ幼者又ハ精神錯亂者タルコトヲ要セス)

明治三十六年(元第一〇六六號同年六月五日宣告大審院判決ニ依レハ愚昧ノ者ヲ欺罔シ財物ヲ騙取シタル場合ト雖モ其被害者ニシテ幼年者若クハ精神錯亂者ニ非サルトキハ刑法第三百九十一條ハ之ヲ適用スヘキモノニ非スト解セルモ刑法第三百九十一條ハ幼者又ハ精神錯亂者ニ對シテ欺罔手段ヲ用ヒサル場合ニ限り適用スヘキ規定ナルコトヲ注意スヘシ

第三百九十二條ニ曰ク「物件ヲ販賣シ又ハ交換スルニ當リ其物質ヲ變シ若クハ分量ヲ偽テ人ニ交付シタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス」

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八六七
 產ニ對スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ 關スル罪

詐欺取財ノ構成要件トシテハ詐欺ノ手段ニ依テ財物ヲ騙取スルコトヲ要ス從テ詐欺ノ手段ニ依ラス財物ヲ受取リタル後ニ於テ假令詐欺ノ手段ニ依リ他人ノ財産ヲ侵害スルモ普通ノ詐欺取財ヲ以テ論スルコトヲ得ス而シテ本條ハ財物ノ賣買又ハ交換ノ合意ヲ爲スニ付テハ詐欺ノ手段ナク此合意後ニ於テ詐欺ノ手段ニ依リ相手方ノ請求權ヲ侵害スルコトヲ處罰スルモノニシテ相手方ヨリ既ニ反對給付ヲ受ケタルト否トハ問フ所ニアラサルナリ(一)物質トハ契約ノ目的物ノ實質(例ヘハ金銀銅鐵又ハ米麥ト云フカ如シ)及ヒ品等即チ物ノ精粗善惡ヲモ包含スルモノトス而シテ法文ニ「物質ヲ變シ又ハ分量ヲ偽テ」トアルハ何レモ交付ノトキニ於テ欺罔ノ手段アルコトヲ意味スルナリ(二)本罪モ亦他人ノ財産ヲ侵害スル行爲ナルカ故ニ物質ヲ變シ又ハ分量ヲ詐ルコトニ依テ他人ノ財産上ノ請求權ニ損害ヲ加フルノ事實アルコトヲ要ス從テ更ニ善良ノ物質又ハ多クノ分量ヲ與ヘタルトキハ本罪ヲ構成セス(三)若シ分量ヲ偽ハラシカ爲メ不正ノ度量衡ヲ使

用シタルトキハ刑法第二百二十九條第二項ニ依テ處斷シ本條適用ノ限リニアラス

被害者

冒認罪

第三百九十三條

第三項 冒認罪

本罪ノ被害者ハ財産上ノ請求權ヲ害セラレタル人ヲ云フ

第三百九十三條ニ曰ク他人ノ動産不動産ヲ冒認シテ販賣交換シ又ハ抵當典物ト爲シタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

自己ノ不産産ト雖モ既ニ抵當典物ト爲シタルヲ欺隱シテ他人ニ賣與シ又ハ重ネテ抵當典物ト爲シタル者亦同シ

第一項

第一項ノ罪ノ構成要件ヲ舉クレハ左ノ如シ

第一 罪ノ目的物ハ他人ノ動産不動産タルコト

本罪ノ目的物ハ民法上他人ノ所有ニ屬スル動産不動産タルコトヲ要ス

明治三十七年(己)一七九九號同年十月四日宣告大審院判決ニ依レハ刑法第三百九十三條第一項ノ罪ハ事實上他人ノ所有ニ屬スル動産不動産ヲ自己ノ所有物ナリトシテ賣

日本刑法論(各論) 本論 第三編 具體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八六九
 第三節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ關スル罪

買交換シ又ハ抵當典物ト爲スニ依リ成立スルモノナレハ他人ニ讓渡シタル不動産ヲ未タ其登記ヲ爲サ、ルヲ奇貨トシ我所有物ナリト詐稱シテ他へ抵當ニ差入レタルトキハ同條ノ犯罪ヲ構成スルモノト解セルハ正當ナリ

第二 冒認シテ販賣交換シ又ハ抵當典物ト爲シタルコト

(一) 冒認トハ他人ノ所有物タルコトヲ知テ之ヲ自己ニ屬スルモノト主張スルコトヲ云フ

(二) 販賣(賣渡)ノ義(交換)シ又ハ抵當典物(質物)トスルトハ目的物ノ引渡(又ハ權利設定)ニ付テノ登記ヲ必要トセス(民法第百四十四條參照)此等ノ法律行為ヲ爲ス合意ヲ以テ既遂トナル蓋シ本罪ハ他人ノ所有ニ屬スル財物ヲ第三者ニ對シ賣渡シ、交換シ又ハ抵當質物トスルコトニ依テ其物ノ所有權ヲ侵害スル(危險)ナラシムル場合ヲモ包含ス(コトヲ處罰スルモノニシテ本罪ノ被害者ハ此等合意ノ目的タル物ノ所有者ニシテ合意ノ相手方ニアラス從テ相手方ヨリ物ヲ騙取スルコトヲ必要トセス(明治三十八

被害者

冒認ノ目
的トナリ
得ル物

○三號同三十二年二月六日宣告大審院判決ニ依レハ他人ノ所有ニ屬スル不動産ノ自己ノ所有名義タル奇貨トシ冒認シテ賣却シタル所爲ハ冒認販賣罪ヲ構成ス所有者ト親子ノ關係アル場合ト雖トモ其財產ヲ冒認シテ他人ニ賣却シタルトキハ冒認販賣罪ヲ構成スト雖トモ其財產ヲ冒認シテ後段ハ誤見ナリ)而シテ法文ニハ冒認シテ云々トアリ且ツ第二項ニ於テ「欺隱シテ」トアルニ依テ見レハ本罪合意ノ相手方ニ於テ契約ノ當時其物ノ所有權カ他人ニ屬スルコトヲ知ラサルコトヲ要ス

次ニ冒認ノ目的物カ犯人以外ノ者ノ保有内ニ存スルトキハ常ニ本條ノ適用アルヘキハ勿論若シ目的物カ既ニ犯人ノ保有内ニアルトキト雖モ原則トシテハ其保有ニ歸シタル原因ノ如何ヲ問ハス例ハ犯罪ニ依テ得タル物件ニ付テモ本罪ヲ構成スヘキモノトス但シ左ノ二個ノ場合ニ於テ例外アルコトヲ注意スヘキナリ

(一) 自己ノ物トスル意思ヲ以テ他人ノ物ノ保有ヲ自己ノ保有ニ移ス罪例ヘハ竊盜、強盜、詐欺取財ニ依テ犯人ノ保有ニ歸シタル物ニ付テハ本罪ヲ構成セス蓋シ此等犯罪ニ依テ得タル物件ヲ處分スルコトハ此等犯罪ニ

日本刑法論(各論) 本論第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八七一
產ニ對スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ 關スル罪

付キ法律カ豫期シタル當然ノ結果ト云フヘケレハナリ(盜賊品ヲ寄藏シタル後冒認販賣スレハ本罪ヲ構成ス)

(二)受寄ノ財物又ハ拾得物其他遺失物法ノ適用ヲ受クヘキモノニ付テハ本罪ヲ構成セス(本法第三百九十五條及遺失物法參照)

第三 本罪モ亦財産ヲ侵害スル他ノ罪ト同シク不法ニ販賣交換又ハ抵當質物ト爲スノ意思アルコトヲ要ス故ニ若シ此等ノ處分行爲ヲ爲ス權利アリト誤解シテ爲シタルトキハ本罪ヲ構成セス又假令不法ニ處分スルノ意思アルモ客觀的ニ此等ノ處分行爲ヲ爲スノ權利カ存在スルトキハ本罪ヲ構成セス(留置權先取特權抵當權質權ノ行使トシテ目的物ヲ競買シ又ハ轉賣スルカ如シ民法物權編第七章以下參照)

第三項

第二項ノ罪ノ構成要件ヲ舉クレハ左ノ如シ

第一 犯罪ノ目的物ハ自己所有ノ不動産ニシテ已ニ抵當又ハ質物トナリタルモノタルコト

第二 已ニ其物ノ上ニ抵當權又ハ質權カ設定セラレタルコトヲ欺隱(秘行)

(爲)アルコトヲ要ス單ニ事實ヲ告ケサルノミニテ足レリ明治三十五年四月九號同年十一月二十七日宣告大審院判決ニ依レハ刑法第三百九十三條第二項ノ重抵當罪ハ抵當ノ自己ノ不動産カ既ニ抵當トナリ居ル事實ヲ告知セシテ重抵當ト爲シテ他人ニ賣渡シ又ハ重抵當質物ト爲シタルコトヲ要ス即チ自己ノ不動産ノ上ニ設定セラレタル他人ノ質權抵當權ヲ侵害スル所爲ニシテ前後ノ抵當權質權共ニ登記ヲ經タルコトヲ必要トセス(民法第百七十六條參照)

第三 不法タルコトヲ知リタルコト

要之本條規定スル冒認罪ハ第一項ニ説明シタル純正ノ詐欺取財ニアラス又第二項ニ説明シタルカ如キ準詐欺取財ニモアラスシテ不法ニ他人ノ所有權又ハ抵當權質權ヲ侵シ之ヲ處分スル所ノ罪ニシテ第三百九十五條ニ規定スル受寄物費消費罪及ヒ遺失物法ニ於テ處罰スル罪ト其體様ヲ同ウスルモノト云フヘキナリ即チ横領罪ノ一種ト云フヘキナリ(横領罪トハ他人ノ所有物ニ對シテ自己ノ物トスル意思ヲ實行スル罪ヲ總稱

日本刑法論(各論) 水論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八七三
產ニ對スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ 關スル罪

第三百九十四條

以上第一項第二項ニ通スル規定ヲ舉クレハ左ノ如シ
第三百九十四條ニ曰ク前數條ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者ハ六日以上二年以下ノ監視ニ付ス

本罪ト第
三百九十
條第二項
トノ關係

明治三十五年(九)第二四一六號同三十六年二月二日宣告大審院判決ニ依レハ刑法第三百九十三條ニハ他人ノ動産不動産ヲ冒認シテ抵當典物ト爲シタル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ストアリテ冒認罪ハ單純ノ詐欺取財罪ト其處斷ヲ異ニスルノ理由アルコトナシ
從テ冒認ノ用ニ供スル爲メ文書ヲ偽造行使シタルトキハ詐欺取財ヲ爲スニ因リ文書ヲ偽造行使シタルモノトシテ刑法第三百九十條第二項ヲ適用スヘキモノトスト解セ
ルハ正當ナリ

終リニ現行刑法ニ於テハ詐欺取財及ヒ準詐欺取財ニ付キ第三百九十條乃至第三百九十二條ノ規定ヲ設クト雖モ立法論トシテハ汎ク不法ニ自己又ハ第三者ヲ利スル目的ヲ以テ欺罔ノ手段ニ依リ他人ノ財産ヲ侵害スル罪ヲ認メ又汎ク同一ノ目的ヲ以テ恐喝ノ手段ニ依リ他人ノ行爲ヲ強制スル

罪ヲ認ムルノ必要アリ

第二款 受寄ノ財物ニ關スル罪

受寄ノ財
物ニ關ス

第三百九十五條ニ曰ク受寄ノ財物借用物又ハ典物其他委託ヲ受ケタル金額物件ヲ費消シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス若シ騙取拐帶其他詐欺ノ所爲アル者ハ詐欺取財ヲ以テ論ス

本條前段ノ罪ノ構成要件ヲ舉クレハ左ノ如シ

第一 犯罪ノ目的物ハ受寄ノ財物借用物又ハ典物其他委託ヲ受ケタル金額物件タルコト

類物件タルコト

法文ニ所謂受寄ノ財物トハ民法上ノ寄託ニ基キ保管スル所ノ財物證書類ヲ含ムヲ云ヒ借用物又ハ典物(質物)ニ付テハ別ニ説明ヲ要セス而シテ

其他委託ヲ受ケタル物件トハ民法上ノ委任事務ヲ處理スル爲メ又ハ其事務ヲ處理スルニ當リ受取リタル物件ヲ總稱スルモノニシテ(明治三十四年(九)第十

八八號同年六月二十七日宣告大審院判決ニ依レハ刑法第三百九十五條ノ委託ヲ受ケタル金額物件トハ管ニ寄託ヲ受ケタルモノノミナラス

日本刑法論(各論) 本論 第三編 具體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八七五
産ニ對スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ關スル罪

第三百九十五條前段

委託ヲ受
ケタル物
件

委任者カ委任事務ノ處理ニ依リ之ヲ受取リ委任者ニ引ナリ法定ノ代理
 委任ヲモ包含ス(明治三十八年見入自己ノ號同九月三日宣告大審院判
 物ヲ抵當典物ト爲シタル所爲ハ委託物費消罪ヲ構成ス(明治三十九
 八條前段ノ規定ハ受託者ノ地位ニ在ル者カ其受託財產ヲ費消シタル場
 合ニモ適用セラレヘキモ効力ヲ生シタル時日當然社會財產ノ保管者ト
 ナリ受託者ト同一ノ義務ヲ負フモ正當ナリ(三)要之本罪ノ目的物
 ハ法律行為ニ基キ返還又ハ特定ノ目的方法ニ於テ使用スヘキ義務ヲ以
 テ自己ノ保有ニ移サレタル他人ノ所有物ヲ總稱ス但シ法律ハ其所有者
 ヨリ直接ニ移サレタルト否ト又其物件ハ動産タルト不動産タルトヲ區
 別セサルナリ然レトモ他人ノ所有物タルコトヲ要スルカ故ニ債權ハ本
 罪ノ目的物タルコトヲ得ス但シ債權ヲ證明シ又ハ設定スル所ノ證書類
 ハ金錢ト共ニ本罪ノ目的物タルコトヲ得ルナリ(刑法第三百九十
 本罪ノ目的物ハ他人ノ所有ニ屬スル物タルコトヲ要シ所有權ノ目的物

トナリ得ル物ナリヤ否ヤ及ヒ物カ他人ノ所有ニ屬スルヤ否ヤハ民法ニ
 依テ決スヘキ問題ナリトス而シテ消費貸借ニ依テ得タル物件ニ對シ又
 ハ契約ニ基キ自己ノ所有物ヲ特定ノ方法ニ於テ處分スヘキ債務ヲ負ヒ
 タルノミニテハ本罪ヲ構成セス例之ハ債務者ヨリ振出シタル手形ヲ受
 取人カ其債務ノ辨濟アリタル後ニ於テ更ニ他ニ裏書行使スルモ本罪ヲ
 構成セス(明治三十五年(九)第九七號同年二月二十一日宣告大審院判決ニ
 ハテ民法第三百九十五條ニ所謂受寄ノ財物ナルヲ以テ擅ニ之ヲ費消シタ
 ルトハ委託物費消罪ヲ構)又民法上取消シ得ラルヘキ法律行為ニ依リ(法
 第九十六)取得シタル物件ハ其取消アル迄ハ其物ノ所有權ハ收得者ニ存
 スルカ故ニ假令其收得後直ニ先方ニ錯誤アルコトヲ知覺シタル場合ニ
 於テモ他人ノ所有物ト云フコトヲ得ス例之ハ下女ニ給料ヲ支拂フ際五
 厘銅貨ナリト誤認シテ十圓金貨ヲ支拂ヒタルトキハ其支拂取消以前ニ
 於テ下女カ之ヲ費消スルモ本罪ヲ構成セス(遺失物法違反トナルヘシ)猶

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八七七
 關スル罪 第五節 詐取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ

ホ左ノ場合ニ付キ注意スルコトヲ要ス

(一)金銭ノ授受アリタル場合ニ於テ所有權カ移轉シタルヤ否ヤハ各場合ニ付キ屢々起ルヘキ疑問ニシテ例ヘハ第三者ニ對シ債務ヲ辨濟スル爲メ又ハ第三者ヨリ物件ヲ購求スル爲メ他人ニ金額ヲ交付シタル場合ニ於テ交付者カ其金額ノ所有權ヲ他人ニ移スノ意思アリヤ否ヤハ各場合ニ於テ決スヘキ事實問題ナリトス而シテ若シ交付者ニ於テ交付ノ金額其モノヲ以テ辨濟シ又ハ支拂ハシムルノ意思ヲ有シタルトキ又ハ受取人ノ財産關係其他ノ事情ニ依リ交付者ニ於テ別ノ金員ヲ以テ支拂ヲ爲スコトヲ想像セザリシ場合ニ於テハ所有權ヲ他人ニ移轉スルノ意思アリト云フコトヲ得ス例ヘハ主人カ下女ニ金員ヲ托シテ物品ヲ買取ニ遣ハスカ如シ又委任者カ單ニ其金額ヲ受任者ノ金額ト混和スルコトヲ許シタルノミニテハ未タ以テ直チニ所有權ヲ移轉スルノ意思アリト云フコトヲ得ス何トナレハ各別ノ所有者ニ屬スル動産カ共ニ混和スルトキ

ハ各所有者ハ其混和ノ當時ニ於ケル價格ノ割合ニ應シテ混和物ヲ共有スヘケレハナリ(民法第二百五條參照)而シテ苟クモ他人ノ所有ニ屬スル金額ヲ自己ノ爲メ費消スルトキハ本罪ヲ構成スヘシ

(二)代理人ハ委任者タル本人ノ爲メニスルコトヲ表示シテ他人ヨリ物ノ所有權ヲ讓受ケタルトキハ代理行為ノ結果トシテ其物ノ所有權ハ當然本人ニ移轉シ(民法第九十條參照)代理人ノ所有ニ屬セス從テ其物ニ對シ本罪ヲ構成シ得ヘシト雖モ反之若シ代理人カ本人ノ爲メニスルコトヲ示サスシテ他人ヨリ物ノ所有權ヲ讓受ケタルトキハ一旦其物ノ所有權ハ代理人ニ移ルヘキカ故ニ(民法第一百條參照)此物ニ對シテハ本罪ヲ構成セス其他委任販賣ニ基キ受任者カ受取リタル代價ニ付テモ同一ノ問題ヲ生スヘシ(民法第九十九條、第一百條、第六百四十六條參照)但シ委任者ト受任者トノ間ニ於テ受任者カ委任事務ノ範圍内ニ於テ第三者ヨリ受取リタル物件ハ直チニ委任者ノ所有ニ歸スヘキコトヲ約束明示又ハ暗黙ニシタルトキハ受任者ハ其物件ニ對

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財
關スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ 八七九

費用ノ目
的物ヲ知
テ知テ
受ケタル
場合

意思アリト云フコトヲ得ス又抵當權者カ其權利ノ行使方法トシテ適法ニ抵當物ヲ競賣シタルカ如キ亦費消ノ意思アリト云フコトヲ得ス次ニ讓渡ニ依テ費消セラル、目的物タルノ情ヲ知テ讓受ケタル者ハ贓物ノ收受者トシテ論スルコトヲ得ス何トナレハ讓渡人ハ犯罪ニ依テ其目的物ヲ得タルニアラサレハナリ但シ讓受人ハ費消罪ノ幫助者トシテ處罰スルコトヲ得ヘシ(贓物ニ關スル費用ノ說明參照)費消トハ其物ノ經濟上ノ利益ヲ喪失セシムルコトヲ云フ故ニ例ヘハ自己ノ目的ノ爲メニ他人ノ金額ヲ支出シ又ハ他人ノ預金ヲ引出ス爲メ他人ノ預金帳ヲ行使スルカ如キ何レモ所有者タル他人カ其物ノ上ニ有スル經濟上ノ利益ヲ喪失セシムルモノト謂フヘキナリ

(二)物ヲ毀損スル場合ニ於テハ其方法ニ於テ物カ毀損セラル、コトニ依テ其物ノ經濟上ノ價值カ認めラル、場合ニ限り(消費ノ一種)費消ト云フコトヲ得ヘシ例ヘハ彈丸ヲ發射スルカ如キ或ハ飲食物ヲ飲食スルカ如

シ
(三)質物トシタル場合ニ入質者ニ於テ質受ノ上返還スルノ意思ナクシテ入質シタルカ又ハ假令質受ノ意思アリトスルモ之ヲ實行シ得ヘキ狀況ニアルコトヲ確信セザリシトキニ於テハ費消ノ行爲アリト謂ヒ得ヘキナリ而シテ其狀況ニアルコトヲ確信シタルヤ否ヤヲ決スルハ全ク證據問題ニ屬ス

明治三十六年(第九一〇七八號同年七月十七日宣告大審院判決ニ依レハ委託物費消罪ハ委託ノ目的以外ニ於テ委託物件ヲ使用又ハ處分スルニ因テ成立ス從テ保管ノ目的ヲ以テ委託セラレタル他人ノ荷物ヲ質入シタル所爲ハ委託物費消罪ヲ構成スト解セルハ誤見ナリ

(四)第三者カ物ヲ竊取スルニ當リ之ヲ認諾シタルトキハ亦費消ト云フコトヲ得ヘシ

(五)單ニ物ヲ使用シタルノミニテハ費消ト云フコトヲ得ス
以上費消行爲ハ不法ノモノタルコトヲ要ス從テ例ヘハ所有者ノ承諾ア

不法タル
コト

日本刑法論(各論)

本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財
產ニ對スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ
關スル罪

リタル場合ニ於テハ假令費消者ニ不法ノ意思アルモ本罪ヲ構成セス其承諾ハ費消者ニ於テ認識スルコトヲ必要トセス
費消行為カ不法トナルニハ委託者ニ於テ受託者ニ對シ委託物件ノ返還ヲ請求シ得ヘキ關係ノ存スルコトヲ要ス(民法第七百八條參照)

明治三十六年(九)第三九三號同年四月十日宣告大審院判決ニ依レハ委託物費消罪ノ成立ニハ事實上委託ノ關係アルノミヲ以テ足レリトス從テ其委託ノ法律上正當ナルヤ否ヤハ之ヲ問フノ要ナシト解セルモ同列旨ハ委託者ニ於テ委託物ノ返還ヲ請求シ得サル場合ニ關スルモノニアラス

終リニ費消ニ未遂アリヤ否ヤノ問題ニ付キ現今一般ノ解釋トシテハ本罪ニ未遂ヲシト論スルモ尙クモ以上説明シタル處分行爲ニ着手シテ未タ其處分ヲ遂ケサルトキニ於テ費消ノ未遂ヲ以テ論スルニ毫末ノ疑ヲ存セス故ニ例ヘハ寄託物ヲ販賣セント申込ミタルトキハ販賣ト云フ費消行為ノ未遂ニシテ第三百九十七條ニ依リ受寄物費消罪ノ未遂トシテ罰スヘキナリ(販賣ノ合意成立シタルトキハ假令物ノ引渡ヲシト雖モ費

費消ノ未遂

不法ノ認識

消ノ既遂ト謂フヘキナリ)

第三 費消行為ノ不法タルコトヲ知リタルコトヲ要ス

故ニ例ヘハ他人ヨリ委託セラレタル他人ノ金額ヲ費消スルニ當リ費消者ニ於テ現ニ賠償金額ヲ準備シ且ツ寄託者トノ現時ノ關係ニ於テ一時之ヲ融通スルモ別ニ受託者ニ於テ異議ナカルヘシト思考シタルトキハ假令其行為ハ客觀的ニ違法ナルモ主觀的ニ不法ノ要件ヲ缺クカ故ニ本罪ヲ構成セス

明治三十七年(九)第一五六二號同年八月二十二日宣告大審院判決ニ依レハ委託金費消罪ハ金額ノ委託ヲ受ケタル者其委託ノ本旨ニ違ヒ擅ニ之ヲ消費スルニ因リテ成立スルモノニシテ他日之ヲ賠償スル意思ノ有無ニ因リ犯罪ノ成立ヲ異ニスルモノニアラスト解セリ

本條後段ノ罪ノ構成要件ヲ擧クレハ左ノ如シ

第一 本罪ノ目的物ハ受寄ノ財物、借用物、典物、其他委託ヲ受ケタル金額物件タルコト

第三百九十五條後段

日本刑法論(各論)

本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 第八五

第五節 贈取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ關スル罪

騙取

第二 騙取、拐帶、其他詐欺ノ所爲アルコト
 第三 不法タルノ情ヲ知リタルコト
 以上第一第三要件ニ付テハ本條前段ノ罪ト異ナルナキヲ以テ之カ説明ヲ省略シ單ニ第二ノ要件ニ付テ説明スヘシ
 法文ニ所謂騙取拐帶其他詐欺ノ所爲トハ本條前段ニ所謂費消ト共ニ他人ノ物ヲ自己ノ物トスル意思實行ノ一種ニシテ費消ト異ナル所ハ彼ハ物ニ對スル財産上ノ利益ヲ喪失セシムルモ處分(此ハ財産上ノ利益ヲ自己ニ收得スル爲メニ騙取拐帶其他詐欺ノ所爲アリタルコトヲ要ス而シテ騙取トハ詐欺取財ノ場合ニ於テハ他人ノ保有ヨリ自己ノ保有ニ移スコトヲ意味スルモ本罪ノ目的物ハ既ニ自己ノ保有内ニ存在スルカ故ニ爰ニ所謂騙取トハ人ヲ欺罔シテ錯誤ニ陥レ依テ受寄物其他本罪ノ目的物ヲ自己ノ物トスルコト(横領)ヲ意味ス例ヘハ受寄物ヲ横領スル意思ヲ以テ之ヲ抑留スル爲メニ寄託者ニ對シテ該物件ハ既ニ水火盜難ニ遭フテ消失シタリ

拐帶

又ハ死亡シタリト欺罔シ又ハ裁判官ニ對シ營テ原告ヨリ寄託ヲ受ケタルコトナシト主張シ仍テ以テ之カ抑留ヲ遂ケタルカ如シ(抑留ハ横領ノ一種ナリ)
 拐帶トハ寄託物其他ノ金額物件ヲ携帶ノ儘逃走スルコトニ依テ横領ヲ遂クルヲ云フ

明治三十七年(レ)第一〇六九號同年六月六日宣告大審院判決ニ依レハ受託者カ委託物ヲ横領スルノ目的ヲ以テ委託物ヲ委託ノ趣旨ニ從ヒ保管又ハ持參スヘキ場所以外ニ持去ルニ於テハ刑法第三百九十五條後段ニ所謂携帶ノ所爲アリト云フヘク受託者カ其現住所ヲ去リテ身ヲ隠シタルヤ否ヤハ問フコトヲ要セスト解セリ

其他詐欺ノ所爲

其他詐欺ノ所爲トハ横領ノ手段ニシテ汎ク詐欺ノ行爲アリタル場合ヲ包含ス例ヘハ委託ヲ受ケタル金額ヲ横領スル爲メニ金錢出納簿ニ詐欺ノ記載ヲ爲シ又ハ受寄物ヲ匿藏シテ横領スルカ如シ

明治三十五年(レ)第二五〇六號同三十六年二月十六日宣告大審院判決ニ依レハ委託物ヲ費消スルノ意思ヲ以テ之ヲ隱匿シタルノミノ事實ハ委託物費消ノ未遂罪ナリト解

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八八七
 產ニ對スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ關スル罪

以上ノ所爲ハ何レモ横領ノ手段タルコトヲ要ス即チ横領ト因果ノ關係アルコトヲ要スルカ故ニ一旦費消シタル後ニ於テ詐欺ノ所爲アルモ本條後段ヲ適用スルコトヲ得ス(明治三十六年(モ)第一號同年三月十日宣告大審院判決ニ依レハ刑法第三百九十五條後段ニ所謂詐欺ノ所爲トアル中ニハ其所爲ノ委託物ヲ横領スルノ前ニアルトニ論ナクテ尙クモ犯人ヲシテ其企圖シタル横領ノ目的ヲ達スルコトヲ得ルモ前段ニ於テ詐欺トナルヘキモハ總テ之ヲ包含スルモノト論セルハ誤見ナリ)之ニ反シ一旦此等ノ手段ニ依リ横領ヲ遂ケタル以上ハ本條後段ノ罪ヲ構成シ縱令後ニ於テ之ヲ費消スルモ本條前段ヲ適用スルコトヲ得サルナリ

被害者

本條前段及ヒ後段ノ罪ノ被害者ハ目的物ノ所有者ナリ

明治三十四年(レ)第六九三號同年六月十四日宣告大審院判決ニ依レハ委託物費消罪ハ同居ノ親屬間ニ於テハ之ヲ論セス(刑法第三百九十八條)雖トモ其委託物カ他人ノ物ナルトキハ假令其物カ親屬間ノ委託ニ係ルトキト雖トモ之ヲ費消シタルトキハ委託物費消罪ヲ構成スト解セルハ正當ナリ

第三百九十六條

第三百九十六條ニ曰ク自己ノ所有ニ係ルト雖モ官署ヨリ差押ヘタル物件ヲ藏匿脱漏シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス但家資分散ノ際此罪ヲ犯シタル者ハ第三百八十八條ノ例ニ照シテ處斷ス

- 本罪ノ構成要件ヲ擧ケレハ左ノ如シ
- 第一 本罪ノ目的物ハ自己ノ所有ニ屬スル動産、不動産タルコト
- 第二 官署ヨリ債權者ノ爲メ差押ヘラレタル物件ニシテ自己ニ保管ヲ託セラレタル物タルコト

法文ニハ單ニ官署ヨリ差押ヘタル物件トノミアリテ其債權者ノ爲メニスルト又證據保全ノ爲メニスルトヲ區別セス又其差押物ハ自己ニ保管ヲ託セラレタルモノタルト否トヲ區別セサルカ如キモ本條ハ前條ト共ニ受寄物ニ對スル財産侵害ノ行爲ヲ規定スルモノト認ムルヲ至當トスヘキヲ以テ本罪ノ目的物ハ債權保全ノ爲メニ差押ヘラレ(本條但)且ツ自己ノ保管ニ託セラレタルモノト解スヘキナリ而シテ若シ他人カ保管ス

官署ヨリ差押ヘタル物件

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八八九
 產ニ對スル罪 第五節 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄ノ財物ニ 關スル罪

ルモノニ付テハ刑法第三百七十一條ノ適用アルヘキナリ
明治三十五年(レ)第一二七二號同年九月十九日大審院判決ニ依レハ證據保全ノ爲メノ
差押ヲ包含スト解セリ

明治三十七年(レ)第一五四號同年八月二十九日宣告大審院判決ニ依レハ甲乙兩者ノ共
有ニ屬スル膠ヲ收稅官吏ニ於テ差押ヘテ爲シ乙者チシテ保管セシメシニ甲乙共謀シ
テ之ヲ窃取シタルトキハ甲ハ刑法第三百七十一條乙ハ第三百九十六條ヲ適用スヘキ
モノト解セルモ誤見ナリ何トナレハ本問ノ場合ニ於テ乙ニ對シテ第三百九十六條ノ
罪ヲ構成ストスルモ保管者タル乙ノ承諾ヲ得テ物ノ保有ヲ移シタル甲ノ所爲ハ窃取
ノ條件ヲ缺クカ故ニ此ノ場合ニ於テハ乙ノ罪ニ對スル從犯ヲ以テ論スヘキナリ

被害者

本罪ノ被害者ハ犯人ニ對スル債權者ナリ

第三 藏匿脱漏ノ所爲アルコト

藏匿脱漏ノ意義ニ付テハ第三百八十八條ノ説明ヲ參照スヘシ但家資分
散ノ際此罪ヲ犯シタルトキハ第三百八十八條ノ例ニ照シテ處斷ス

以上本節ニ共通ノ規定ヲ擧クレハ左ノ如シ

第三百九十七條

第三百九十七條ニ曰ク此節ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケザル

第三百九十八條

者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス
第三百九十八條ニ曰ク此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條
ニ掲ケタル親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

人的刑罰
排除原因

本條ハ本節ニ規定シタル罪ノ犯人カ被害者ト親屬ナルトキハ其刑ヲ全免
スルコトヲ規定スルモノニシテ此特別身分ナキモノハ固ヨリ刑ノ全免ヲ
得サルモノトス而シテ本節規定スル罪ノ被害者ノ何人ナルヤハ各罪ノ説
明ヲ參照スヘシ

贓物ニ關
スル罪

第六節 贓物ニ關スル罪

本節ニ規定スル贓物ニ關スル罪トハ犯罪ニ依テ收得セラレタル(物ノ保有
ヲ得又ハ繼續セラレタル)物件タルノ情ヲ知リテ之ヲ收受、寄藏、故買又ハ牙
保スルノ謂ナリ即チ前ニ犯罪ニ依テ收得セラレタル不法ナル財産ノ狀況
ヲ更ニ安固ナラシメ以テ前ノ犯罪ニ於ケル被害者ヲシテ被害物件ニ關ス
ル返還請求權ノ行使ヲ更ニ困難ナラシムルニ在リ而シテ本罪ニ關スル規

本罪ノ本
質

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八九一
産ニ對スル罪 第六節 贓物ニ關スル罪

本罪ノ構成要件

定ハ左ノ如シ

第三百九十九條ニ曰ク「強竊盜ノ贓物ナルコトヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタル者ハ一月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス」

第四百條ニ曰ク「前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス」

第四百一條ニ曰ク「詐欺取財其他ノ犯罪ニ關シタル物件ナルコトヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタル者ハ十一日以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス」

即チ本罪ノ構成要件ヲ擧クレハ左ノ如シ

第一 犯罪ニ依テ得ラレタル物件タルコト

第三百九十九條ニハ「強竊盜ノ贓物ナルコトヲ知テ」ト規定シ第四百一條ニハ「詐欺取財其他ノ犯罪ニ關シタル物件ナルコトヲ知テ云々」ト規定シ第四百一條ノ罪ノ目的物ハ犯罪ニ關係アル總テノ物件ヲ包含シ從テ犯

犯罪ニ關シタル物件

贓物ノ意

罪ノ用ニ供シタルモノ其他犯罪ノ證據トナルヘキモノヲモ包含スト解スヘキカ如キモ本罪ハ他人ノ犯罪ヲ庇護スル性質ノ罪ニアラス(俗ニ事後ノ從犯トモ稱ス)本罪ハ他人ノ財産ヲ侵害スル罪ノ一種ニシテ且ツ罪人ヲ藏匿シ罪證ヲ隱蔽スル罪(犯罪庇護罪)ニ付テハ刑法第一百五十一條以下ニ於テ別ニ之カ規定ヲ設ケタルトニ依テ見レハ本罪ノ目的物ハ總テ贓物即チ犯罪ニ依テ得タル物件ニ限ルモノト解スヘキナリ從テ左ノ諸點ニ付キ注意スルコトヲ要ス

(一) 法文ニハ「贓物」物件トアルカ故ニ物以外ノモノ即チ權利ヲ包含セス然レトス苟クモ物タル以上ハ可動の物件タルト否ト犯罪者ニ屬スル物件タルト否トハ問フ所ニアラス例ヘハ刑法第三百七十一條ニ規定スル竊盜ノ贓物ノ如シ又其物件ハ直接ニ犯罪ニ依テ得ラレタル物ニ限ルカ故ニ例ヘハ竊取シタル目的物ト交換セラレタル他ノ物件又ハ其對價タル代金ノ如キ物ヲ包含セス但シ贓物ノ上ニ工作ヲ加ヘタル場合ニ於テ其

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八九三
 第六節 贓物ニ關スル罪

贓物ニ對スル原犯ノ種類

加工ノ爲メ新ナル所有權カ發生セサル限リハ贓物タルヲ妨ケス(民法第四百十六條)

(三)犯罪即チ處罰行爲ニ依テ得タルコトヲ要ス而シテ苟クモ處罰行爲タル以上ハ重罪、輕罪、違警罪ノ如何ハ問フ所ニアラス而シテ本法第四百一條ニハ詐欺取財其他ノ犯罪ト規定シアルヲ以テ苟クモ處罰行爲タル以上ハ財產ニ對スル犯罪タルト否トヲ問ハス總テ之ヲ包含スト解スルモノナキニアラスト雖モ贓物ニ關スル罪ハ犯罪ニ依テ得ラレタル不法ナル財產ノ狀況ヲ安固ナラシムル所爲ナルカ故ニ本罪ノ目的物モ亦他人ノ所有權其他財產ヲ侵害スル罪ニ依テ得タル物件ニ限ルモノト解セサルヘカラス而シテ本法第二編第三節官吏財產ニ對スル罪ニ依テ得タル物件ハ之ヲ包含スヘキナリ(第三百九十九條ニ所謂強盜盜下ハ行爲ノ性質ニ付テ判定スヘキモノニシテ罪名ニ依テ判定スヘキモノニアラス)

明治二十八年第二八七號同年三月十二日宣告大審院判決ニ依レハ公吏自ラ監守スル

委託物ノ消費ニ關スル罪ト關係ス

金員ヲ窃取シ刑法第二百八十九條及ヒ第二百九十一條ニ該當スル罪アル場合ニ於テ其贓金ノ一部ヲ受ケタル所爲ハ同法第三百九十九條ニ依テ處斷スヘキモノニテ同法第四百一條ニ依テ處斷スヘキモノニ非スト解セリ(?)

(三)犯罪ヲ直接ノ手段トシテ得タル物件タルコトヲ要スルカ故ニ本罪ノ所爲以前ニ於テ既ニ財產ニ對スル罪ノ成立シ終リタルコトヲ要ス故ニ例之ハ受寄ノ財物ヲ賣却スル場合ニ於テ本法第三百九十五條前段ノ委託物消費罪ハ賣買ノ合意ニ依テ成立シ賣買ノ申込ノミニテハ未遂ニ止ルカ故ニ情ヲ知テ之ヲ買取ル者ニ對シテハ贓物ヲ故買シタリトノ罪ヲ以テ論スルコトヲ得ス(明治三十五年(乙)第二〇三〇號同年十二月十五日合ニ於テモ尙之ヲ罰ス故ニ甲カ乙ヨリ委託セラレタル物件ヲ丙ニ賣渡サントシ其行爲ニ着手シタルトキハ既ニ犯罪行爲アリタルモノトス從テ其物件ハ賣買成立前既ニ委託物消費罪ニ關スル刑罰第四百一條ニ該當ナリ以テ其情ヲ知リ之ヲ故買シタル丙ノ所爲ハ刑罰第四百一條ニ該當スト解セルモ同列旨ハ贓物(但シ此ノ場合ニ於テハ故買者ハ費消ノ行爲ヲ獎勵シタリトノ理由ニ依リ委託物消費罪ノ從犯ヲ以テ論スヘキナリ(此場合ニハ委託者ト故買者トノ間ニ於テ適法ナル賣買ノ意思ナキカ故

親告罪ト
贓物

ニ委託物費消罪ヲモ構成セスト論スルモノアリト雖モ費消ノ手段ハ適法行為ニ限ルトハ法文ニ限定セラレサルノミナラス委託物費消ノ行為ハ常ニ不適法ニシテ假令買主カ善意ナル場合ニ於テモ犯人タル賣主ニ於テ常ニ適法ノ賣買ヲ爲スノ意思ナキコトヲ知ラハ其説ノ誤マレルコト明瞭ナリトス又此場合ニ於テハ贓物故買ト委託物費消罪ノ二罪俱發ナリトノ説アルモ其誤レルコトハ本文説明ニ依テ明瞭ナルヘシ然レトモ受託者カ受託物ヲ騙取拐帶シタル故ニ之ヲ他人ニ讓渡スルニ當リ情ヲ知テ收受後買スルモノアルトキハ本罪ヲ構成スヘキコト勿論ナリトス(監守盜ニ付テモ同シ)

(四) 親告罪ニ於ケル告訴ハ犯罪ノ構成要件ニアラスシテ訴訟條件ニ過キサルコトハ既ニ説明シタルカ如シ故ニ告訴ノ有無又ハ取消如何ニ拘ハラズ親告罪ハ既ニ成立シタルヲ以テ親告罪中財産ニ對スル罪ニ依リ得タル物件ハ其罪ニ對スル告訴ノ有無ニ拘ハラズ贓物タルコトヲ妨ケ

犯罪ノ
責任能力
贓物

ス

(五) 犯罪ニ依リ得タル物件タルコトヲ要スルカ故ニ犯罪ノ構成要件タル犯意又ハ責任能力ヲ缺キタル者ニ依リ行ハレタル所爲ニ依リ得タル物件ハ犯罪ニ依テ得タル物件ニアラサルカ故ニ贓物ニアラス從テ此物件ヲ故買スルモ贓物故買ヲ以テ論スルコトヲ得ス(若シ犯罪トハ處罰法規ニ違背スルノ所爲ニシテ行為者ニ於テ犯意及ヒ責任能力ヲ有スルト否トハ犯罪ノ成立不成立ニ關スル問題ニアラスシテ行為者カ責任負擔ノ原因ニ過キストノ説ニ從フトキハ本問ノ場合ハ贓物故買ヲ以テ論スヘシトノ結論ヲ生スヘシ余輩ハ此説ヲ採ラス(明治三十二年第五八八號同判決ニ依レハ十二歳以下ノ幼者カ寄ニ他人ノ財物ヲ持出シタル行為ハ犯罪ヲ構成セス從テ其物件ヲ收受スルモ贓物ニ關スル罪ヲ以テ論スルコトヲ得スト)然レトモ若シ其物件ヲ受託費消又ハ冒認處分スレハ委託物費消又ハ冒認罪ヲ以テ論スルコトヲ得ヘキナリ爰ニ注意スヘキハ犯人ノ身上ニ關スル特別ノ理由ニ依リ特別身分アル犯人ニ限リ其罪責

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八九七
 第六節 贓物ニ關スル罪

ヲ免除スル場合ハ犯罪ノ不成立ニアラスシテ既ニ成立シタル犯罪ニ對スル責任免除ニ過キサルコト是ナリ故ニ例ヘハ親屬相盜ノ目的物ハ竊盜ノ贓物タルヲ妨ケサルナリ(刑法第三百七十條說明參照)

明治三十四年(九)第一四七〇號同年十一月二十六日宣告大審院判決ニ依レハ親屬相盜「刑法第三百七十條」ハ竊盜罪アルモ之ヲ問ハストノ意ニシテ犯罪ヲ構成セストノ意ニアラス從テ其盜品ナルコトヲ知テ之ヲ寄藏シタルモノハ贓物寄藏罪ヲ構成スト解セルハ正當ナリ

(六) 犯罪ニ依テ得タル物件トハ物件ノ保有ヲ得又ハ之ヲ繼續スルコトニ依テ成立スル罪ノ目的物ニ限ルモノニシテ物ノ授受如何ニ拘ハラス行爲自體ニ依テ直ニ成立スル罪換言スレハ犯人カ犯罪ト前後シタル犯罪以外ノ行爲ニ依リ完全ナル所有權ヲ收得シ之カ返還ノ請求ヲ受クルコトナキ場合ニ於テハ其物ハ犯罪ニ依テ得ラレタル物件ト謂フコトヲ得ヌ例ヘハ賭博ノ賭錢密淫賣又ハ密淫賣媒合容止ノ報酬金ノ如キ何レモ物件ノ授受ヲ待タヌ其目的ヲ以テ授受以外ノ行爲ヲ爲スコトニ依テ

贓物ニ似テ非ナル物

直ニ各其罪ヲ構成スヘキモノナレハ此等物件ハ贓物ト云フコトヲ得ヌ此ト同一理由ニ依リ官吏公吏ノ收賄シタル物件モ亦贓物ト云フコトヲ得サルヘシ何トナレハ收賄罪ハ收賄ノ聽許ヲ以テ既ニ其罪ヲ構成シ賄賂ノ授受ハ其成立要件ニアラス又收受ヲ處罰スル場合ニ於テモ此場合ハ收賄ノ聽許ト同時ニ現物ノ授受アリタルニ過キスシテ收賄ノ聽許ヲ處罰スルノ主旨ニ外ナラサルコト明カナリトス且ツ民法第七百八條ニ依ルモ收賄ノ目的物ハ收賄者ノ所有ニ歸シ贈賄者ハ之カ返還ヲ請求スルノ權利ナク從テ同罪ニ關スル財産上ノ被害者ナキヲ以テ賄賂ハ到底贓物ト云フコトヲ得ヌ(反對論者或ハ曰ハン收賄罪ニ付テハ財産上ノ被害者ナシト雖モ法律ハ收賄ノ物件ハ之ヲ沒收スヘキコトヲ規定セルカ故ニ收賄ノ物件ハ贓物ヲ以テ論スヘキモノナリト然レトモ國家カ賄賂ヲ沒收追徵スルコトハ刑罰ノ一種ニシテ國家ハ此物ニ對スル所有權ヲ行使スルニアラス收賄ノ目的物ハ個人ノ所有ニシテ國庫ノ所有物ニア

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 八九九
第六節 贓物ニ關スル罪

ラサルコトヲ知ラハ反對論旨ノ誤レルコト明瞭ナリトス)

明治三十四年(レ)第一八〇六號明治三十五年三月廿八日宣告大審院判決ニ依レハ刑法第四百一條ニハ詐欺取財其他ノ犯罪ニ關スル物件トアリテ何等制限ノ存スルナクハ法文ノ解釋トシテハ收賄罪ニ因テ得タル物件ヲ除外シタルモノト見ルニ由ナキノミナラス之ヲ除外スル理由ノ存スヘキ謂ハレナシ然レトモ其他ノ犯罪トハ強窃盜若クハ詐欺取財等ノ如ク財物獲得ノ所爲自體ヲ不法トシテ罰スル罪ノ謂ニシテ之ヲ獲得スル方法ヲ不法トシテ罰スル罪ニアラス法文ニ詐欺取財其他ト記載シタルハ畢竟此趣旨ヲ明カニセンカ爲メニシテ財產權侵害ノ罪ヲ例示シタルモノニアラス從テ賄賂ノ贓物タルコト毫末ノ疑ナシト論セルモ誤見ナリ

第二 收受、故買、寄藏、牙保ヲ所爲アルコト

收受トハ汎ク贓物ノ保有ヲ得ルコトヲ意味シ其名義ノ如何ハ問フ所ニアラス例ハハ交換質取、受贈ノ類ヲ謂フ(贓品タル飲食物ヲ飲食スル場合亦然リ)

故買モ收受ノ一種タルニ過キス

寄藏トハ汎ク權利者ニ對シテ贓物ノ發見ヲ困難ニシ又ハ不能ナラシム

ルコトヲ謂フ

牙保トハ汎ク他人ニ對スル有償處分ニ加效スルコトヲ謂フ例ハハ賣買、質入、交換ノ周旋ヲ爲スカ如シ但シ物ノ引渡ヲ必要トス、贓物ヲ被害者ヘ賣買ノ周旋ヲ爲ス場合ニ於テモ本罪ヲ構成スルコトアリ得ヘシ例ハハ情ヲ知ラサル被害者ヘ販賣ノ周旋ヲ爲カ如シ

本罪ハ以上ノ行爲アリタルトキヲ以テ成立ス從テ一旦故買シタル物件ヲ更ニ販賣スルモ本罪ヲ構成セス然レトモ收受以下ノ所爲ハ贓物ノ犯人ヨリ直接ニ收受故賣スルコトヲ要セス例ハハ第二次ノ故買收受ニ付テモ同一贓物ニ關スル犯罪ヲ構成ス

第三 贓物タルノ情ヲ知リタルコト

行爲者ニ於テ其目的物カ強竊盜ノ贓物タルノ情ヲ知テ又ハ其他ノ犯罪ノ贓物タルノ情ヲ知テ之ヲ收受、故買、寄藏、牙保シタルコトヲ要スルカ故ニ此等行爲ノ後ニ於テ假令贓物タルノ情ヲ發見スルモ其以前ノ行爲ニ

犯意

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 九〇一
産ニ對スル罪 第六節 贓物ニ關スル罪

付テ責任ヲ負フコトナシ次ニ「贓物タルノ情ヲ知テ」トハ贓物ノ原因タル
犯罪ノ内容即チ犯罪ノ時日場所被害者等ヲ知リタルコトヲ要セサルナ
リ

明治三十一年第一一三五號同三十二年一月三十一日宣告大審院判決ニ依レハ竊盜ノ
財物ヲ隱匿遺失物ナリト信シ買買ノ牙保ヲ爲シタル者ハ罪本重カルヘクシテ犯ス時
知ラサル者ハ其重キニ得テ論スルコトヲ得ストアル刑法第七十七條ニ該當スト解セ
ルハ正當ナリ

本罪ハ前ノ犯罪ニ對スル共犯ニアラスシテ獨立ノ一罪ナルカ故ニ本條
ニ對シテ總則共犯例ノ適用アルヘク從テ最初犯罪ニ依リ贓物ヲ得タル
犯人ト雖モ亦本罪ノ共犯トシテ處罰セラル、コトアリ得ヘキナリ但シ
最初ノ犯人カ贓物ヲ藏匿又ハ處分スルコトハ前ノ犯罪ノ當然ノ結果ト
云フヘキカ故ニ假令此等ノ所爲アルモ本罪ノ主體トシテ罰スルコトヲ
得サルナリ(反之既ニ他人ニ轉帳シタル同一贓物ヲ收受故買スルトキハ
本罪ヲ構成スヘキナリ)

本罪ト關
係トスル

明治三十六年(レ)第一八八五號同年十月二十三日宣告大審院判決ニ依レハ竊盜ノ贓物
ヲ故買スルノ罪ハ刑ノモ犯人カ贓物タルコトヲ知テ之ヲ故買シタルニ因リテ成立ス
從テ竊盜犯人ニ對スル公訴並ニ私訴ノ時効ニ因リ消滅シタルヤ否ヤハ犯罪ノ成否ニ
何等ノ影響ナシト解セルハ正當ナリ

第七節 放火失火ノ罪

本節規定スル所ノ罪ハ第八節決水ノ罪第九節船舶ヲ覆没スル罪ト共ニ水
又ハ火ノ如キ強大無限ノ勢力ヲ擅ニ働カシムルコトニ依テ人ノ身體生命
若クハ財産ヲ傷害シ又ハ傷害スルノ危險ナル狀況ヲ發生セシムル所ノ行
爲ノ一種ニ屬スルモノナリ而シテ本節規定スル所ノ放火失火ノ罪ハ火ノ
燃燒力ニ依テ法律ニ規定セラレタル物件ノ全部又ハ一部ヲ毀壞スル所ノ
罪ニシテ本節第四百二條乃至第四百九條ニ於テ之ヲ規定シ第四百十條ニ
於テ放火失火ニ準スヘキ場合ニ付テ規定セリ即チ左ノ如シ
第四百二條ニ曰ク「火ヲ放テ人ノ住居シタル家屋ヲ燒燬シタルモノハ死刑
ニ處ス」

放火、失
火ノ罪
本罪ノ水

第四百三條ニ曰ク「火ヲ放テ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ燒燬シタルモノハ無期徒刑ニ處ス」

第四百四條ニ曰ク「火ヲ放テ廢屋及柴草肥料等ヲ貯フル屋舎ヲ燒燬シタル者ハ重懲役ニ處ス」

第四百五條ニ曰ク「火ヲ放テ人ヲ乘載シタル船舶汽車ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス」

其人ヲ乘載セサル船舶汽車ニ係ル時ハ重懲役ニ處ス」

第四百六條ニ曰ク「火ヲ放テ山林ノ竹木田野ノ穀麥又ハ露積シタル柴草竹木其他ノ物件ヲ燒燬シタル者ハ輕懲役ニ處ス」

第四百七條ニ曰ク「火ヲ放テ自己ノ家屋ヲ燒燬シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス」

第四百八條ニ曰ク「放火ノ罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スルモノハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス」

本罪ノ構成要件

第四百九條ニ曰ク「火ヲ失シテ人ノ家屋財産ヲ燒燬シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス」

以上放火失火ノ罪ノ構成要件ヲ舉クレハ左ノ如シ
第一 火ヲ放テ燒燬シタルコトヲ要ス

火ヲ放テ如何ナル程度ニ達シタルトキハ法文ニ所謂燒燬ト云フコトヲ得ルヤ即チ燒燬ト云フコトノ既遂未遂ノ限界ニ付キ現行刑法ノ解釋トシテ普通行ハル、所ノ說ニ依レハ燒燬トハ目的物タル家屋其他ノ物件カ火力ノ爲メ其原形ノ大部分ヲ失ヒタルトキ換言スレハ目的物體ノ通常ノ使用ヲ大部分不能ナラシムル程度ニ迄達シタルトキヲ以テ既遂トスト云フニアリテ例ヘハ家屋ニ付テ云ヘハ最早住居ニ堪ヘサル程度ニ至ラシムルカ如シ殆ント異論ナキカ如キモ吾輩ノ見ヲ以テスレハ法文ニ所謂燒燬トハ犯人ニ依テ附ケラレタル火力其媒介物タル燃料ヲ離レテモ仍ホ獨立シテ其燃燒力ヲ繼續シ得ヘキ狀況ニ達シタルトキヲ以テ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 九〇五
産ニ對スル罪 第七節 放火失火ノ罪

既遂ト解スヘキモノト信ス何トナレハ「燒燬」ナル文字ハ文理解釋ニ依ルモ普通論者カ説明スルカ如キ物件全部又ハ大部分ノ毀壞ヲ意味スルモノト解スヘカラサルノミナラス本節第四百十條及ヒ第四百十七條以下ニ所謂毀壞ナル文字ハ普通ノ解釋ニ依ルモ其物ノ用方ヲ全部又ハ一部不能ナラシムルノミヲ以テ足レリトシ必スシモ全部又ハ大部分ノ毀壞ヲ必要トセサルニ依テ見レハ「燒燬」ニ限テ全部又ハ大部分ノ毀壞ヲ要スト解スルハ明文ヲ無視シ好シテ同種ノ用語ヲ異議ニ解スルモノナリトノ誹ヲ免レサルヘシ

明治三十五年(レ)第一九七〇號同年十二月十一日宣告大審院判決ニ依レハ放火罪ハ故意ヲ以テ火災ヲ惹起シ因テ以テ公共ノ身體財產ニ重大ナル危害ヲ加フル最モ危險ナル犯罪ナリトス從テ該犯罪ノ既遂ナリヤ否ヤノ問題ヲ決スルニ付テモ亦犯人ノ行爲カ此危害ヲ生セシムルノ程度ニ達シタルヤ否ヤヲ以テ標準トスヘキモノトス從テ犯人ノ使用シタル燃燒物ノ作用ニ依リ家屋又ハ建造物ノ一部分ニ火ヲ發シ燃上リタル時ヲ以テ放火罪ノ既遂ナリトスト解セルハ正當ナリ

第二 燒燬ノ目的物ハ家屋其他本節ニ規定セラレタル物件タルコトヲ要ス

本節規定スル所ノ目的物件ハ即チ下ノ如シ(一)家屋(二)其他ノ建造物(三)廢屋及柴草肥料等ヲ貯フル屋舎(四)船舶汽車(五)山林ノ竹木田野ノ穀麥又ハ露積シタル柴草竹木其他ノ物件是ナリ

(一)家屋 家屋トハ人類ノ住居ノ用ニ充ツル目的ヲ有スル建造物ノ義ニシテ最初ヨリ住居ノ目的ヲ以テ建設セラレ、ト或ハ一時住居ノ用ニ充テラレタルトハ間フ所ニアラス故ニ例ヘハ學校、神社、佛閣、博物館ノ如キ建造物ト雖モ其一部ニ看守者等カ住居セルトキ又ハ臨時軍隊又ハ罹災者ノ住居ニ充テラレタルカ如キ場合ニ於テハ家屋ト云フコトヲ得ヘキナリ而シテ住居トハ場所ヲ區分スルト否ト又ハ一時的タルト永久的タルトヲ問ハス苟クモ人間カ秩序アル夜間ノ安眠ヲ取ル爲メニ供セラレタル場所ヲ意味シ建造物トハ苟クモ土地ト定着シ家根及ヒ牆壁ヲ有シ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 九〇七
 三對スル罪 第七節 放火罪ノ罪

人ノ住居
タル家屋

人ノ出入ニ適スル建築物ヲ總稱シ其存在カ一時的タルト永久的タルトハ問フ所ニアラス(普通竊盜罪中建築物從テ船舶汽車ノ如キ土地ニ定着セサル物ハ假令住居ニ充ツル目的アリト雖モ家屋ニアラス又邸宅中其外圍ノ保障物タル門戸牆壁ニシテ建築物ヨリ分離シタル部分ハ家屋ニアラス又其他ノ建造物ニモアラサルナリ(刑法四百十)八條參照)而シテ法律ハ家屋燒燬ニ付テハ更ニ之ヲ三個ノ場合ニ區別セリ(イ)人ノ住居スル家屋(ロ)人ノ住居セサル家屋(ハ)自己ノ家屋ヲ燒燬シタル場合はナリ

(イ)人ノ住居シタル家屋(刑法四百)二條參照トハ犯人以外ノ者カ現ニ住居ニ使用スル家屋ト云フノ義ニシテ其家屋ノ所有權カ犯人以外ノ者ニ屬スルト否トハ問フ所ニアラス(本條ハ主トシテ人ノ身體生命ニ對スル危險ヲ防止スル爲メノ規定ニシテ家屋ノ燒燬ニ依リ其所有權ヲ侵害セラル、モノアルト否トハ問フ所ニアラス從テ自己所有ノ貸家ヲモ包含ス又其犯人以外ノ者カ住居スル以上ハ犯人ノ家族雇人カ住居スル場合ヲモ包含ス

人ノ住居
セサル家屋

ルモノトス而シテ現ニ住居ニ使用スル家屋タル以上ハ放火ノ當時ニ偶々住居者カ不在ナルト否トハ問フ所ニアラス終リニ注意スヘキハ本條ハ人ノ住居スル家屋ニ付テノミ規定セルヲ以テ神社、佛閣其他說教禮拜ノ場所又ハ遊戯場ノ如キ時々人ノ現在スヘキ場所ト雖モ苟クモ人ノ住居ニ充テラレサル以上ハ假令人ノ現在スル間又ハ普通現在スヘキ時期ニ於テ之ヲ燒燬スルモ本條ヲ適用スルコトヲ得ス次條ニ依リ輕ク處罰スルコト、ナリ刑罰不權衡ノ非難ヲ免レサルナリ

(ロ)人ノ住居セサル家屋(刑法四百)三條參照 犯人以外ノ者カ住居セサル家屋ニ付テハ法律ハ其家屋カ犯人以外ノ者ニ屬スルト犯人ニ屬スルトニ依リ之ヲ區別シ第四百三條ニ所謂人ノ住居セサル家屋トハ犯人以外ノ者カ住居セサル他人所有ノ家屋ヲ指示シ從テ所有者ノ承諾ヲ得タルトキハ本罪ヲ構成セス而シテ犯人以外ノ者カ住居セサル犯人所有ノ家屋ニ付テハ第四百七條ニ於テ之ヲ規定セリ即チ第四百三條ハ直接ニ他人ノ家屋

日本刑法論(各論) 水論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 九〇九
 三對スル罪 第七節 放火ノ罪

自己ノ家屋

ヲ燒燬スル場合ニ關シ第四百七條ハ自己所有ノ家屋ヲ燒燬スルコトニ依テ間接ニ他人ノ家屋ヲ燒燬スルノ危險ナル狀況ヲ發生セシメタル場合ニ關スル規定ニシテ共ニ他人ノ所有權又ハ身體生命ニ對スル危險ナル狀況ヲ發生セシムル行爲ヲ處罰スルモノナリ

(ハ)自己ノ家屋トハ犯人以外ノ者カ住居セサル家屋ニシテ且ツ犯人ノ所有ニ屬スルモノヲ云フ蓋シ家屋ノ所有者カ自己ノ家屋ヲ燒燬スルニ付キ他人ノ權利ニ侵害ヲ與フル危險ヲ發生セシメサル以上ハ其所有家屋ヲ毀壞シタル手段カ火力ニ依リタリトノ一點ヲ以テ直チニ放火罪トシテ之ヲ處罰スヘキ立法上ノ理由ヲ發見セス而シテ本條之ヲ處罰スル所以ハ自己ノ家屋ヲ燒燬スル所ノ火力カ蔓延シテ他人ノ家屋建造物其他ノ財産ヲ燒燬スルノ危險アルヲ以テ(間接ノ放火)此危險ヲ防止スル爲メ特ニ本條處罰ノ規定ヲ設ケタルナリ而シテ本條ハ現實ニ此危險ヲ發生シタルヤ否ヤヲ審査セス常ニ此危險アルモノト看做シ自己ノ家屋ヲ燒

仙人ヲ教唆シテ家屋ヲ燒燬セシメタルトキノ處分

燬シタルノミヲ以テ直ニ之ヲ處罰スト雖モ立法論トシテハ須ラク各場合ニ付キテ其果シテ危險ヲ生シタルヤ否ヤヲ審査シ此危險ヲ發生シタル場合ニ於テ之ヲ處罰スルコト、スルヲ至當トス(但シ最初ヨリ他人ノ家屋財産ヲ燒燬スル爲メ其手段トシテ自己ノ家屋ニ放火シタルトキハ第四百二條乃至第四百六條ノ罪ノ着手ニシテ本條適用ノ限リニアラス)

他人ヲ教唆シテ被教唆者以外ノ者カ住居セサル教唆者ノ家屋ヲ燒燬セシメタルトキハ其被教唆者カ燒燬シタル家屋ハ燒燬者自身ニ對シテハ他人ノ家屋ナリト雖モ既ニ其所有者タル教唆者ノ承諾ヲ得タルモノナレハ直接ニ家屋ニ對スル他人ノ所有權ヲ侵害シタリト云フコトヲ得ス

從テ此場合ニ於テハ其教唆者被教唆者共ニ第四百七條ニ依リ處罰スヘキナリ(若シ此場合ニ於テ教唆者ノミカ住居シタル家屋ナルトキハ教唆者ハ教唆ノ當時ニ於テ引續キ住居スルノ意思ヲ止メタリト認ムルヲ至當トス)

家屋以外ノ建造物

(二)家屋以外ノ建造物(刑法四百三條參照) 本條ニハ建造物ヲ分テ人ノ住居セサル家屋ト其他ノ建造物トニ區別セルニ拘ハラズ、同法第四百七條ニハ自己ノ所有ニ屬スル家屋ノ燒燬ニ付テノミ規定シ自己ノ所有ニ屬スル家屋以外ノ建造物及其他ノ財産ヲ故意ニ燒燬スル場合ニ付キ規定ナキカ故ニ家屋以外ノ建造物ニシテ犯人ノ所有ニ屬スルモノハ單ニ之ヲ燒燬シタルノミニテハ處罰スルコトヲ得ストノ結論ヲ生ス

(三)廢屋及ヒ柴草肥料等ヲ貯フル屋舎(刑法四百四條參照) 廢屋トハ朽廢シテ使用ニ堪ヘサル總テノ建造物ヲ指示ス、柴草肥料等ヲ貯フル屋舎トハ柴草肥料及ヒ之ニ類似スル價格重大ナラサル物品ヲ貯フルノ用ニ定メラレタル小屋ヲ指示ス

(四)船舶汽車(刑法四百五條參照) 本條ハ船舶汽車ニシテ人ヲ乘載シタルモノト然ラサルモノトニ區別シ其刑罰ニ輕重ノ差ヲ設ケタリ但其船舶汽車ハ公眾ノ用ニ供スルモノタルト單ニ限定シタル人ノ使用ニ限ラレタルモノ

自己ノ所有ニ屬スル船舶汽車ニ放火スル場合

トハ問フ所ニアラス、次ニ本條第一項ニハ人ヲ乘載シタル云々トアリテ放火ノ當時船舶汽車中ニ人ノ現在シタルコトヲ必要トスルモ、立法論トシテハ假令偶々人カ現在セスト雖モ普通ニ人カ現在スヘキ時期ニ於テ之ヲ燒燬スルトキ又ハ人ノ住居ニ定メラレタルトキハ人ノ現在シタルトキト同シク處罰スルヲ至當トス

終リニ本條第一項ノ場合ニ於テハ苟クモ人ヲ乘載シタル船舶汽車タル以上ハ其所有者ノ何人タルヲ問ハズ本罪ヲ構成スト雖モ所有者ナキ場合モ亦然リ第二項ノ場合ニ於テハ人ヲ乘載セサル船舶汽車カ犯人以外ノ所有ニ屬スル場合ニ限リ本罪ヲ構成スルカ故ニ所有者ノ承諾ヲ得タルカ又ハ無主物ナルトキハ本罪ヲ構成セス(刑法四百七條參照)

(五)山林ノ竹木、田野ノ穀麥又ハ露積シタル柴草竹木其他ノ物件(刑法四百六條) 以上ノ物件ハ犯人以外ノ所有ニ屬スルコトヲ要スルカ故ニ犯人ノ所有ニ屬スルカ又ハ所有者ノ承諾ヲ得タルカ又ハ無主物ナルトキハ本罪ヲ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 九二三
 第七節 放火失火ノ罪

構成セヌ(刑法四百七條參照)

第三 犯意又ハ過失ニ出テタルコト

第四百二條乃至第四百七條ノ罪ハ犯人ニ於テ燒燬ノ結果ヲ發生シ得ヘキコトヲ豫見シテ(犯意目的物へ點火ノ原因ヲ與ヘタルコトヲ要ス從テ假令點火ノ原因ヲ與フルモ燒燬ニ至ラシメスシテ直ニ之ヲ消止ムル意思ニ出テタルトキハ本罪ノ犯意アリト云フコトヲ得ス(情婦カ情夫ニ逢ハンカ爲メ又ハ雇人カ雇主ニ對シ鐘火ノ功蹟ヲ誇ラン爲メニ往々此種ノ惡戯ヲ演スルコトアリ)

第四百九條ハ失火ノ結果他人ノ所有ニ屬スル所ノ家屋其他ノ物件ヲ燒燬シタル場合ヲ規定スルモノニシテ(過失ノ意義ニ付テハ過失殺傷罪ノ說明參照)法文ニハ「人ノ家屋財産ヲ燒燬シタル者ハトアリテ他人ノ所有ニ屬スル總テノ財産ヲ包含スルカ如キモ爰ニ所謂「財産」トハ以上各條ニ列記シタル家屋以外ノ物件ノミヲ指示スルモノト解スルヲ至當トス(刑法四百十條參照)失火

犯意

第四百九條

財產

失火ト過失殺傷

燒燬ノ目的物ニ關スル錯誤

同時ニ異種ノ物件ヲ燒燬シタル場合

ノ當時其場所ニ居合セタル人カ出火ノ爲メ死傷シタルトキハ第三百十七條以下ノ過失殺傷ト第四百九條ノ失火トヲ比照シ重ニ從テ處罰スヘキナリ(例へハ家人カ火災ヲ免ル、爲メ窓ヨリ飛下リタル爲メ死傷シ又ハ逃道ヲ失ヒ燒死スルカ如シ此ノ場合ハ法規ノ競合ナリ第四百十七條第二項參照)然レトモ火災ヲ救フ爲メ外ヨリ入來リタルモノ又ハ荷物ヲ取出ス爲メ更ニ屋内へ歸來リタルニヨリ燒死スルモ失火ノ結果ト云フコトヲ得ス終リニ放火犯人ノ豫見シタル燒燬ノ目的物ト實際ノ結果トニ於テ目的物ニ齟齬ヲ生シタルトキハ罪本重カルヘクシテ犯ス時知ラサルモノハ輕キ結果ニ付テ責任ヲ負フヘシ(刑法七十七條)反之人ノ住居スル家屋ナリト誤信シテ人ノ住居セサル家屋又ハ廢屋ヲ燒燬シタルトキハ第四百二條ノ未遂トシテ之ヲ處罰スヘキナリ

明治三十六年(即ち第四七九號同年四月十七日宣告大審院判決ニ依レハ人ノ住居シタル家屋ト人ノ住居セサル家屋ト相密接スルモノヲ共ニ燒燬セントシテ火ヲ放チ同時ニ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 九一五

之ヲ燒燬シタルトキハ人ノ住居セサル家屋ヲ燒燬シタル所爲ハ人ノ住居シタル家屋
ヲ燒燬シタル重キ犯罪中ニ包括シ刑ニ一罪ヲ構成セスト解シ此ノ場合ニ於テ重キ法

條ノミヲ適用スト解決シタルハ正當ナリ

第四百十條

第四百十條ニ曰ク火藥其他激發スヘキ物品又ハ煤氣井蒸氣罐ヲ破裂セシ
メテ人ノ家屋財産ヲ毀損シタル者ハ其故意ニ出タルト過失トヲ分チ放火
失火ノ例ニ照シテ處斷ス

本條ハ瓦斯又ハ水蒸氣ノ自然力ニ依テ人ノ身體生命若クハ財産ニ對シ危
險ノ狀況ヲ發生セシムルノ行爲ヲ處罰スルモノニシテ前數條ニ規定スル
所ト異ナル點ハ(一)其危險發生ノ手段カ火藥其他本條列記ノ力ニ依ルト(二)
法文ニハ人ノ家屋財産トアルヲ以テ自己所有ノ家屋ヲ破毀スルモ本罪ヲ
構成セス(第四百七條對照)而シテ法文ノ用字ニ付キ一二説明スレハ(イ)其他激發ス
ヘキ物品トハ點火傳火ニ依テ瓦斯又ハ水蒸氣ニ激烈ナル膨脹力ヲ惹起セ
シメ以テ其外圍ニ傷害ヲ與フル物質爆發物ヲ云フ而シテ點火ノ方法ニ依
ラスシテ此作用ヲ發生セシムルモノ例ヘハ蒸氣罐ノ如キハ之ヲ包含セス

激發スヘキ物品

特別法規

(目)財産トハ以上第四百二條以下ニ列記シタル家屋以下ノ物件ヲ指示ス(ハ)
「毀壞」ノ字義ニ付テハ本章第十節第四百十七條説明參照猶ホ爆發物ノ使用
ニ關シテハ明治十七年布告第三十三號爆發物取締罰則第一條ニ於テ治安
ヲ妨ケ又ハ人ノ身體財産ヲ害セントスルノ目的ヲ以テ爆發物ヲ使用シタ
ル者及ヒ人ヲシテ之ヲ使用セシメタル者ハ死刑ニ處スト規定セリ即チ該
罰則ハ刑法(明治十五年一月一日實施)第四百十條規定ノ一部ヲ變更シタルモノト云フ
ヘキナリ

第八節 決水ノ罪

決水ノ罪
水阻ノ水
質

本節規定スル所ノ決水ノ罪ハ放火ノ罪ト其性質ヲ同フシ本罪ハ其危險ノ
狀況ヲ發生シタル所ノ自然力カ水力ニ存スルノミ本節各本條ニ付キ説明
スレハ左ノ如シ

第四百十一條ニ曰ク堤防ヲ決潰シ又ハ水閘ヲ毀壞シテ人ノ住居シタル家
屋ヲ漂失シタル者ハ無期徒刑ニ處ス

第四百十條

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪 第三章 財 九一七
廣ニ對スル罪 第八節 決水ノ罪

若シ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ漂流シタル者ハ重懲役ニ處ス
本罪ノ構成要件ヲ擧クレハ左ノ如シ

第一 堤防ヲ決潰シ又ハ水閘ヲ毀壞スルコト

法文ニ「決潰」又ハ「毀壞」ト云フ共ニ同一ノ意義ヲ有シ物ノ實質ヲ害スルコトニ依テ堤防又ハ水閘水門樋ノ類ヲ包含シ水ヲ導引スル爲メニ施シタル工事ヲ指示スノ用方ヲ全部又ハ一部不能ナラシムルコトヲ意味ス從テ其實質ヲ毀壞スルコトナク單ニ水門ノ鎖鑰ヲ開キ之ヲ開放シテ洪水ヲ醸ス場合ハ包含セサルコトナルヘシ(法文ノ解釋上止ムヲ得スト雖モ現行法カ決水ノ手段ヲ此ノ如ク限定シタルハ一大缺點ト謂ハサルヘカラス)

第二 人ノ住居シタル家屋又ハ人ノ住居セサル家屋其他ノ建造物ヲ漂流シタルコト

即チ本罪ハ總テノ決水ヲ包含スルニアラス決水堤防水閘其他ノ方法ニ

依リ制限セラレタル水ノ自然力ニ對シ其制限ヲ排除シテ水ノ自然力ヲ自由ナラシムル行爲ヲ指示スノ結果其水力ニ依テ家屋其他ノ建造物ヲ漂流(流失)セシメタルコトヲ要ス從テ決水ノ目的タル水力ハ此結果ヲ發生セシムルニ足ルノ自然力ヲ有スル所ノモノタルコトヲ要ス是レ本節ハ他ノ法條ニ規定スル所ノ決水罪ト區別スヘキ要點ナリトス

第三 此結果ノ發生シ得ヘキコトヲ豫見シタルコト(犯意)ヲ要スルヤ勿論ナリトス

第四百十二條

第四百十二條ニ曰ク堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シテ田圃鑛坑牧場等ヲ荒廢シタル者ハ輕懲役ニ處ス

本條カ前條ノ罪ト異ナル點ハ決水ノ目的タル水力カ田圃鑛坑牧場又ハ之ニ類スル場所ヲ荒廢其實質ヲ毀損スルコトニ依テ殆ント其用方ニ堪ヘサラシムルヲ云フ但シ人工其他ノ原因ニ依リ再ヒ原狀ニ復スルト否トハ問フ所ニアラススルノ能力ト此結果ヲ發生セシメタルコトヲ要ス

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 九一九
產ニ對スル罪 第八節 決水ノ罪

第四百十三號

第四百十三條ニ曰ク他人ノ便益ヲ損シ又ハ自己ノ便益ヲ圖ル爲メ堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シ其他水利ヲ妨害シタル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

本條ノ構成要件ヲ擧クレハ左ノ如シ

- 第一 他人ノ便益ヲ損シ又ハ自己ノ便益ヲ圖ルノ目的(遠因)ニ出テタル
- 第二 堤防ヲ決潰シ又ハ水閘ヲ破壞シ其他水利ヲ妨害シタルコト即チ本罪決水ノ結果ハ水利ノ妨害ヲ醸スニ止マリ前二條ニ規定スルカ如キ實害ヲ生シ得ヘキ狀況ニ至ラサルモノヲ謂フ而シテ法文ニ「堤防ヲ決潰シ水閘ヲ毀壞シ」ト云フハ水利ヲ妨害スル行爲ノ一例ニ過キス以上例示ノ外ニ水利ヲ妨害ストハ例ヘハ新タニ堤防ヲ築キテ自己ノ田畑ヘ多分ノ河水ヲ引キ爲メニ他人ノ田畑ニ水ノ灌漑スルコトヲ妨クルカ如シ

水利ノ妨害

明治三十二年第一三三一號同年十二月十五日宣告大審院判決ニ依レハ水利妨害罪ノ成立ニハ水ノ使用ニ付他人ノ有スル權利ヲ妨害スルノ事實アルヲ必要トス從テ他人

カ權利ヲ侵シテ擅ニ水ヲ使用スルニ際リ自己ノ權利ヲ行使シタル結果其使用ヲ妨クルコトアルモ該犯罪ヲ構成スルモノニ非スト解セルハ正當ナリ

以上三ヶ條ニ規定スル罪ハ犯人ニ於テ其結果ノ發生ヲ豫見シタルコト(犯意)ヲ要スルヤ勿論ナリトス而シテ犯人ノ豫見シタル結果ト現實ノ結果ト齟齬シタル場合ニ付テハ前節放火罪ノ説明ヲ參照スヘシ

第四百十四條

第四百十四條ニ曰ク過失ニ依テ水害ヲ起シタル者ハ失火ノ例ニ照シ處斷ス

本條ハ過失ノ場合ヲ規定スルモノニシテ法文ニ所謂「水害」トハ本節第四百十一條乃至第四百十三條ニ列記スル水力ニ依ル損害ヲ總稱スルモノニシテ失火ノ例ニ照シ處斷ス「トハ失火ト同一ノ刑ヲ科スヘキコトヲ意味スルニ過キス一部ノ論者ハ失火ノ例ニ照シトハ第四百九條ニ火ヲ失シテ人ノ家屋財産ヲ云々トアルニ照シ本條ニ所謂「水害」トハ水力ニ依テ家屋財物ヲ實質的ニ毀損シタル場合ニ限ルヘキモノニシテ本節第四百十三條ニ規定

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財産ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 九二一
產ニ對スル罪 第八節 決水ノ罪

スル所ノ水力使用ノ便益ヲ妨害セララルルノミニテ財産ニ對シ有形的毀損ヲ與ヘサル場合ハ包含セスト解スルモノアリト雖モ失火罪ニ付テハ過失ニ依テ有意ノ放火罪ト同一ノ結果ヲ生シタル場合ニ於テ總テ之ヲ處罰スルニ拘ハラズ本條過失ニ依テ水害ヲ生シタルトキニ於テ有意ノ決水罪中第四百十三條ノ罪ニ相當スル結果ヲ生シタルトキニ限り何故ニ之ヲ處罰セスト謂フカ論者ノ解釋コソ却テ失火ノ例ニ違反シテ第四百十四條ノ罪ヲ斷スルモノト云フヘキナリ

船舶ヲ覆没スル罪

第九節 船舶ヲ覆没スル罪

第四百十五條ニ曰ク衝突其他ノ所爲ヲ以テ人ヲ乗載シタル船舶ヲ覆没シタル者ハ死刑ニ處ス但船中死亡者ナキ時ハ無期徒刑ニ處ス

第四百十六條ニ曰ク前條ノ所爲ヲ以テ人ヲ乗載セサル船舶ヲ覆没シタル者ハ輕懲役ニ處ス

本條規定スル所ノ罪ノ構成要件ヲ擧クレハ左ノ如シ

第一 衝突其他ノ所爲アルコト

第二 人ヲ乗載シタル船舶ニ付テハ其船舶ニ現在シタル人カ船舶ノ覆没ノ爲

メ死亡シタルトキハ殺人ノ意思ノ有無ニ拘ハラズ死刑ニ處シ船中ノ人カ死ヲ免レタルトキハ無期徒刑ニ處ス人ヲ乗載スル船舶ヲ覆没スル罪ハ他人ノ身體生命ニ對シ危險ノ狀況ヲ生セシメタル所爲ヲ處罰スルモノナルカ故ニ其船舶ノ所有者ノ有無竝ニ何人ニ屬スルヤヲ問ハス常ニ本罪ヲ構成スヘシト雖モ人ヲ乗載セサル船舶ヲ覆没スルノ罪ハ他人ノ船舶所有權ニ對シテ危險ノ狀況ヲ發生セシムル所爲ヲ處罰スルモノナルカ故ニ其船舶カ自己ノ所有ニ屬スルカ又ハ所有者ノ承諾ヲ得タルカ又ハ無主物ナルトキハ假令其船舶中ニ他人ノ財産ヲ乗載スルモ第四百二十一條ノ罪ヲ構成スルハ格別本罪ヲ構成セサルモノトス法文ニ所謂「覆没」トハ轉覆沈没ヲ意味シ單ニ船舶ヲ毀壞シ又ハ暗礁淺瀬ニ乗リ上ケ

自己ノ所
有ニ屬ス
ル船舶ヲ
覆没スル
場合

日本刑法論(各論) 本論 第三編 具體財産ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 九二三
第九節 船舶ヲ覆没スル罪

タルノミニテハ覆没ノ既遂ト云フコトヲ得ス
終リニ本節ノ規定ハ第四百五條ノ罪ト比スルニ何レモ船舶ヲ目的物トス
ト雖モ彼ハ燒燬ノ場合ニシテ此ハ燒燬ノ方法ニ依ラスシテ覆没スル場合
ヲ規定スルモノナリ次ニ第六十九條ノ罪ト對照スルニ彼ハ犯人ニ於テ
船舶ヲ覆没セシムルノ意思ヲク此ハ覆没セシムルノ意思アルコトヲ必要
トス其他本章第七節第八節ノ說明ヲ參照スヘシ

第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ

害スルノ罪

本節ハ不法ニ物質ヲ毀損シテ物ノ用方ヲ傷害シ又ハ滅盡スルコトニ依リ
テ他人ノ所有權ヲ侵害スル罪財物毀棄罪ト通稱スヲ規定スルモノニシテ
本節規定スル所ノ法條左ノ如シ
第四百十七條ニ曰ク人ノ家屋其他ノ建造物ヲ毀壞シタル者ハ一月以上五
年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

木罪ノ本
質

因テ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス
第四百十八條ニ曰ク人ノ家屋ニ屬スル牆壁及ヒ園池ノ裝飾又ハ田圃ノ樊
圍牧場ノ柵欄ヲ毀壞シタル者ハ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ
二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス
第四百十九條ニ曰ク人ノ稼穡竹木其他需用ノ植物ヲ毀損シタル者ハ十一
日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス
第四百二十條ニ曰ク土地ノ境界ヲ表シタル物件ヲ毀壞シ又ハ移轉シタル
者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加
ス
第四百二十一條ニ曰ク人ノ器物ヲ毀棄シタル者ハ十一日以上六月以下ノ
重禁錮ニ處シ又ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス
第四百二十二條ニ曰ク人ノ牛馬ヲ殺シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁
錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

日本刑法論各論 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 九二五
第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ植物ヲ
害スルノ罪

財物毀壞
件ノ構成要

他人ノ所
有物タル
コト

第四百二十三條ニ曰ク前條ニ記載シタル以外ノ家畜ヲ殺シタルモノハ二
圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス但シ被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス
第四百二十四條ニ曰ク人ノ權利義務ニ關スル證書類ヲ毀棄滅盡シタル者
ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
即チ本罪ノ構成要件ヲ擧クレハ左ノ如シ

第一 犯罪ノ目的物ハ法律ニ例記セラレタル他人ノ所有物タルコト
他人ノ所有物タルコトヲ要スルカ故ニ自己ノ所有物又ハ無主物ニ對シ
テ本罪ヲ構成セス所有者ノ承諾ヲ得タルトキ又同シ而シテ本罪ノ目的
物ハ他人ノ所有物タルコトヲ以テ足レリトシ金錢ニ見積リ得ヘキモノ
タルト否トハ問フ所ニアラサルナリ而シテ法律ニ列記スル所ノモノニ
付テ説明スレハ左ノ如シ

(一)家屋其他ノ建造物(若シ家屋建造物ヲ毀壞シタルニ因テ他人ノ死傷
ヲ來タシタル時ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス)第四百十

七條ニ付テハ別ニ説明ヲ要セスト雖モ家屋其他ノ建造物中ニハ之ニ附
着シテ其一部ヲ構成スル壁雨戸類ヲ包含スルモノトス(明治三十五年
三月十七日宣告大審院判決ニ依レハ家屋ノ出入口敷居ノ上ニ建テアル
雨戸ハ取外シ得ルモノト否トナリ同ハ家屋ノ一部ヲ成スモノトス從テ
之ヲ毀壞シタル所爲ハ家屋毀壞罪(刑法第百十七條)而シテ其家屋建造物中ニ人又
ハ物ノ現存スルト否トハ問フ所ニアラサルナリ

(二)人ノ家屋ニ屬スル牆壁及ヒ園池ノ裝飾又ハ田圃ノ樊圍牧場ノ柵欄(第
八百十條)

(イ)人ノ家屋ニ屬スル牆壁トハ家屋ノ一部ヲ構成セサル外圍ノ保障物ヲ
指示スルモノナリ(ロ)園池ノ裝飾トハ(イ)及(ハ)ニ對比シテ園池ノ裝飾トシ
テ土地ニ定着シタルモノト解スヘキナリ例ヘハ庭石燈籠噴水器ノ如シ
(ハ)田圃ノ樊圍牧場ノ柵欄トノミアリテ之ニ類似ノモノヲ包含セシメサ
ルカ故ニ運動場山林等ニ施シタル柵欄ヲ包含セス
(三)稼穡竹木其他需用ノ植物(刑法第四百十條參照)需用ノ植物トハ人ノ使用ニ供

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 九二七
產ニ對スル罪 第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ
害スルノ罪

セラルヘキ總テノ植物ヲ指示シ稼穡竹木ハ其例示ニ過キサルナリ例ヘハ野菜、煙草類ヲモ包含ス而シテ植物トシテ生存スルモノタルヲ要スルカ故ニ既ニ枯死シタルモノハ本條中ニ包含セス第四百二十一條ノ器物中ニ包含セラル、ナリ

(四)土地ノ經界ヲ表シタル物件(刑法第四百二) 刑法第四百二十條ニ於テ土地ノ境界ヲ表シタル物件ノ毀壞ニ付キ特別ノ規定ヲ設ケアルカ故ニ現行刑法ニ於テハ此等ノ物件ハ證書ト區別スルノ主旨ナリト解セサルヘカラス

「土地ノ經界ヲ表シタル物件」トハ所有權其他物件ノ目的タル土地ノ境界ヲ證スヘキ物件ト云フノ義ニシテ其物質ノ如何即チ天然物ヲ利用シタルト人工ニ依ルト又永續的タルト一時的タルト其所有ノ何人ニ屬スルトハ問フ所ニアラス(明治二十九年第九六八號同年十月二十三日宣告大審院判決ニ依レハ刑法第四百二十條ニ所謂經界ヲ標示スル物件ニハ唯唯ハ正當ナリ)然レトモ其境界ハ各當業者間ニ於テ合意ノ結果タルカ

又ハ正常ノ手續ニ依リ官公署ヨリ定メラレタルモノタルコトヲ要シ不正ニ定メラレタル經界ハ之ヲ保護セサルコトヲ注意スヘキナリ但シ刑法第四百二十一條ニ規定スル他人ノ器物毀棄罪ヲ構成スルコトアルヘシ) 現行刑法ニ於テ共同使用ニ係ル河流等ニ於テ使用水ノ分量ヲ表示スル測量杭ニ付テ前條ト同種ノ保護ヲ與ヘサルハ不權衡ナリ

(五)人ノ器物(刑法第四百二) 器物トハ本節中ノ法條ニ漏レタル凡テノ有體物ヲ總稱ス動産ニ限ラス生物タルト死物タルトヲ問ハス)

(六)人ノ牛馬(刑法第四百二) (七)牛馬以外ノ家畜(刑法第四百二) 是ハ豕、羊、犬、猫、兔、鶏、家鴨ノ如キ普通ニ

人ノ飼養ニ依テ生活スル所ノ動物ヲ指示ス而シテ獅子、虎ノ如キ野獸ニ屬スルモノハ假令一時人ニ依テ飼養セラレ、モ家畜ト稱スルコトヲ得ス本條ハ牛馬以外ノ家畜ヲ殺シタル罪ニ限リ被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論スルコト、セリ而シテ本罪ハ他人ノ所有權侵害ノ所爲ナルカ故ニ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 九二九
產ニ對スル罪 第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スルノ罪

本罪ノ被害者ハ目的物ノ所有者ニ限ルモノト解セサルヘカラス(反對説ニ本罪ノ被害者ハ物ノ所有者ニ限ラス其物ニ關シテ或物權又ハ債權ヲ有スル總テノ權利者ヲ包含スト解スルモノアリト雖モ此反對説ニ從フトキハ自己ノ所有ニ屬スル家畜ヲ殺シタル場合ニ於テモ若シ所有者カ其物ヲ他人ヘ貸與シタルカ又ハ之ヲ他人ヘ貸與スル契約ヲ爲シタルトキハ本條ニ依リ處罰セサルヘカラサルノ結論ヲ生スヘシ)

(八)人ノ權利義務ニ關スル證書類(刑法第四百二條參照)
人ノ證書トハ全ク他人ノ所有ニ屬スルカ又ハ他人トノ共有ニ屬スル證書ヲ指ス或ハ他人カ其證書ニ對シテ物權ヲ有スルモノヲ指スト謂フ説アルモ余輩ハ之ニ贊セス(文書偽造罪私文書說明參照)

第二 毀壞、毀損、毀棄、滅盡、殺害又ハ移轉ノ所爲アルコト
毀壞トハ物ノ實質ヲ害スルコトニ依テ其物ノ一定ノ用方ヲ全部又ハ一部不能ナラシムルコトヲ云フ(一部又ハ全部一定ノ使用ニ堪ヘサラシム

毀壞

ルコトヲ云フ)此ノ如ク物ノ實質ヲ害スルコト(固體、液體、氣體ヲ變體セシムル場合ヲモ包含ス例ヘハ氷ヲ融解シテ水ニ變スルカ如シ)ヲ要スルカ故ニ例令權利者ヲシテ永久ニ物ノ使用ヲ失ハシムルト雖モ其物ノ實質ヲ害セサル以上ハ毀壞ト云フコトヲ得ス例ヘハ他人ノ飼養スル禽獸ヲ逃走セシメ又ハ單ニ物ヲ水又ハ土中ニ埋ムルカ如キハ毀壞ニアラス又物ノ用方ニ從フテ之ヲ費消スルコト例ヘハ薪炭ヲ燃料ニ使用シ、花火ノ材料ニ點火スルカ如キハ毀壞ニアラスシテ横領ノ一種ナリ、又他人ノ動産ニ工作ヲ加ヘテ加工者カ所有權ヲ取得シタルトキ亦然リ(民法第二百四十六條參照)結合體例ヘハ家屋又ハ機械ノ如キニ付テハ其構成部分ノ一部ヲ毀壞シ又ハ其結合ノ狀態ヲ滅盡シ又ハ其一部ヲ毀テ結合ニ依ル作用ヲ害スルトキハ結合體ヲ毀壞シタリト云フヘキナリ次ニ毀壞ニハ目的物ノ價額ヲ減少スルコトヲ必要トセス

土地ノ經界ヲ表スル物件ノ毀壞中ニハ經界ノ表示力ヲ減少セシメ又ハ

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪輕罪 第二章 財 九三一
產ニ對スル罪 第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スルノ罪

滅盡セシムル行爲ヲ總稱ス、但シ權利者カ處分權ノ範圍内ニ於テ自己ノ
 經界ヲ減少シテ其經界表示物件ヲ移轉スルモ罪トナラサルヘシ全條ニ
 於テハ經界ヲ表示ル物件ヲ毀壞スルコトナクシテ之ヲ埋没スル所爲ヲ
 處罰セサルハ不權衡ナリ
 毀損トハ物カ需用ニ應スルノ能力ヲ害スルコトヲ謂フ例ヘハ他人ノ五
 穀ヲ收穫時期以前ニ伐截シ或ハ果實ヲ其成熟前ニ截リ取ルカ如キ其一
 例ナリトス

(三)毀棄滅盡 證書ニ表示セラレタル思想ノ内容ヲ全部認識スルコト能
 ハサルニ至ラシムルモノヲ滅盡ト謂ヒ其認識ヲ一部不明ナラシムルモ
 ノヲ毀棄ト謂フ即チ前者ハ證書ノ證據力ヲ全部消滅スルコトニシテ后
 者ハ證據力ノ一部ヲ減少スルコトヲ謂フ而シテ其手段ハ文字ノ抹殺刮
 磨其他種々アルヘキモ單ニ證書ノ物體ヲ毀損スルノミニシテ爲メニ證
 書ノ成立條件タル特別ノ形式ヲ害セサル限リハ毀棄滅盡ト云フコトヲ

得ヌ、文書偽造ト毀棄滅盡トノ間ニハ區別ヲ立ツルコト困難ナル場合ヲ
 生スヘシ例ヘハ商業帳簿中一部ノ記入ヲ削除シタル場合ニ於テ或ハ變
 造ナリト云ヒ或ハ毀棄滅盡ナリト云フモ商業帳簿ハ各個ノ記入毎ニ證
 書タルモノニシテ全部ノ帳簿ニ依リ初メテ證書ヲ組織スルモノニアラ
 サルカ故ニ本問ノ場合ハ毀棄滅盡ニ屬スト論スヘキナリフランドク氏、ビ
 ンゲン氏、
同說ニシテ獨逸帝國裁判所例ハ毀造脱ナリ而シテ自己ノ所有ノ證書ヲ毀棄滅盡スルモ罪ト
 ナラス反之假令自己ノ證書ト雖トモ行使ノ目的ヲ以テ變造行使スレハ
 罪トナルコトヲ注意スヘキナリ然レトモ毀棄ニ依テ文書ヲ變造スルコ
 トアリ得ヘシ例ヘハ債務者カ借金ノ内金受取證ノ文字中即チ「右金員ノ
 内何圓云々」トアル内何圓ノ文字ヲ抹殺シテ全部ノ受取證ナルカ如キ外
 觀ヲ現出セシメタルトキハ變造ト論セサルヘカラス
 現行刑法ニ於テハ證書ノ毀棄滅盡ノミヲ規定シ證書ノ所有者ヲシテ必
 要ナル時機ニ於テ之ヲ利用セシムルコトヲ妨クル行爲(藏匿、扣留)ヲ處罰

日本刑法論(各論) 本論 第三編 身體財產ニ對スル重罪 第二章 財 九三三
 毀損ノ罪 第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ勸輸物ヲ

セサルハ不權衡ナリ

殺害ニ付テハ別ニ説明ヲ要セス

第三 不法ノ意思アルコト

法文ニハ明示ナシト雖モ財産ニ對スル他ノ犯罪ニ付テ説明シタルカ如ク不法タルコトヲ知テ毀壞其他ノ所爲ヲ爲シタルコトヲ要スト解スヘキナリ故ニ例ヘハ自己ノ所有物ナリト誤信シテ他人ノ所有物ヲ毀壞スルモ本罪ヲ構成セス(竊盜罪ノ説明參照)

第四編 違警罪

違警罪

違警罪ト
犯罪ノ普通
要件ノ構成
要件

現行刑法ハ罪ヲ重罪、輕罪、違警罪ニ分チ(刑法第一條參照)是カ區別ノ標準ハ罪ニ科スヘキ本刑ヲ以テセリ(刑法第七條參照)從テ刑法總則ノ規定中特別ノ規定ナキ以上ハ總テ違警罪ニ付テモ其適用アルヘキヤ勿論ナリトス故ニ例ヘハ違警罪ニ關スル責任宥恕ノ年齡ニ付テハ刑法第八十三條ニ再犯加重ニ付テハ第九十三條ニ數罪俱發ニ付テハ第一百一條ニ於テ特別ノ規定アリ而シテ違警罪ノ教唆從犯及ヒ未遂犯ヲ處罰セサルコトハ第五條第九條第一百十三條ノ規定ニ於テ之ヲ明示スト雖モ犯罪ノ構成ニ關スル規定中特別ニ違警罪ニ關スル例外規定ナキヲ以テ重罪、輕罪ノ成立ニ必要ナル普通構成要件ハ違警罪ニ付テモ之ヲ必要トストノ結論ハ至當トス正當防衛、緊急狀態其他違法排除ノ原因及責任能力ニ關スル規定ハ違警罪ニ付キ適用アルヘシト雖モ第七十七條犯意ニ關スル規定中第一項ニ於テ「但法律規則ニ

違警罪ト
犯意

於テ別ニ罪ヲ定メタル者ハ此限リニ在ラストノ規定アリテ犯意ナキ所爲
ヲ罰スルニハ特別ノ規定アル場合ニ限定セリ而シテ本編違警罪ノ全部又
ハ一部ハ同條第一項但書中ニ包含セラル、ヤ否ト云フニ本法違警罪ノ規
定中明カニ犯意ヲ必要トセス過失ニ基ク所爲ヲモ之ヲ處罰スト規定シタ
ルモノナシ爰ニ於テ違警罪ノ成立ニモ猶犯意ヲ必要トスルヤ否ヤノ問題
ヲ生スヘシ而シテ此問題ヲ決スルニハ違警罪ノ性質ヲ明ニスルコトヲ要
ス

警察犯

近世刑法學者ハ罪ノ實質ニ付テ之ヲ刑事犯 (Kriminal Delikt) 及警察犯 (Polizei
Delikt) 又ハ (Polizeibehrehung) トニ區別シ之ニ科スヘキ刑罰ノ種類ニ依ラス
處罰行爲自體ノ性質ニ付テ之カ區別ヲ立テンコトヲ欲シ之カ區別ノ標準
ニ付テモ種々ノ學說アリト雖モ就中普通ニシテ最モ正鵠ヲ得タリト認ム
ヘキ說ニ依レハ警察犯ヲ左ノ三個ニ分類セリ

(一) 立法者カ或行爲ハ常ニ法益ヲ害シ又ハ害スルノ危険アリトシ其實

害又ハ危険ノ發生ヲ待タス其行爲自體ヲ禁止スルモノ換言スレハ其行
爲カ危険發生ノ危険アリト云フコトカ立法上處罰ノ理由トナリタルモ
ノ(危険發生危険罪 Gefährlichkeitsdelikte) トモ稱セリ) 而シテ彼ノ刑事犯中
立法者カ危険ノ狀況ヲ罪ノ構成要件トシ且ツ常ニ此危険狀況ヲ發生セ
シムルモノト看做シテ處罰スル所ノ罪(一般的危険罪 abstrakt Gefährdungs
delikte) トノ區別ノ標準ハ危険ノ狀況カ罪ノ構成要件ニアラスシテ其危険
ナル狀況ヲ發生セシムルノ危険アリト云フコトカ處罰ノ理由タルニ過
キサルナリ例ヘハ本法第四百二十五條第一號乃至第四號ノ如シ

(二) 公共ノ善良ナル秩序ニ背戾スルモノトシテ處罰スル所爲例ヘハ第
四百二十六條第十號第十一號ノ如シ

(三) 或特定ノ行爲ヲ強制スル爲メニ處罰スルモノ而シテ刑事犯ニ於テ
モ或作爲又ハ不作爲ヲ強制スル爲メニ刑罰ヲ科スルモノナリト雖モ彼
ハ法益ノ侵害又ハ危険ヲ防止スル爲メニシテ此ハ法律規則自身ヲ遂行

スル爲メニ必要ナル作爲又ハ不作爲ヲ強制スルモノナリ例ヘハ刑法第
四百二十五條第五號ノ如シ

即チ以上ノ分類ヲ綜合シテ警察犯トハ法律カ保護スル利益(法益)ヲ侵害シ
又ハ危險ノ狀況ニ致スコトヲ要セス單ニ法益ニ對スル危險アル狀況ヲ發
生セシムルノ危險アリトノ理由又ハ公共ノ善良ナル秩序ニ違背スル爲メ
又ハ特定ノ法規ヲ遂行スル爲メニ刑罰ヲ科スル所ノ行爲即チ罪ナリト定
義シ多數ノ學者ハ此種ノ犯罪ニ付テハ其性質上原則トシテ犯意ヲ必要ト
セス過失ニ依テ罪ヲ構成スト論セリ從テ警察犯ハ現行刑法第七十七條第
一項但書ノ場合ニ該當スル特別ノ犯罪ナリト論ス可キナリ

警察犯ノ成立ニハ原則トシテ犯意ヲ必要トセス過失ニ依テ罪ヲ構成スル
コトハ以上説明スルカ如シ而シテ違警罪ノ大部分ハ即チ警察犯ニ屬スル
モノニシテ又苟クモ警察犯ノ性質ヲ有スル以上ハ其重罪、輕罪ニ屬スルモ
ノト雖モ特別ノ規定ナキ以上ハ過失ニ依リ成立スト論スヘキナリ例ヘハ

警察犯ト
違警罪

第四百二
十五條

第二編第五章第三節傳染病豫防規則ニ關スル罪、第四節危害品及ヒ健康ヲ
害スヘキ物品製造ノ規則ニ關スル罪、第五節健康ヲ害ス可キ飲食物及藥劑
ヲ販賣スル罪ノ如キハ過失ニ依リ成立スルモノトス

第四百二十五條ニ曰ク左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ三日以上十日以下ノ拘留
ニ處シ又ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

- 一 規則ヲ遵守セスシテ火藥其他破裂スヘキ物品ヲ市街ニ運搬シタル者
- 二 規則ヲ遵守セスシテ火藥其他破裂スヘキ物品又ハ自ラ火ヲ發スヘキ物品ヲ貯藏シタル者
- 三 官許ヲ得スシテ煙火ヲ製造シ又ハ販賣シタル者
- 四 人家稠密ノ場所ニ濫リニ火煙其他火器ヲ玩ヒタル者
- 五 蒸氣器械其他烟筒火竈ヲ建造修理シ及ヒ掃除スル規則ニ違背シタル者

- 六 官署ノ督促ヲ受ケテ崩壞セントスル家屋壁牆ノ修理ヲ爲サ、ル者
 - 七 官許ヲ得シテ死屍ヲ解剖シタル者
 - 八 自己ノ所有地内ニ死屍アルコトヲ知テ官署ニ申告セス又ハ他所ニ移シタル者
 - 九 人ヲ毆打シテ創傷疾病ニ至ラサル者
 - 一〇 密ニ賣淫ヲ爲シ又其媒合容止ヲ爲シタル者
 - 一一 人ノ住居セサル家居内ニ潜伏シタル者
 - 一二 定マリタル住居ナク平常營生ノ産業ナクシテ諸方ニ徘徊スル者
 - 一三 官許ノ墓地外ニ於テ私ニ埋葬シタル者
 - 一四 違警罪ノ犯人ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者但被告人偽證ノ爲メ刑ヲ免カレタル時ハ第二百十九條ノ例ニ從フ
- 第四百二十六條ニ曰ク左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ二日以上五日以下ノ拘留ニ處シ又ハ五十錢以上一圓五十錢以下ノ科料ニ處ス

- 一 人家ノ近傍又ハ山林田野ニ於テ濫リニ火ヲ焚ク者
- 二 水火其他ノ變ニ際シ官吏ヨリ防禦ス可キノ求メヲ受ケ傍觀シテ之ヲ背セサル者
- 三 不熟ノ菓物又ハ腐敗シタル飲食物ヲ販賣シタル者
- 四 健康ヲ保護スル爲メ設ケタル規則又ハ傳染病豫防規則ニ違背シタル者
- 五 人ノ通行ス可キ場所ニアル危險ノ井溝其他凹所ニ蓋又ハ防圍ヲ爲サ、ル者
- 六 路上ニ於テ犬其他ノ獸類ヲ喉シ又ハ驚逸セシメタル者
- 七 發狂人ノ看守ヲ怠リ路上ニ徘徊セシメタル者
- 八 狂犬獸類ノ繫鎖ヲ怠リ路上ニ放チタル者
- 九 變死人ノ檢視ヲ受ケスシテ埋葬シタル者
- 一〇 墓碑及ヒ路上ノ神佛ヲ毀損シ又ハ汚瀆シタル者

- 一 神祠佛堂其他公ノ建造物ヲ汚瀆シタル者
 - 二 公然人ヲ罵詈嘲弄シタル者但訴ヲ待テ其罪ヲ論ス
- 第四百二十七條ニ曰ク左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日以上三日以下ノ拘留ニ處シ又ハ二十錢以上一圓二十五錢以下ノ科料ニ處ス
- 一 濫リニ車馬ヲ疾驅シテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
 - 二 制止ヲ背セスシテ人ノ群集シタル場所ニ車馬ヲ牽キタル者
 - 三 夜中燈火ナクシテ車馬ヲ疾驅スル者
 - 四 木石等ヲ道路ニ堆積シテ防圍ヲ設ケヌ又ハ標識ノ點燈ヲ怠リタル者
 - 五 瓦礫ヲ道路家屋圍圍ニ投擲シタル者
 - 六 禽獸ノ死屍ヲ道路ニ棄擲シ又ハ取除カサル者
 - 七 汚穢物ヲ道路家屋圍圍ニ投擲シタル者
 - 八 警察ノ規則ニ違背シテ工商ノ業ヲ爲シタル者

- 九 醫師穩婆事故ナクシテ急病人ノ招キニ應セサル者
- 一〇 死亡ノ申告ヲ爲サヌシテ埋葬シタル者
 - 一一 流言浮説ヲ爲シテ人ヲ誑惑シタル者
 - 一二 妄ニ吉凶禍福ヲ説キ又ハ祈禱符呪等ヲ爲シ人ヲ惑ハシメテ利ヲ圖ル者
 - 一三 私有地外へ濫リニ家屋牆壁ヲ設ケ又ハ軒楹ヲ出シタル者
 - 一四 官許ヲ得ヌシテ路傍又ハ河岸ニ床店等ヲ開キタル者
 - 一五 路上ノ植木市街ノ常燈及ヒ廁場等ヲ損シタル者
 - 一六 道路橋梁其他ノ場所ニ榜示シタル通行禁止及ヒ指道標ノ類ヲ毀棄汚損シタル者
- 第四百二十八條ニ曰ク左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日ノ拘留ニ處シ又ハ十錢以上一圓以下ノ科料ニ處ス
- 一 官署ヨリ價額ヲ定メタル物品ヲ定價以上ニ販賣シタル者

- 二 渡船橋梁其他ノ場所ニ於テ定價以上ノ通行錢ヲ取り又ハ故ナク通行ヲ妨ケタル者
- 三 渡船橋梁其他通行錢ヲ拂フヘキ場所ニ於テ其定價ヲ出サスシテ通行シタル者
- 四 路上ニ於テ博奕ニ類スル商業ヲ爲シタル者
- 五 官許ヲ得スシテ劇場其他觀物場ヲ開キ及其規則ニ違背シタル者
- 六 溝渠下水ヲ毀損シ又ハ官署ノ督促ヲ受ケテ溝渠下水ヲ浚ハサル者
- 七 制止ヲ肯セスシテ路傍ニ食物其他ノ商品ヲ羅列シタル者
- 八 官許ヲ得スシテ獸類ヲ官有地ニ放チ又ハ牧畜シタル者
- 九 身體ニ刺文ヲ爲シ及ヒ之ヲ業トスル者
- 一〇 他人ノ繫キタル牛馬其他ノ獸ヲ解放シタル者
- 一一 他人ノ繫キタル舟筏ヲ解放シタル者

第四百二十九條

第四百二十九條ニ曰ク左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ五錢以上五十錢以下ノ科

料ニ處ス

- 一 橋梁又ハ堤防ノ害ト爲ルヘキ場所ニ舟筏ヲ繫キタル者
- 二 牛馬諸車其他物件ヲ道路ニ横ヘ又ハ木石炭薪等ヲ堆積シテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
- 三 車馬ヲ並ヘ牽キテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
- 四 水路ニ於テ舟ヲ並ヘ通船ノ妨害ヲ爲シタル者
- 五 氷雪塵芥等ヲ路上ニ投棄シタル者
- 六 官署ノ督促ヲ受ケテ道路ノ掃除ヲ爲サハル者
- 七 制止ヲ肯セスシテ路上ニ遊戯ヲ爲シ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
- 八 牛馬ヲ牽キ又ハ繫クコトヲ忽カセニシテ行人ノ妨害ヲ爲シタル者
- 九 出入ヲ禁止シタル場所ニ濫リニ出入シタル者
- 一〇 通行禁止ノ榜示ヲ犯シテ通行シタル者
- 一一 道路ニ於テ放歌高聲ヲ發シテ制止ヲ肯セサル者

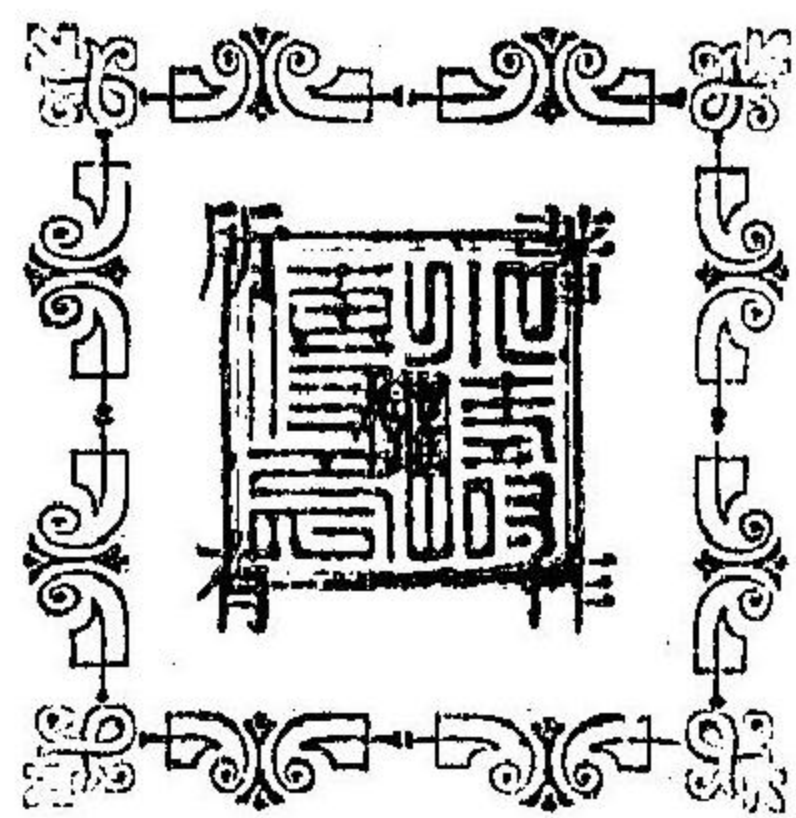
第四百三
十條

- 一 二 酩酊シテ路上ニ喧噪シ又ハ酔臥シタル者
 - 一 三 路上ノ常燈ヲ消シタル者
 - 一 四 人家ノ牆壁ニ貼紙及ヒ樂書シタル者
 - 一 五 邸宅ノ番號札招牌又ハ貸家賣家ノ貼紙其他報告ノ榜標等ヲ毀損シタル者
 - 一 六 他人ノ田野園圃ニ於テ菜葉ヲ採食シ又ハ花卉ヲ採折シタル者
 - 一 七 公園ノ規則ヲ犯シタル者
 - 一 八 通路ヲキ他人ノ田圃ヲ通行シ又ハ牛馬ヲ牽入シタル者
- 第四百三十條ニ曰ク「前數條ニ記載シタル外各地方ノ便宜ニヨリ定ムル所ノ違警罪ヲ犯シタル者ハ其罰則ニ從テ處斷ス」

日本刑法論(各論) 終

明治三十八年五月一日印刷
明治三十八年五月四日發行

日本刑法論(各論)與付
定價金貳圓五拾錢



著 者 小 疇 傳
發 行 者 葉 多 野 太 兵 衛
印 刷 者 島 連 太 郎
印 刷 所 三 秀 舍
東京市神田區今川小路二丁目四番地
東京市神田區美土代町二丁目一番地
東京市神田區美土代町二丁目一盤地

發 行 所 日 本 大 學 店
發 賣 元 清 水 書 店
東京市神田區(電話本局九六五番)今川小路二丁目

大府 東勉 東有 亞強 京斐 堂堂 堂關 有原 日岡 田本 崎屋 朋書 館店 中丸 大林 西倉 屋善 平店 彌新 同中 島橋 文野 屋堂 館店